



【發音】ヤ行第五の音。子音 γ が母音 o に結び附きて發す。その發音の方法位置に就きては、や及びおの條下に説けるが如し。【長音】は、よと記すとよと記すの兩法あり。本書にては、前者に依れり。【一語の中に、よの直後にう又はふの續く時は、通例、相合して、よの長音となる。例へば、よの善う。ようじ(用事)。かよふ(通ふ)をヨオ・ヨオジ・カヨオと發音する類。但し、そのふが四段活用の動詞の語尾なる場合には、口語にては、ふをウと發音し、直前の音と音節を分ちて發音す。例へば、かよふ(通ふ)。ただよふ(通ふ)をカヨウ・タダヨウと發音する類。【よをい列音の假名の下に記して、お列拗音を示すに用ふることあるは、やに説けるが如し。殊に、漢字の音にては、この場合、すべて拗音に發音すること、ちよしよ(著書)りよ(旅行)などの例の如し。【漢語の熟語にて、よの頭音を有する文字が、 n の韻を有する文字の直後に續く時、そのよが拗音ニョと轉呼せらるることある場合に就きては、にの條下を見よ。【い列音の下に續くお又はをの、よに轉することあり。おし(水押)みを(深)のみよしみよとなる類。

【字源】平假名よは漢字「與」(漢・吳音共に「ヨ」の別體なる「与」の草體變體。平假名をよとも同字の草體より出て、片假名「ヨ」は「與」の略體、又、萬葉假名としては、前記「與」「与」の外、字音に據れるものに「譽」「與」「余」「餘」「預」「豫」「用」「庸」「容」「欲」等、訓を取りたるものに「夜」「吉」「世」「代」「四」等あり。よ世【名】「よ(節)を見よ」【父子繼承して、位に居り、又は家督たる期間。だい。【代】「一人の帝王の國家を統治せる期間。だい。御代。御宇。治世。古今年は百(三)とせあまり、御は十つぎにさんなりける」【同一系統の帝王の父子兄弟等相繼ぎて、國家を統治し、又は、同一政體の主權者が政權を執れる期間。【四】とき。をり。時代。年代。時世。源氏「たゆむ世なき御祈のしるしにや」【一個人の生れより死ぬるまでの期間。生涯。一生。一代。源氏「御世の殘、久しくもおはせじ」【よはひ。年齢。萬葉君が代もわが代も知らぬ磐代(磐)の岡の草根をいざ結びてな」【人類の組織する社會。世の中。世間。世上。世界。人間。社會。置土(土)世の人のする程の事爲盡して」【人類の組織する社會又は國家に屬する人。世人。保馬(馬)左手(左)の臂、右手(右)に四寸延びて、矢束(矢)を引く事、世に超えたり」【主權者が治むる土地及びその住民。領國。國家。保馬(馬)この君、世を取らせたまはば、わが身、攝録に於いては、疑なす」【主權者が、土地及びその住民を治むること。政治。聖世(聖)のいそぎに、御暇もおはしまさねど」【世の中の狀態、風習又は形勢。世の風潮。世態人情。源氏「世に靡きたまへらんを」【世の中のものさく又忙しきこと。塵世。うきよ。俗世間。塵事。世事。宇治【世の營に紛れて」【よなみ(世並)に同じ。俗語「今年世が善うて穗に穗が咲いて」【男女のなからひ。よごころ。世の中。情交。源氏「若びたるものからよをまだ知らぬにもあらず」【(佛)三世(佛)の内の一。即ち、前世又は現世又は來世。萬葉「ひと世には再び見えぬ父母をおきてや永くあが別れなむ」

世【上(ひる)】【句】昔に遡る。(世下)に對して。増鏡「世あがりての事はさしおきぬ」【昔に遡るに從ひて、世の中の狀態まさる。世下(る)に對して。萬葉「世もあがりて、打續きすぐれたまへるは、申すべきならず」世ある【句】世に榮ゆ。時めく。萬葉「あはれや世ある時、惡所へ遣したる……實銀も」【同じ。世が末になる【句】「世下(る)」【世に世が世にてあれば【句】自己に取りて都合よき代なり。自分の榮ゆる時世なり。平家「今は、世が世にてあればこそ、世に頼もしげなうぞ仰せける」世下(る)【句】後代に近づく。後世になる。(世上(る)に對して)正統記「上古には、尊(尊)とも命(命)とも兼ねて稱しけりと見えたり。世下りては尊と申すことも見えす」【後代に近づくに隨ひて、世の中の狀態惡くなる。幾季となる。末世(世)となる。(世上(る)に對して)世と推移する【句】次條に同じ。世と推移す【句】「楚辭の漁夫辭に「聖人者不凝滯於物、而與世推移」とあるに本づく」自我を立てず、世のなりゆきに逆らはずして生活す。世と共に【句】世のあるかぎり。佳吉「世と共に烟絶えせぬ富士のねの下の思わが身なるらん」【同じ。世と俯仰す【句】「世と推移す」に同じ。世と浮沈す【句】前後に同じ。世に逢ふ【句】「世に逢ふ。世に用ひる。時にあふ。志を得。時めく。源氏「世にあひ、花やかなる若人にて」世に餘さる【句】世に容れられず。零落す。方丈「時を失ひ、世にあまきされて、期(き)するところなき者は」世に餘る【句】世の中に残り溢る。源氏「斯くの世に餘るまでひびかし營みたまふは」

世に在り【句】「生存してあり。存生す。其「世にある程、聊かの暇なき人」【世に、この人ありと知らる。榮えてあり。時めきてあり。(世に無しに對して)後拾遺「今宵こそ世にある人は懷しけれいづこも斯くや月を見るらん」世に出づ【句】「世の中にあはれ出づ。所在知れざりし物、再び知らる。【佛】しゆせ(出世)を見よ」諸佛、衆生濟度のため、淨土を捨てて、假に人間界に出現す。この世に生れ出づ。古今「我を知れ釋迦牟尼佛の世に出てきやけき月の世を照らすかな」【世に身に。平家「實基(基)も、鎌倉殿の御時に世に出てけるとぞ聞えける」世に容れらる【句】世の人人より親しまれ尊ばる。世に逢ふ。世に墮つ【句】「たら(墮落)を見よ」還俗(俗)に落す。落つ。東海「道名所、淨藏貴所といふ人、出家して……帝の仰に、世におちて、妻子を持てり」世に御座(す)【句】次條に同じ。源氏「都(歸)り上りて、再び世にもや御座さんずらん」世に御座(す)【句】「世に在り」の敬語。源氏「平家を討ち亡ぼして、世におはせよ」世に從ふ【句】「世に連(る)に同じ。紫式部日記「よなきあて人も、皆、世に從ふなるを」世に知らず【句】「世に無し」に同じ。萬葉「冬は、いみじく寒き、夏は、世に知らず暑き」萬葉「世に知らぬ心の間に惑ひたまふも、ことわりなるべし」世に立つ【句】「立つは四段活用」世に出て、然るべき地位に立つ。立身す。源氏「佐殿(殿)世に立ちたまひたらん時」世に立つ【句】「立つは下二段活用」世に出して、然るべき地位に立たしむ。源氏「せめても、義仲を世に立てんと思ふ心の深かりければ」

世に仕ふ【句】宮仕す。方考世に仕ふる程の人誰か、ひとり古郷に残りをらん」

世に即【句】即くは四段活用。國語に「閭閻即世」とあり。一世を終ふ。死ぬ。

世に即【句】即くは下二段活用。即即せさせ奉る。天皇と立て申す。太平記君を御世【句】に即け参らせんと。世に連【句】る【句】時世の變遷に伴なふ。世の風潮を追ふ。世に従ふ。丹波與作「世につれるとは云ひながら、さもし心にならんした」

世に留まる【句】生きながらふ。死なずにゐる。生存す。源氏「世にとまるとき程は、限あるわざなりければ、死なれぬもあさまし」

世に無し【句】世の中に無し。この世に存在せず。芭蕉鳥などの上は見入れ、聞き入れなどする人、世に無しかし。世の中に、又と無し。無比なり。言ひ知らず無類なり。譬へん方なし。源氏世に無きよなる玉の男御子さへ生れたまひぬ。世の中に、この人ありと知らることなし。時にあはず零落してあり。世に在りに對して、源氏世になきふるめき人にて」

世に靡く【句】時めける人の勢に従ふ。權勢に屈服す。源氏親しう仕うまつり、世に靡かぬ限の人、人」

世に馴る【句】よなる【世馴る】に同じ。源氏まだ世に馴れぬは、五六の君ならんかし」

世に似す【句】世に無し【句】に同じ。世に似るに見たまへしに、世に似ずなん侍りける」

世に經【句】この世に在り來る。生き長らふ。生存す。古今花の色は移りにけりないたづらにわが身世に經る詠めせしに。世を知る【句】に同じ。後撰靡く方ありけるものを、なよ竹の世に經ぬものと思ひけるかな」

世に隔たる【句】世の中の榮華、權勢より遠ざかる。世に逢ふを得ずなる。榮華おほやけ目に、世に隔たりて、その恨の末などより事起るなりけり」

世に廻【句】廻る【句】愛き世に廻る【句】に同じ。玉葉小車【句】のりの敷を頼まずばなほ世に廻る身とやならまし」

世に許さる【句】世間より見許さる。源氏世に許さる程、枯れたりし木の春にあへる心地して」

世の【句】世の中の。世間の。續傳「世の實は、醫者智者福者といへり」日本水代藏「世の風儀を見るに」世の人の。源氏世のおほえ花やかなる御方方。同世のおもしろ物したまへる大臣【句】世の常の。世間なみの。狂言急世「世の盗人とはちがうて、心のやさしい所がござる」

世の親【句】世の人人を愛撫するを、親の子に於けるに譬へていふ語。世の父母。大鏡内大臣の御母、みかど、東宮、はた申さず、大かたの世の親にて、二所ながら、さるべき權者【句】にこそおはしますらめ。榮氏人を悦ばしめたまひて、世の親とおはします」

世の限【句】齡の續くかぎり。一生涯。世のことごと。萬葉立ちしなふ君が姿を忘れずば世の限にや戀ひわたりなむ。齡の最後、一生のをはり、今のはの際。最期【句】若鳥母親、焦れて、世の限と知らせて、代筆の文【句】見しより」

世の悉【句】世の限【句】に同じ。記「沖つ鳥鳴どく島にわが率疑【句】妹は忘れじ世のことごと」

世の三寶【句】佛教にていふ三寶に擬したるもの。女房と鐵砲と佛法とは、世の中の貴きものなり。【諺語】

世の末【句】末の世。後世。後代。【まつせ】末世【句】に同じ。宇治まことの佛の、世の末に出て給ふべきにあらず」

世の中は、盲千人目明千人【句】世

間には聰明の人すくなし。世の後【句】死後【句】に同じ。源氏「人、怪しと思ひ苦はせんを、わが世の後さへ思ふこそ苦しけれ」

世の父母【句】世の親に同じ。聖德「世のちちは、佛になり給へりし日」

世の塵【句】世の中に常に有る物事と異ならぬこと。格段ならぬこと。普通。源氏「源氏、何事も世の常に有る宮なれば、何事も世の常に有る世ならん」次條の略。甚憎しとは世の常に愛敬なし」

世の常なり【句】云云といひては、普通の程度の言葉にて、未だ實際を言ひ表はすに足らず。疎【句】かななり。甚いみじめてたしといふも、世の常なり」大鏡めでたしといふも、世の常なり」

世の遠人【句】世の長人に同じ。世の燈火【句】世を治め導く人を、燈火の闇を照らすに譬へていふ語。榮花「世のともし火消えさせたまひぬれば世の取沙汰は七十五日【句】人の噂も七十五日【句】に同じ。【諺語】

世の中の事を行ふ【句】世を行ふに同じ。正統源義仲……兵威盛んなるを以て、世の中の事をおさへ行ひけり」

世の長人【句】世の中を最も長く經たる人。長壽の人。世の遠人【句】に同じ。【諺語】こそは世の長人」

世の中を過ぐ【句】世を渡るに同じ。宇治この金を取りて、世の中を過ぐべしと、嬉しくて」

世の後【句】後の世。後世。後代。【ごせ】後世【句】に同じ。一代女もはや五十九になりて、十七といふ事は四十二の大偽【句】世の後に、鬼が咎めて、舌を抜くべし」

世の光【句】一國の上首の地位に立つ光榮を、燈火の光に譬へていふ語。榮花「殿の内には、はじめて、世の光を取出してさせ給ひしよりはじめ」

世の響【句】世の中の評判。榮氏「つらにも、さやうにこそはあらめと思しつらんに、かく世のひびきにより、引き違おほしおきつるにこそあらめ」

世の別【句】死にて、この世を別るること。世の中の見納【句】。五人女一たびこの恨を言はてはと思ひ立つを、世の別と、人人に深く隠して」

世始まる【句】天地開闢す。世界はじまる。【國家成立す】。榮氏世はじまりて後、この國のみかど六十餘代にならせたまふ」

世は流渡【句】世の中流渡に同じ。【諺語】「世を見よ。世は情【句】旅は道邊【句】世は情【句】世は七下【句】七上【句】七【句】七【句】八起【句】に同じ。【諺語】

世は早【句】斯う【句】世の中は、最早これにて終なり。平家小松殿へ馳せ参りて、世ははや斯う候と申しければ」

世は張物【句】世間は張物に同じ。【諺語】「張物持參の敷銀にて跡を立てたまへ。近頃恥しけれども、世は張物、かへすがへす頼む」

世は人の持つに非ず、道理の持つなり【句】世の中は、萬事、道理に叶ると然らざるとによりて決す。【諺語】盛衰田舎待に小文【句】を教へられしを聞けば、世は人の持つに非ず、道理の持つなりといふ事を讀まれき」

世は萬年の貯【句】安樂なる生活は、萬年も支ふるに足る程の貯蓄ありて得る。【諺語】新米代無くて叶はぬ金錢、……世は萬年の貯といひしこそ面白けれ」

世は元徳【句】世の人は、事に觸れて、過去を思ひ出づるものなり。秀鳥鳴くやいかに世は元しのびととぞきす」

世響く【句】世人の評判となる。源氏「御遊などを、好ましう世の響くばかりせさせたまひつ」【諺語】

世亂れて、忠臣顯る【句】次條に同

世亂れて忠臣を識る【句】『唐書の崔固傳に「世亂識忠臣」とあり』國亂れて、忠臣顯るに同じ。【諺語】世を擧ぐ【句】「世を擧る」に同じ。世を出づ【句】「世を遁る」に同じ。千載「越えやらで懸路に迷ふ途坂や世を出てはてぬ關となるらん」

世を送る【句】世に經て、月日を送る。生存す。生活す。狂言集かづき「今少し連歌を仕覺えて、各の宗匠もするならば、世を送るたづきになるまいものではない」

世を行ふ【句】世を治む。國政を執る。正統駕執柄、世を行はれしかど、宣旨・官符にてこそ天下の事は施行せられしに

世を重ね【句】何代も續く。正統駕子孫は、さほどの心あらじなれど、堅くしける法のままだに行ひければ、及ばずながら世を重ねしにこそ」

世を變ふ【句】「生の」を變ふに同じ。源氏「世をかへても、對面せまほしき心附きて」

世を下【句】「世を去る」に同じ。世を擧【句】「世の人、皆爲す。世を籠む【句】よもゑも（世籠る）に同じ。源氏「殘少き齡の人だに、……世をこめたるさかりには、終にいかがとなん見たまへはべるを」

世を避く【句】『論語の憲問篇に「賢者辟世、其次辟色、其次辟言」、史記の滑稽傳に「富貴中可ニ以避世全身。何必深山之中、菽藿之下」とあり』世を遁るに同じ。太平記「身を捨てて、世を避くる人となりて」

世を去る【句】「世を遁る」に同じ。源氏「世を去らんきさみ、心苦し、みづからのために淺からぬほだしになんあるべき」

世を認【句】「世を行ふ」に同じ。増鏡「法皇は、……世をしたためさせたまふ事、いとかしこゝろ明らかにおはしませば」

世を忍ぶ【句】「世を避く」に同じ。世を知る【句】「世の中の事を知り辨ふ。世情を解す。千載「命あらばいかにせん世を知らぬ蟲だに秋は鳴きにこそ鳴け」

世にこ【句】「世にこる」に同じ。男女の情を解す。いろけづく。源氏「ひたぶるに若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず」

世を行ふ【句】世を行ふに同じ。榮西殿の御前、世を知りめさせたまひて、盛衰たとひ命は亡ぶとも、義仲が世を知らんこそ大切なれ」

世を過す【句】「世を渡る」に同じ。世を捨つ【句】「莊子の達生篇に「夫欲免爲形者、莫如棄世」とあり」

「世を遁る」に同じ。源氏「もとよりいと鮮やかならぬ御おぼえなりしかば、世を捨てさせたまふ際」

とて、世を捨つれども身を捨てず【句】世を捨つる者はあれども、生命までも捨つる者は稀なり。【諺語】平家人の身に、命ほど惜しきものは候。されば、世をば捨つれども、身をば捨てずとこそ申し傳へて候なれ」

世を背く【句】「世を遁る」に同じ。千載「世をそむかんと思ひ立ちける頃詠める」

十訓「世を恨みて出家して後、同じく先だちて、世をそむける人の許へ言ひやりける」

世を助く【句】世の状態をよくなるために、力を借す。新千載「時あれば谷より出づる鶯に世をたすくべき人を問はばや」

世を保つ【句】即位して、或時期の間、國を治む。大鏡「花山院天皇、……世を保たせたまふこと二年」

平家帝王の御世を保たせたまふ御事も」

世を盡【句】「一生を終ふ。死ぬるまで續く。源氏「雪の浪、烟の波の幾重とも知らぬ境に世を盡したまふべき御さども」

同「かかる處に世を盡したまひけん御心の内、いかばかりなりけん」

世を慎む【句】世間を憚る。増鏡「帝（

）遠く遷らせたまはん程、……、春宮（）は、世をつつしみて、六波羅に渡らせたまふ」

世を慎【句】「前條に同じ。源氏「あながちに世をつつむも、さすがにいとほしければ」

世を取る【句】「世を行ふ」に同じ。榮西殿宗盛の卿は、この年の程までは、兵衛佐にてこそおはせしに、これは上達部（）に至りたまへり、世を取る人の子と云ひながら、いちはやくぞ覺えし」

世を支配する權を掌握す。平家源氏滅びて平家、世を取れり」

世を遁る【句】世の中のうるさき物事を避けて、隱遁又は出家す。世を避く。世を去る。世を捨つ。世をそむく。世を離る。源氏「世をのがれて後、白河の花を見て詠める」

世を離る【句】前條に同じ。源氏「かく世を離るの際」には、心苦しき事のおのづから多かりけるを」

世を早うす【句】「世を早くす」の音便。源氏「舞臺（）衣更著（）後、後の五日に、世を早うすと聞えし書丞相にておはします」

世を早うなる【句】次條に同じ。五人女「いかなる上臈か、世を早うなりたまひ、形見もつらしと、……、途ひ見ぬ人に無常おこりて」

世を早くす【句】天壽を全うせずして死ぬ。わかじにす。早世す。正統記「昭帝、世を早くしたまひしかば、昌邑王を立てて、天子とす」

世を響かす【句】世の響とならしむ。世の中の評判とならしむ。榮西心のままに、世をひびかしては、えもてなされたまはざらまし」

大鏡「斯く世をひびかす御孫の出はおはしたる、亡（）き跡にも、いとよし」

世を詔ふ【句】世の權勢に媚ぶ。平家「さこそ世を詔ふ習とはいひながら」

世を經【句】「女男と婚す。伊勢「女の、まだ世經ずとおぼえたるが」

世を經て【句】「長き歲月の間續けて。古今風吹けど所もさくらぬ白雲は世をへて落つる水にぞありける」

一生涯。源氏「世を經て、疎く恥かしきものに思ひて過ぎはてたまひぬるなど、悔しきこと多く思しつづけるれど」

世を食る【句】利慾・愛慾にまつはられて、命を惜しむ。徒然「ひたすら世を食る心の深き、物の哀も知らずなりゆくなん淺ましき」

世を世とせず【句】世を侮る。不遇の心を抱く。義經「馬官・院宣にも從はばこそ、……、いよいよ世を世とせずなりけり」

世を別る【句】「世を遁る」に同じ。源氏「世を別れ人なりなん道は後るとも同じ所を君も尋ねよ」

世を渡す【句】「世の中の人を濟度す。元龜集「世をわたす聖（）」をさへや惱まん深き願のならずなりせば」

家の跡目を譲る。家業・財産を繼がしむ。薩摩「智に取つて、世を渡いたが先頃」

陶算「子孫に世を渡し」

世を渡る【句】生活してゆく。渡世をなす。くらす。五人女「松露・土筆（）」を手籠（）に入れて、世を渡る業とて賣り來れり」

よ夜【名】日没より日出までの間。一日の中にて、その土地の、太陽の光の照らぬ間。よ夜間。

夜が明けたら、巢を作らう【句】『巢は、夜明ければ、眼の見えぬ鳥なるに拘らず、夜間巢を作る事を怠りて、翌日を頼みつつ斯く鳴くとていふ』

「巢の背工」に同じ。【諺語】夜、直【句】「一夜の間、引き續きて。よもすがら。終夜。古今「わが如く物や戀しきほととぎす時ぞともなく夜ただ鳴くらん」

夜と共に【句】終夜に互りて。義經「五條の天神に參りて、夜と共に祈念申しけるは」

重井「夜が寢られぬに、夜と共に話さう」

夜に入る「句」夜になる。日暮る。源氏「夜に入りてまかてたまふ」夜に隠る「句」夜に紛るに同じ。貴之重夜に隠れ来るかひなくもみち葉の月はあかくも照りまさるかな」空穂「夜に隠れて出て立ちたまふ」夜に乗す「句」夜の暗さを幸として、事を爲す。夜に包む「句」夜に紛るに同じ。源氏「夜につみて出て立ち急ぎたまふ」夜に爲す「句」夜に入らしむ。事を爲して、夜に至る。いねし紅葉……早く見暮しはべりて、夜になして出てはべる」とて「夜に乗す」に同じ。朝思集天の月のある間（こ）をだに許されてまた夜に乗りて歸りぬるかな」夜に紛る「句」夜の暗さに身を隠す。夜陰に紛るはす。夜に増し「句」一夜ごとに増し加はりて。若風盈嬌しき寝間を離れ、夜に増し昔の氣力になりぬ」夜の方「句」よあけがた（夜明方に同じ。一代男、夜の明方に、めいめい宿に歸りて」夜の明けたらんやう「句」心のはれやかになる形容。増し皇子御誕生ぞやと、いと高らかに宣ふを聞く人々の心ち、夜の明けたらんやうなり」夜の明けぬる心地「句」前條に同じ。増しえも言はぬ玉の男御子（う）生れたまひぬ。大臣（み）北の方の御心の中、思ひやるべし。今ぞ夜の明けぬる心ちしたまふ」夜の御殿「句」夜（の）の御殿に夜の悉（こと）「句」夜の全部。よもすがら。終夜。萬葉夜はも夜のことがと晝はも日のことと」夜の錦「句」夜（の）の錦に同じ。若風（兄若衆（若）の面影に氣を移し、入日に名残を惜しみ、あたら夜の錦と獨言」夜の紛（ふ）「句」夜に紛るること。よ

夜の政「句」夜間、國土を統治・守護すること。正統次に、月神を生みます。その光、日に次げり。天に上せて、夜の政を授けたまふ」夜の守、晝の守「句」晝夜のまもり。晝の守、晝の守に守り奉（こ）り、晝の守と守護せしめたまへ」夜の目、朝（あ）の目も合はせず「句」夜（の）目も合はせず「句」晝夜も眠らず。狂言（兼）悉皆ある坊主は、夜の目の目が寝られぬと見えたと」夜の目も合はせず「句」次條に同じ。夜の目も眠らず「句」夜も眠らず。不眠のまま、夜をとほす。吉野郡女踊夜の目も寝ずの大事の番」夜の目も眠らず「句」前條に同じ。夜深し「句」よふかし（夜深し）に同じ。源氏「夜はまだ深からんとはとて、起きたまふなり」夜も日も明けず「句」その人に依るに非ざれば、暫時も過すを得ぬ程に、或人を深く愛する形容。夜を明かす「句」寢ずして、夜あけに至る。徹夜す。夜を籠む「句」よももある（夜籠る）に同じ。後馬よをこめて鳥のそらねはかるとも世にあふさかの闇はゆるさじ」夜を知る蟲「句」動（動）はる（螢）の異稱。夫木「水くらき蘆間の池の夕やみに夜を知る蟲の影ほのめく」よ。夜を捨つ「句」小夜（を）を捨つ（を）を見夜を連ぬ「句」幾夜も続く。夜ごとに爲す。夜を並ぶ「句」晝夜をつらね妻を戀ひつるさを鹿の鳴かぬはいかに途ひにけるかも」夜を通す「句」宵より曉に至る。徹夜（を）す。晝夜を通して、昔物語も聞え明かさんと」夜を並ぶ「句」夜を連ぬに同じ。源氏「夜を並べて、まどろめば、有りし御様ながら違ふ事無くて」

夜を寝す「句」夜を眠り通さず、半ばに眼さむ。續後拾遺「哀なり老の寝ざめの鳥の音に今幾度か夜を寝すべき」夜を日に籠む「句」次條に同じ。夜を日に籠む「句」孟子の離婁下篇に「其有不能者、仰而思之、夜以繼日、幸而得之、坐以待旦」とあり。晝夜引き續きて行ふ。晝夜の別なく爲し續く。平家木曾さらばとて、夜を日に繼ぎて馳せ上る。生簀原戰、晝夜を日に繼いで増つた甲斐あつて」夜を日に増す「句」前條に同じ。晝の門女房にならうとも、手かけ（妾）にならうとも申しかはした事も無く、勤ばかりも馴染だけ、夜を日に増すおとしさ。女子（の）のなつむ風俗」夜を晝にして「句」夜を日に繼ぎて。晝夜兼行にして。平家夜を晝にして急ぎ下れとありしかども、心に任せぬ海路なれば」夜を晝にて「句」前條に同じ。宇治「老いたる親の、限に煩ひて、今一度見んと申したれば、夜を晝にて告げに遣したれば、急ぎまかり上るなり」明けぬ夜「句」長夜の夢に同じ。源氏「明けぬ夜にやがて感へる心には何れを夢とわきて語らん」よ節（名）「竹草などの、節と節との間。古今木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり」和名兩節間、俗名典「誤りて（ふ）に當て」平家竹のよを通して、入道の口に當てて」よ辨（名）「くわん（花辨）に同じ。「古語」萬葉この花の一の内に百種（ひゃくしゅ）のこぞこもれるおほるかにすな」よ様（名）「やう（様）の訛。生玉心中、油壺から出すよな女房、しんとろとろりと見惚（と）れる女房」よ餘（名）「のこり。あまり。端數を略する時、十位以上の數に添へていふ語。「三十餘」「十餘萬」目それ以外ほか。他。俳諧新選可等「餘の事は思ひ捨

てたか猫の戀」よ興（名）「こし（興）に同じ。よ四（數）「よつ（四）に同じ。「二（二）（二）（二）（四）（四）」よ余（名）「代。われ。おのれ。自分。予を起す「句」論語の八伯篇に「孔子曰、予者商也。始可與言詩已矣」とあり。自分に注意を與へて、氣の附かざりし事を悟らしむ。よ【助】「感嘆し又は他を呼び掛くる意。紀沖つ藻は邊（こ）には寄れども眞寢床（ま）びも能はぬかとも漲つ千鳥よ」新版歌文「蝶よ花よと楽しんだ」事（を）指し定むる意。源氏「かんの君の御はらからの大納言、高砂うたひしよ」狂言月見座頭「珍しいによりて所望致すよ」命令又は希望の意。新古今みちのくのはて忍ぶみ」正統馬我を見ける如くせよ」よ自從【助】「より（自）に同じ。「古語」記「さる川よ雲立ち渡り故傷（や）山木の葉さやぬ風吹かむとす」萬葉小筑波（お）の紫き木の間に立つ鳥の」よ【感】「男の應答する聲。書聞人の召す御いらへに、男はよと申し、女はをと申すなり」よあう餘殃（名）「易經の上經に「積不善之家、必有餘殃」とあり」人の行ひたる惡事の、子孫の上に報いて生ずるわざはひ。（餘殃に對して）太平記後堀河院の御宇、嘉祿三年、尙ほ專修の餘殃を誡めて、法然上人の墳墓を破却せしむ」よあか【夜明】「夜（を）寢ずして、夜あけに至ること。徹曉。徹夜。萬葉ねは玉のよあかしも舟はこぎゆかなみつづの濱松待ちこひぬらむ」よあかり夜上（名）「夜に入りて、雨の霽れあがること。夜伽のため、御側に參上すること。二代男夜あがり忙しく、連（は）五人よろづ隙入の折節」よあさうど夜商人（名）「よあきんど夜商人（に）同じ。又その商賣。よあきなひ夜商（名）「夜、商賣すること。よ

よあきんど 夜商人「名」夜、露店など張
りて、商賣する人。

よあけ 夜明「名」夜の明くること、又そ
の時。あけた。あかつき。天明。黎明。
夜明の明星「名」(句)「明」の明
星に同じ。

よあけがた 夜明方「名」夜あけの頃、
よあけ。

よあけがらす 夜明鳥「名」あけだたに
鳴く鳥。あけがらす。鳴鳥。

よあそび 夜遊「名」夜、遊ぶこと。やい
よあみ 夜網「名」夜網を打ち又は張り
て、魚を漁すること、又その網。

よあらじ 夜嵐「名」夜吹く嵐。
よありき 夜歩「名」夜、出あるき又は遊
びあるること。よあそび。土着海賊は
夜ありきせざるなり。

よあるき 夜歩「名」前條に同じ。二代男
「夜あるきも、吟味すれば、おのづと止ま
るものぞかし」。「土佐國の方言」

よい 夜飯「名」やしく(夜食)を云ふ。
よい 餘意「名」言外の意義。

よいくさ 夜軍「名」夜間の戦争。よが
つせん。よがっせん。夜戦。(晝軍に
對して) 平軍、夜軍になり、……、捕を割
り、松明(マツ)にして」

よいこの「感」次條に同じ。心中寅庚申「し
かも、よいこの、情盛(マツ)に」

よいさ「感」小唄などの拍子の聲。よや
さ。よいやさ。よさい。俗曲(曲口柿)二度
の勤を島原の、よいさよ、出口の柳振り分
けて」

よいじゆ 好衆「名」身分のよい人。身
よいじゆ 好衆「名」前條に同じ。

よいじゆづきあひ 好衆附合「名」よい
衆との交際。高文反古私は、左様のよい
衆附合、嫌に御座候」

よいひよ「感」よいきに同じ。日喝采
の聲。日喝采す聲。
よいた 與板「名」(地)越後國三島(マツ)
郡にある町。信濃川の西岸。新潟縣の管
下。井伊氏の舊藩地。日明治の初年設

置の縣の一。にひがた(新潟)参照。
よいち 夜市「名」夜の市。夜間に開く
市場。よみせ。脚算用、つまりての夜市」
世間手代氣算諸道具を、夜市に出すは、惜し
き事ではないか」

よいち 世「名」世の中に、第一なる
こと。平家生食(マツ)といふ世一の馬」
世一の僧(句)「關白を」の人といふ
に擬していふ「おむろんせき(御室門跡)
の敬稱。

よいち 余市「名」(地)後志(マツ)十七郡の
一。後志支廳の管轄。

よいちじん 予一人「代」次條に同じ。
よいちじん 予一人「代」『いちじん』(人)
を見よ」古、支那にて、天子の自稱。

よいて 好い手「句」よし(善し)の條下を
見よ。

よいとこ「感」次條に同じ。
よいとこ「感」次條に同じ。浮世風呂
「あ、よいとこ」

よいとこ「感」次條に同じ。
よいとこ「感」次條に同じ。

よいん 餘音「名」絶えたる後にも、なほ
低く残る音響。餘聲。餘響。餘韻。
餘音、梁(マツ)を繞る(句)「列子の湯
問篇に、韓娥東之、齊、廣、過、三雅門、
飄歌假食、既去、而餘音繞梁、三日
不絕、とあるに本づく」歌聲の微妙
なる形容。

よいん 餘胤「名」先人のおかけ。餘德。
よいん 餘胤「名」(句)「後胤」に同じ。

よいや「感」次條に同じ。千兩鐵が鎖
が諸藩(マツ)をほぐして、土俵へひつくり
かへし、力士の如くつたて、よいや、
よいや、よいやと、數萬人一度に立って、
手をたたき、どよみを作る、問作る」

よいやさ「感」次條に同じ。
よいやな「感」拍子の聲。

よいよい「名」アルコオル又はニコチン
の中毒、中風等のために、手足麻痺し、歩
行満足なるを得ず、口舌の自由をも失ふ
症状、又その症状を呈せる人。

よいよいやまひ よいよい病「名」前條
に同じ。醫家毛太郎殿はよいよい病、た
った一人の子實は脾胃虛して」

よう 用「名」はたらき。活用。作用。
(體)に對して。ももちふること。つ
かふこと。使用。活用。目入用。必用。
聖職人の用あらば、この人を使ひたまへ」
くば、莊庭でもするがよい」(合)つひえ
入費。出費。大小便をなすこと。用
便。こよう。だいよう。御用。

用が有る時の地藏頭、用無き時の閻
魔頭「句」「借る時の地藏頭、濟す
時の閻魔頭」に同じ。(「諸語」)

用に中(る)「句」『史記の秦紀に「書
不中用者、盡去之」とあり「眞に用に
立つ。役に立つ」

用に立つ「句」『役に立つ』に同じ。
在實正動方角「用に立てたら、早く戻せ」
『他の用に供す。貸す。天の御爲定め
て金づく、五兩、拾兩は、用に立てても
助けた」

用に爲(る)「句」『感嘆詞のごよう(御
用を見よ)』盜賊、捕縛せらる。
用の無い星は、宵から御座る「句」
「名の無い星は、宵から出る」に同じ。
(「諸語」)

用を足す「句」『用事を済ます。用務
を辨ず。』大小便を済ます。

よう 庸「名」『秀であらぬこと、又そ
の人。凡庸。平凡。』庸と同義、即ちや
とふ意「支那唐代及び我國大化の改新は、
後の王朝時代の賦課の一。支那のは、十
年以上の男子を、毎年二十日間(周年は二
十二日間)公役に服せしめ、應じ難き者に
は、一日につき、絹三尺づつを代納せし
め、我大化の制にては、これを月(三)に徴
し、布一丈二尺又は米五斗を納めしめ、
庸布、庸米と呼び、なほ、五十月に仕丁(マツ)
び一人、一百月に采女(マツ)一人の様に充
つため、前同額の庸を徴せしが、大寶令
にては、これを人に徴することとなり、正
丁(マツ)一人毎に、歳役(マツ)とて、毎年、十

日づつ、道橋の修繕、池溝の開通、宮殿の
造替等の夫役を課し、もし役に就く能は
ざる時は、一日につき、布二丈六尺、もし
くは、その價格に準ずる布を代納せしめ
て、庸布、庸米といひ、次丁は二人を以て、
正丁一人に比し、中男及び京畿内の住民
と不課口とは、これを免じたり。庸役、ち
からし。(租、調に對して)「すがた」

よう 容「名」かほかた。容貌。容姿。
よう 癰癰「名」化膿菌の感染に因る、惡
性の腫物。多くは、頸背、臀などに發
生し、深部に占據し、部位廣く、赤くなり
て腫脹し、蜂窩の如き狀を呈す。先づ戰
慄、高熱を發し、劇痛を伴ふを常とす。
甲陽軍醫癰癰といふ腫物は、二十年も催
されば出ぬ者なり」

よう 俑「名」古、支那にて、埋葬の時、人
形に、手足を動かす裝置をなし、草人に代
へて用ひたりといふもの。

俑を作る「句」『禮記の檀弓篇に「孔子
謂ア爲(る)鴞(マツ)者上善、謂(る)俑者一不仁、
不殆(マツ)於用(る)人乎哉」とありて註に「中
古爲木偶人、謂(る)之曰(マツ)俑。則有(る)面目機發
而太似人矣。故孔子惡(る)其不仁、知(る)未
流必有(る)以人殉葬者」と見ゆ。孟子の
梁惠王上篇に「始作(る)俑者、其無(る)後
乎」とあり「善からぬ事の初をなす
惡例を開く」

よう「名」次條を見よ。
ようの侍(マツ)「句」『ようは(る)是(る)衛府
の親ならん』武家にて、將軍の身邊に
隨ひて、弓を取り、矢を真ふ騎士。

よう 四「數」(四)の音便。「一(マツ)・二
(マツ)・三(マツ)・四(マツ)」

よう 善う。能う「副」『よく(善く)の音
便。源氏ようも案内(マツ)せて』狂言目
近大名「い、其處(マツ)な奴(マツ)、よう開け」
いかでか。どうして。あに。ようかし。
狂言(調子)「よう、われが様な者が許さうは
いな」

善うこそ「句」『善うぞを』一層強めて
いふ語。大藏經(マツ)手盛(マツ)の奈良茶一杯
づつ振舞はん(マツ)と待ちかけしに、能うこ
そ、能うこそ。何も馳走は無けれども」

よう

善うせずば「句」「善くせずば」の音便。「古語」源氏「今姫君は、ようせずば、實の御子にもあらじかし」
善うぞ「句」「善くぞ」の音便。來訪を歓迎するにふ語。ようこそ。重井「やあ、徳兵衛、ようぞ、ようぞ。夜が寝られぬに、夜と共に叫さう」
よう「助」よ「助」に同じ。
よう「感」いように同じ。「よう、えらいぞ」
よう「助動」うに同じ。(四段活用、奈行變格活用、良行變格活用以外の動詞に添ふ)狂言「枕草子」叶へて進じよう」と存する「語彙」ちと急いで進めよう」
よう「あつ」聲調「聲調」[名]「ふさぎさまたぐること、又、ふさがること」
よう「い」用意「名」[名]「心を用ふること。こころがけ。用心。注意。枕「打たれじと用意して」」そなへ。支度。準備。豫備。空襲「おはしまさんさまの用意せん」
よう「い」庸醫「名」治術の凡庸なる醫者。やぶいしや。
よう「い」容易「名」たやすきこと。造作(+)なきこと。てがる。
容易ならず「句」[名]「たやすからず」尋常ならぬ大事件なり。
よう「い」容隠「名」[名]「書經の康誥篇の疏に「今之律令、大功已上得、相容隠」とあり」罪をかばひゆるすこと。
よう「い」やさ「感」よやさに同じ。
よう「い」やな「感」よやなに同じ。
よう「えき」溶液「名」[名]「英 Solution」或物質を、他の液體に混合して、機械的方法にて分別しがたきやうにしたるもの。その混合する物質を、溶質といひ、混合せらるる液體を、溶媒、溶解劑又は溶劑といふ。例へば、食鹽を水に溶かしたる時、食鹽は溶質、水は溶媒なる類。溶媒の普通なるものは、水、アルコール、エーテル等なり。はうわようえき(飽和溶液)参照。
よう「えき」傭役「名」雇ひて働かせ、又は、雇はれて働くこと。
よう「えき」けん用益權「名」[法]他人の

ようえき

所有に屬せる物件を、その本質を害せずして、有利に使用し、且つ收益する權利。
よう「えき」けん用益者「名」[法]用益權を有する人。
よう「えき」容悦「名」[名]「孟子の盡心上篇に「有事、君人者、事是君、則爲容悦」者也」とあり。容姿にて悦ばす義。君主の面前にて媚びへつらふこと。
よう「おん」容隠「名」[名]「容隠」に同じ。眞實主義容隠之輩、隠田之族、爲罪科「可被」容隠「名」[名]「容隠」を容(る)る義。差出口(差)をすること。
よう「かい」溶解「名」[名]「溶(る)くこと、又、溶かすこと」。「英 Dissolution」或液體に、他の物質を入れおく時、その物質の液中に、一樣に分れ擴がる現象。液體の分子の引力に依り、その他物質の分子が、液體の分子の間に潛入するに因る。
よう「かい」溶解「名」[名]「金属の、火の力にて、とろくこと」。「溶液」を見よ。
よう「かい」溶解劑「名」[名]「化」ようえき
よう「かい」溶解度「名」[名]「英 Solubility」溶液の中に、溶質が、幾何の割合まで溶解し得るかを示す數。飽和溶液に於ける、溶媒百に含める溶質の量を以下示すを、通常とす。普通溶液の温度低下するに従ひて減少すれど、食鹽のは、温度の高下によりて著しき變化を生ぜず。
よう「かい」溶解熱「名」[名]「英 Heat of dissolution」溶質が溶媒に溶解する際、出入する熱量。例へば、水に硫酸を溶解すれば、發熱し、芒硝を溶解すれば、冷却する場合の類。
よう「かう」庸行「名」[名]「平常の行爲」
よう「かう」傭耕「名」[名]「他人に傭はれて耕作すること」
よう「かう」しやざう用行含藏「句」[名]「論語の述而篇に「子謂顏淵曰、用之則行、舍之則藏、惟我與爾有是夫」とあるに本づく」世に、用ひらるれば、出て道を行ひ、捨てらるれば、去りて身を隠すこと。用含行藏。

ようかい

よい「かん」好い加減「句」[名]「善し」の條下を見よ。
よう「か」見ようかし「副」[名]「善う」に同じ。吾輩「見ようかし治む」らうぞい。減多に治るこつちやねえ」
よう「かた」用方「名」[名]「用務を辦する役向」
よう「かた」用方右筆「名」[名]「江戸幕府の職制の一。間部詮房(あきら)執政の際、寶永六年より享保元年まで、詮房に屬して、記録案例を掌りし右筆」
よう「かん」用間「名」[名]「間者を用ふること。翻作を放つこと」。「用務のあひま仕事のみまなる時」
よう「かん」勇敢「名」[名]「ゆかん(勇敢)に同じ。吾輩、ようかんの輩を抽賞せられずば」大膽すこし勇悍に惡しき人にてぞおはせし」
よう「がん」容顔「名」[名]「容貌」に同じ。
よう「がん」熔岩「名」[名]「英 Lava」火山の噴出又は破裂の際に、地熱によりて、溶解せる状態にて進出する岩石。熱度非常に高く、灼灼たる光輝を放てども、包含せる多量の水蒸氣その他の氣體を放散して、後、漸次冷却凝固し、氣體放散の痕跡を留めて、多孔なる岩石となる。らば。
よう「がん」熔岩丘「名」[名]「英 Lava cone」熔岩の固結せるによりて成りたる火山。
よう「がん」熔岩鑛乳「名」[名]「英 Lava stalactite」熔岩トンネル生成の際、その空洞の上部より餘滴落ちて、鐘乳狀をなすに至れるもの。富士山の胎内石など、その一なり。
よう「がん」熔岩臺地「名」[名]「地」がん
よう「がん」熔岩隧道「名」[名]「地」熔岩の進出後、外部は冷却して、固形をなしたまに拘らず、内部は、なほ熱して、波狀のまま流れ去れるによりて生じたる洞穴。富士山麓にある風穴・人穴など、その一なり。
よう「がん」熔岩流「名」[名]「英 Lava flow」熔岩の進出後、地

ようき

表に沿ひて流るるもの。
よう「き」容器「名」[名]「いれもの。うつは」
よう「き」用器「名」[名]「器具を使用すること、又、使用する器具。入用の器。用具」
よう「き」雍熙「名」[名]「天下治まり、人民やはらぎ樂むこと。和樂。雍和」
よう「き」庸器「名」[名]「周禮の典庸器に「掌、織染、器庸器」とあり」鑄て、人の功績を銘するに用ふる器。凡庸なる器、又その人。庸才。
よう「き」容儀「名」[名]「容姿と威儀と。容貌と行儀と。容態」。「容儀を修む」
よう「き」用聞「名」[名]「ようきき(御用聞)に同じ」
よう「き」用氣機開車「名」[名]「英 Compressed air locomotive」空氣壓縮機にて壓縮せる空氣を原動力として、運轉する機關車。煙突・火室等を缺く。
よう「き」用器「名」[名]「コンパス・烏口・三角定規等の道具を用ひて描く圖畫。幾何畫法・透視畫法等に依るものこれなり(自在畫に對して)」
よう「き」用器畫法「名」[名]「英 Mechanical drawing or Euclidean geometry」まがくわ(幾何畫法)に同じ。
よう「き」用金「名」[名]「公用に使用するかね」。「武家時代に、非常の事起れる時、領主より、領内の人民に課したる税金。御用金」
よう「き」儲銀「名」[名]「やちん(儲蓄)に同じ」
よう「き」鑛形「名」[名]「やちん(鑛形)に同じ」
よう「き」鑛像「名」[名]「やちん(鑛像)に同じ」
よう「き」用脚「名」[名]「えきやく(要脚)に同じ」下學「用途・用脚・青銅・青堊、以上、皆、錢異名也」
よう「く」庸君「名」[名]「凡庸なる君主。暗」
よう「く」容華「名」[名]「容色の華麗なること」容光。「支那漢代の女官の一」
よう「く」熔化鑛化「名」[名]「熔解して、形

の變化し、又は、形を變化せしむること。
とろくこと、又、とろかすこと。

ようくわ 沃化「名」〔化〕よおくわ(沃化)を見よ。

ようくわ 容光「名」〔孟子の盡心上篇に「日月有明、容光必照焉」とあり〕空隙の受け有る光。ひまもる光。〔ようくわ(容華)に同じ。〕

ようけい 銕型「名」いかに(銕型)に同じ。

ようけん 鷹犬「名」〔鷹〕と犬と。共に狩獵に用ふるものなるより、並べていふ。〔他人の手先となりて、驅使せらるること、又その人。〕

ようけん 用件「名」用事の次第。ようけん 用言「名」〔語〕語尾に變化ある語、即ち動詞形容詞など(體言に對して)。

ようげん 庸言「名」平常のことば。平凡

ようげん 庸軒流「名」茶の湯の流派の。千利休の門人藤村庸軒(寛文の頃の人)を祖とす。

ようて 蠅虎「名」〔動〕はへどりむ(蠅取)の漢名。

ようて 用語「名」使用することば、又使用してあることば。〔書簡文の用語〕

ようて 擁護「名」抱きて、危害を受けぬやうに護ること。かばひ守ること。庇護。

ようて 善うこそ「句」よろ(善う)の條下を見よ。

ようさい 庸才「名」凡庸の才、又その

ようさい 容齋「名」〔人〕きくち(容齋)池容齋を見よ。

ようさい 用材「名」使用する材木。

ようさい 溶劑「名」〔化〕ようえき(溶液)

ようさい 容齋隨筆「名」〔書〕支那宋の洪邁(字は景廬、容齋と號す)の隨筆。初の十六卷に次いで、續筆、三筆、四筆各十六卷、五筆十卷、合はせて七十四卷。經史典故の外、文章、藝術にも及び、疏漏もなきに非ざれども、頗る該博なり。

ようさう 鷹爪「名」鷹のつめ。〔茶

は、芽の小なるを最上とし、その形、勁直

織鋭鷹の爪に似たりといふ由、實陸維翰に見ゆ〕上等なる茶の異稱。下學集、鷹爪、ヨウサウ。好茶之異名也。〔じ。〕

ようさう 鷹瘡・癰瘡「名」よう癰に同

ようさう 銕造「名」金屬を熔解して、器

ようさうくわいこう 銕造化育論

〔名〕〔書〕天地の化育造化の眞理を論じたるもの。三卷。佐藤信淵の著。

ようさうたいばん 鷹像隊幟「名」伏旗

の。鷹の像あるもの。鷹形幟(やぶ旗)。

ようさく 備作「名」備はれて、働くこと。

ようさく 夜去方「名」ようさくつ(夜去方)の略。〔古語〕土俵けふ、ようさつた、都へるのぼるつてに見れば〕

ようざん 鷹山「名」〔人〕うへすぎようざん(上杉鷹山)を見よ。

ようざり 夜去「名」よざり(夜去)の音便。

〔古語〕和泉部集、雨のいたく降るに、しのびたる人のもとより、ようざりは必ずといひたるに〕

ようざりかた 夜去方「名」次條に同じ。

〔古語〕空蕪、ようざりかた、こと藏人して聞えたまふ〕

ようざりつ 夜去方「名」よざりつ(夜去方)に同じ。〔古語〕多武峰少將物語

〔ようざりつ方、月のほのかなるに〕

ようじ 用紙「名」その事物に用ふる紙、又それに用ひてある紙。料紙。〔た。

ようじ 容姿「名」なり。かたち。すが

ようじ 容止「名」たちち。ふるまひ。舉動。舉止。〔容赦して止めおくこと。

〔媒合容止〕

ようじ 蠅市「名」蠅のむらがること。

ようじ 熔滓「名」金屬を熔解する時、その場に残留する滓。かなくそ。

トオマスの熔滓〔句〕〔化〕英Thomson's acid〕ベセマ法を行ふ際、坩堝の内の面に白雲石などを塗しておく時は、鐵中の磷は、磷酸鹽となりて除去せられ、そのあとに生ずる熔滓。肥料と

して貴重す。

ようじ 用事「名」爲すべきわざ。用

向。用件。用。〔藝妓が見番へ用向を言ひたてて、業を休むこと。〕〔人用。用沙石集〕本来の面目得たらば、水母(めづ)殿蝦の眼は用事なかりけりやな〕

ようじ 用字「名」使用する文字、又使用してある文字。

ようしゅう 雍州「名」〔地〕九州の一。今の陝西(甘肅)の二省及び青海地方に當る。〔支那の雍州に長安あり、豫州に洛陽あるに擬して、京都の東京(洛陽)を洛陽、西京(長安)を長安と呼びしよりいふ〕やましろ(山城)の雅稱。平道生(雍)は相模の國、果は雍州都(雍)の外、河原の土とぞなりにける〕

ようじゅう 雍州府志「名」〔書〕漢文にて、山城國の地理を記せるもの。十卷。黒川道祐の著。

ようじく 用字格「名」〔書〕漢字の排置法を類別説明せるもの。四卷。伊藤東涯の著。

ようじく 溶質「名」〔化〕えき(溶液)を見よ。

ようじく 容質「名」容貌と體質と。

ようじく 容膝「名」〔膝を容る〕を見よ。

ようじく 庸人「名」凡庸なる人。凡人。

ようじん 用心「名」心を用ひること。こころがけ。用意。注意。〔災害を被らぬやう、豫め心を用ふること。こころがけ。戒心。警戒。注意。〕

ようじん 用心「名」警戒は十分にすべし。〔諺語〕

用心に國亡びず〔句〕次條に同じ。

用心に怪我無し〔句〕警戒を加ふる時、災害を避く。〔諺語〕

用心に細を張る〔名〕警戒の上に警戒す。念に念を入れて警戒す。

用心は臆病にせよ〔句〕警戒は、臆病と思はる程に十分にせよ。〔諺語〕

ようじんあひくち 用心合口「名」萬一の場合の用心に拠へる合口。護身用の短刀。源平引繼「懐に持つてをります用心合口」

ようじんかご 用心駕籠

〔名〕火災など生じたる時、家財を入れて昇き行

くために、常より備へおく、大なる駕籠。

ようじんかね 用心金「名」非常の時

に用ふるために貯へおく金。〔鐵砲の引金の上を掩ひおきて、不意の發火を防止する用に供する金具。〕

ようじんきん 用心金「名」前條に同じ

ようじんちち 用心土「名」火災の際、土藏の目塗(めぬ)に用ふるために、常に貯へおく粘土。

ようじんてつばう 用心鐵砲「名」徳川時代、盜賊の害を受けぬため、庶人の所持するを許したる鐵砲。

ようじんとき 用心時「名」特に警戒を要する程に物騒なる時節。〔代勇藏の鎗にも性根(せきこん)を移し、召合(せがひ)の月に樞(く)を落し、用心時の自身番にも人だのみするこそあれ〕

ようじんぶかひ 用心深し「形」よく、心をくばる性質なり。警戒の心深し。

ようじんぼう 用心棒「名」盜賊などを防ぐために備へおく棒。〔しんぼう(縮張棒)に同じ。〕〔博徒などが、萬一の時の用心に抱へおく、武術の心得ある者。〕

ようじんまい 用心米「名」かこひこめ(圓米)に同じ。

ようじんみつ 用心水「名」火災の時の用に供するため、平常より貯へおく水。

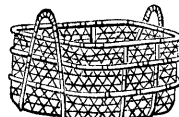
ようじや 勇者「名」ゆうしや(勇者)に同じ。

勇者は恐れず〔句〕〔勇者(ゆうしや)は恐れず〕に同じ。〔諺語〕勇面八鳥(勇者は恐れず、勇者は恐れず)。

ようじや 容赦「名」ゆるすこと。かん

べん。勘忍。〔きびしくせぬこと。て

かげん。寛大。斟酌。用捨。〕圓陣八鳥(容赦も無くしがみつき)。



(どかんじうよ)

よん

よん

よん

よん

ようや

容赦、身の害五分の損(句)きびしくせられぬは、自身に取りて、却って損失の基なり。【諺語】

ようじや用捨【名】用ふること、捨つること。採用すること、採用せぬこと。取捨【用舍】平道任使、その人を得る時は天下自ら治まると見えたり。……用捨すべきは、この事なり。【善惡可否を辨別すること。容赦。諸國はなし用捨なく、其處をも打ち放せと、三方の壁ばかりにして】

用捨は貧富に在り【句】人間、用捨は貧富に在りを見よ。

ようじやかうさう用舎行藏【句】ようかうさう(用行舎藏)に同じ。

ようじやばこ用捨箱【名】書状を入れおく箱。内部を縫(ぬい)にきりて、一方に有用のもの、他方に用の済みたるものを入る。【書】用ふべき所あらば用ひ、餘は捨てよとの義にて名づけし由、自序に見ゆ。部門を分けて、調度、風俗等に關する事項、凡て五十一條を考證解説せるもの。三卷。柳亭種彦の著。

ようじやびき用捨引【名】徳川時代に、定免(じやうめん)の田畠の不作なる場合に、郷帳(きやうちやう)割附は定免に従ひ、取箇(きり)の幾分を斟酌(しやうしやく)減少せしこと。【備】

ようじやゆ榕樹【名】「植」あかう(赤榕)に同じ。

ようじやたい榕樹帶【名】「地」植物帶の一。赤道の南北約二十五度までの間、この地帯の主なる植物は榕樹(じやうじゆ)露兜(ろどう)椰子(やし)檳榔(びんらう)芭蕉(ばしやう)等にして、我國にては、臺灣、琉球の南部、小笠原島等、この地帯に入る。熱帯林。【出】に同じ。

ようじやゆつ涌出湧出【名】ゆりゆつ(涌)ようじやゆつ魔術【名】魔を、魔符の役に立つやうに飼ひ馴らす術。

ようじやゆつ用所【名】用ふるに適する場所。もちひし。【用處】【ようじ(用事)】に同じ。狂言入間川「川むかひ(、用所あつて参る) 甲陽軍鑑「用所有つ

ようじや

て、屋形様成の時の御着經の間に、小者一人にて忍宿(しの)に参られ【目】てうづば、かはや。ようば。便所。

用所を足す【句】用(じ)を足すに同じ。甲陽軍鑑「小便の用所を足し、井のほとにて、手水(てすい)を使ひ」

ようじやゆつ擁書【名】書籍を貯ふること。【備】

ようじやゆつ容色【名】顔はせ。みめ。容色あり【句】顔はせ美し。【同じ】

ようじやゆつ容飾【名】けしやう(化粧)にようじやゆつ容飾具【名】けしやうたう(化粧道具)に同じ。

ようじやゆつ擁書漫筆【名】「書」齊明紀に見えたる童謡以下數十項につき、考證解説せるもの。四卷。高田典清の著。卷末に五百十部の引用書目を擧ぐ。

ようじやゆつ容子【名】やうす(様子)に同じ。抱擁す【動】佐佐木他【い】だきかかふ。抱擁す【動】好(よ)つ。所藏す。

ようじやゆつ西南の方より吹き来る風。【中國の方言】

ようじやゆつ用隙【名】用事の無きこと、又その時。てあき。てすき。ひま。

ようじやゆつ雨の兆なりと【名】南方より吹き来る風。風雨の兆なりと【名】。【とすみ】

ようじやゆつ用水【名】水を使用すること。【備】

ようじやゆつ用水堀【名】用水を導き通はする堀。

ようじやゆつ用水論【名】すめろん(水)ようじやゆつ用水桶【名】防火のため、用水を貯へおく桶。即ち天水桶など。

ようせん

ようせん銚銷【名】ようかい銚(銚)に同じ。ようせん容積【名】中(うち)に受け容れ得る分量。【数】「英」Cubage。立體の空間を占むる量。立體の積(せき)。體積。

ようせん容積噸【名】船舶の積荷の運賃を徴収するに、容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん容積噸【名】容積を標準とする。【備】

ようせん

間に締結する契約。全部備船契約と一部備船契約とに分つ。【なしたる人、ようせん】や備船者【名】「商」備船をようせん沃素【名】「化」よおそ沃素を見よ。【を妨ぐる憎むべきものの聲】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようせん癰疽癰疽【名】癰と疽と。【人】

ようだつ 用立つ【動四自】「用に立つ」に同じ。

ようだつ 用立つ【動下二他】「用に立つ」に同じ。

ようだん 用談【名】用むきの話、用務上の談話、雑談に對して。

ようだん 用簞笥【名】當用の種種の物を入れた小簞笥、手簞笥。

ようたん 酔たん【名】酔たつた坊の音便。よびぞれ【名】に同じ。

ようち 夜討・夜撃【名】夜に乘じて、不意に、敵陣を攻むること。よせめ。よがけ。よばたらき。夜襲。保元、即時に敵を従へ、立所に利を得ること、夜襲に過ぎたこと候はず。【名】曲曲【名】「今夜、夜討打つべき事」。【名】夜、人家を襲ふ盜賊。夜盜。【名】夜討、強盜。

夜討【名】夜討の軍勢を、敵陣に入り込ませむ。【名】夜討に對して。【名】「今夜、夜討に入るべし」。

ようち 用地【名】その事に使用する土。【名】「夜討、夜撃掛」。

ようち 夜討掛・夜撃掛【名】夜討を仕掛けること。【名】「今夜、夜討がけに、かの者を討たうするに候」。

ようち 夜討會我【名】「夜討の」會我兄弟が、親の仇工藤祐經を討たんとて、母に形見の品を贈り、祐經の陣を夜襲することを作るもの。

ようち 備賃【名】やとひちん雇賃に。【名】「同じ」。

ようち 備帳【名】てうちやう調帳帳を見よ。

ようち 備帳【名】てうちやう調帳帳を見よ。

ようち 備帳【名】てうちやう調帳帳を見よ。

ようち 備帳【名】てうちやう調帳帳を見よ。

ようち 備帳【名】てうちやう調帳帳を見よ。

ようち 備帳【名】てうちやう調帳帳を見よ。

ようち 備帳【名】てうちやう調帳帳を見よ。

ようてい 庸丁【名】夫役のつにあたる。【名】「三家者以、雍徹」とあり。徹は撤の義。古、支那周の朝廷にて、天子が、宗廟の祭に、詩經の周頌中の雍（今の詩經には離と書けり）の詩を、音楽に合はせて歌はしめて供物を下げしこと。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようてい 庸丁【名】「漢書の溝洫志に「用、用不足」とありて、註に「言、國家少三財役」と見ゆ。よてい、用度」に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようほう 擁抱【名】はうほう（抱擁）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

戦争、用武。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

ようへい 擁蔽【名】ようへい（擁蔽）に同じ。

を五るわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにほ とてつちた そせすしそ こけくきか おえういあ

よおどーぼつたあす 沃度剝篤亞斯(英:Ho-
tsumi Isidoro)【名】「化」よおどわらうむ
(沃化加留母)に同じ。

よおどーぼるむ 沃度仿謨(英:Idofom)
【名】「化」橙黄色にして光澤を帯びたるも
六角板状又は細き葉状の結晶をなせるも
の。沃度のアルコール溶液と水酸化アル
カリとの反應によりて生ず。甘味と特異
の臭氣とありて、強熱すれば、紫色の蒸氣
となる。防腐劑として、傷口撒布等の醫
藥に用ふ。

よおほえ 世覺【名】世のおほく。世人
より受くる評判。人氣。大覺世おほえ
帝(の)の御もてなし。増益(春宮)の
御伯父なれば、世おほえ劣るべくもあ
らず。

よおほつ 沃剝【名】「化」よおどぼつたあす
(沃度剝篤亞斯)の略。

よおろつば 歐羅巴【名】「地」次條に同じ。

よおろつば 歐羅巴洲【名】(西葡)Eura-
pe(英)Europe)【名】「地」六大洲の一。東
半球の西北に在る。歐洲。奥南緯。

よおろつば 歐羅巴人【名】歐羅巴
洲の人。歐人。

よおろつば 歐羅巴人種【名】「名」か
ろあじんしゆ(高加索人種)に同じ。

よおろつば 欧羅巴訪問 歐羅巴訪問
飛行【名】大正十四年、東京大阪兩朝日
新聞社主催帝國飛行協會その他の後援の
下に飛行せし大飛行。飛行機は佛國製ア
レゲエ式にて、初風及び東風(初)と稱し、
山階宮武彦王殿下の御命名に係り、前者
は陸軍大尉安部浩、後者は飛行士河内一
彦操縦し、七月廿五日、東京代木練兵場
を出發し、滿洲、西比利亞の上空を翔破し
て、八月廿三日無事露都モスコオに到着
せり。往復一萬六千八百六十キロメートル
(三千餘里)。我航空界空前の壯舉にして、
又、世界の視聽を聚めたり。

よか 餘暇【名】仕事のあまりの時間。ひ
ま。餘閑。

よか 四日【名】よか(四日)に同じ。

よかい 豫戒【名】「あらかじめ警戒す

ること。」「法」大正三年一月以前に於
ける一種の行政處分。警視總監北海道
廳長官、府縣知事が、公共の安寧秩序保持
のため、浮浪の徒その他、他人の自由權
利を妨害せんとする虞ある者に對して、
一定の期間内、謹慎を命じ、又は、居住區
域の限定、就職の必要、法律に觸るる行為
の禁止等、特別なる警察上の監督を受け
しめしこと。

よかいめいれい 豫戒命令【名】警視總
監、北海道廳長官、府縣知事が、豫戒をな
すために下しし命令。これを受けてより
三年以内に、命令事項に違反せる場合に
は、處罰せられたり。

よかいれい 豫戒令【名】前條に同じ。

よかう 餘香【名】残れるにほひ。殘香。
遺香。遺薰。餘馨。餘芳。

よかう 豫行【名】本式に行ふ前に、練習
のために行ふこと。豫備の行為。

よかく 豫覺【名】よかん餘感に同じ。

よかく 餘角【名】「數」英Coscent【二
つの角の和の一直角に等しき時、その一
を、他の一つに對して呼ぶ稱。

よかぐら 夜神樂【名】「夜間に行ふか
ぐら。諸曲月八等」更けゆく月の夜神樂
を奏して。」「芝居の囃子の一。岩戸神樂
と同じく、だんまのり場、又は物凄き場に
用ふ。

よかくれ 夜隠【名】夜の暗さに紛れて
隠ること。夜に隠ること。華隱。夜
がくれに出て入る月。

よかけ 夜駈・夜驅・夜懸【名】「よち(夜
討)に同じ。甲斐軍監伊奈より、四郎殿
夜がけになされ」

よか 夜駕籠【名】夜、駕籠に乗ること。
置土産「京のぼりに、堀より、六枚肩の夜
駕籠、一人七文に定まて」

よか 自動【名】「よく(避く)の連用形「よき」
の延なるべしといふ」説に、よかして、
よきなる(過る)のよきの延なるべしとい
ふ。「古語」萬葉、飛鳥川高川よかし越え
て來つまこと今宵は明けず行かめや」

よか 自動【名】前條を見よ。

よか 夜敷【名】夜のかず。(歌に、男女
相逢ふにつきていふ) 蜻蛉片時に替へし
夜かずを敷ふれば鳴の諸羽もたゆしとぞ
鳴く)

よかせ 夜風【名】夜の風。夜間吹く風。
よかせ 夜稼・夜持【名】「夜かせぐこ
と、物を盗むこと。よばたらき。夜盜。
よがたり 世語【名】「世の中の出来事
に關する物語。世間ばなし。源氏かくめ
づらかなることは、世がたりにくそなり
はざりぬべかれ」 若風鳥玉村吉彌等
が情にて、命捨てし人、敷を知らず、……、
今に世語とはなりぬ」 常磐津師の一。
院本「近頃河原の達引(達引)に據りて、お
後(の)傳兵衛の事を綴れるもの。本外
題は「近頃戀世語(近頃恋)」。

よかたり 夜語【名】よかなき夢をだに
見てあかしては何をか夏の夜語にせん」

よか 餘割【名】「數」英Coscent【六
線の一角ABOの一邊AOの上に於ける
任意の一點Aより、他の邊BOに、垂線AC
を下す時、ABのAOに於ける比を、角ABC
に對していふ語。

よか 夜合戦【名】よいくさ(夜軍)
に同じ。應仁記、夜合戦に叶はずと引き退
きて」

よか 夜一夜【名】「夜一夜を強めていふ語。浮世風
「夜がな夜一夜騒騒しくてならねえよ」

よか 夜川【名】夜の川。貫之集、篝火
の影しうつればうら玉の夜川の底に水
も燃えけり」

よか 横川・横河【名】「地」比叡山の三
塔の一。東塔(の)の北に位し、近江國に
屬す。天長六年、慈覺大師始めて、この地
を開き、首楞嚴(の)院を創せり。榮花
「山の西塔(の)東塔、横河」平家、横川の
解脫谷(の)寂坊(の)院」

よか 横川の中堂【名】慈覺大師、天長六年、
首楞嚴院を創せしより二十年の後、嘉
祥元年に建立せし堂。聖觀音を中尊と

し、左脇に毘沙門、右脇に不動明王を安
置す。

よか 横川僧都【名】「人」け
んしん源信の異稱。

よか 横川大僧正
よか 横川のひじり 横川聖【名】「人」よか
はのそつ(横川僧都)に同じかるべし。榮花
「横川の聖、あやしき法師一人をぞ添へ奉
りける」

よか 横川法師【名】「書」横
川僧都源信の、自像に附記して、念佛往生
の信念を述べたる讀文。一紙。宇治の平
等院に藏す。

よか 横川船【名】夜川の船。夜間
の川舟の船。夫木「夜川船ともす鎌の光
には藻にすむ魚の数も見えけり」

よか 横川法師【名】「東北地方の方言」
上下四百人」

よか 夜被【名】よき(夜著)を云ふ。

よか 餘寒【名】立春後、なほ去らぬ
寒氣、又その季節。殘寒。

よか 餘閑餘閑【名】よか(餘暇)に同
よか 豫感【名】明確に意識に上るに
非ずして、唯、何となく、將來の事につき
て、暗示的に感ずること。蟲が知らする
こと。豫覺。

よか 善事【名】善き事。「遠江國の方言」
よか 善人【名】善き人。「天明の頃、
江戸神田小柳町に居りし善藥賣。姓を、
中村といへり。」「かちやく(膏藥)の異稱。
奴佛講「月影のさし座敷よよかんべい」

よか 善善鈴【名】よかよか鈴
屋の賣りあるく鈴。

よか 善善鈴屋【名】「歌に、
「善か、善か」といふ拍子言葉を用ひしよ
りいふ」明治の中期の頃、鈴を容れたる
盤臺を頭上に戴き、太鼓を鳴らし、歌を唄
ひながら、路上を徘徊せし鈴賣。

よか 夜が夜【名】「同。次
條に同じ。「畿内の方言」

よか 夜一夜【名】「同。次條に

よがよつ

よがよつびと 夜が夜一夜【副】よがなよつびと(夜がな夜一夜)に同じ。【關東及び四國の方言】

よがら 世柄【名】世の有様。よなみ。時よがらす 夜鳥【名】夜鳴く鳥。よなきがらす。 黒鷲 夜鳥は高き梢に鳴きおちて月しづかなる曉の山

よかり 夜狩【名】夜の間に爲す狩獵。

よがら 善がる【動四自】善しと思ふ。

よがら 愉快に感ず。うれしがる。

よがる 夜離る【動下二自】夜のかよひ絶ゆ。夜離れて居る。(男女の間にいふ)後拾遺「わが心ころにもあらでつらからばよがれん床のかたみとせよ」

よがれ 夜離【名】よがること。 萬葉「白雲の五百重」隠して遠けども夜がれせず見ん妹があたりは

よかれあじかれ 善かれ悪しかれ【句】よし善しの條下を見よ。

よき斧【名】やや小き斧。てをの。和名「斧平能。云三興岐」宇治山守に、よきを取らる【名】

よき雪【名】ゆき(雪)の轉。【東國の古の方言】萬葉上野(分)伊香保の嶺(を)ろに降ろよきの行きすぎがてぬ妹が家のあたり

よき豫期【名】あらかじめ待ち設けること。かねてより覺悟してあること。

よき夜著 夜着【名】形は、普通の衣類と同様に、大形に仕立て、厚く綿を入れた寝る時、身を覆ふに用ふるもの。ふすま。かいまき(皆巻)参照。和合人夜著の上へひろげて置く手拭「口つきの襪。夜着の袖口【句】唇の上下共に厚き

よき餘儀 餘儀【名】餘の儀。他の事。その事以外に執るべき道。(打消の語又は反語を伴ふ) 太平記「命を際(ひ)の一合戦して、義に曝せる戸を、九原の苔に留むべしと、又餘儀もなく申されければ」同「往日の堅約なり、何の餘儀にか及ぶべき」

よき豫議 豫議【名】あらかじめ評議すること。下相談。 東鑑「可(有)御參詣」歟

よきん

事、猶日來雖有豫儀、依(走)湯山火災事、令(留)給【下】下相談などに日を送って、即時の決行をせぬこと。東鑑「何及豫議」哉、早可被(被)厭(領)收之奉書」

よきことなき 斧筆菊【名】詠染の菊の一。斧と筆と菊の花とを染め出したもの。「善き事を聞く」との意を寓したるもの。浮世風呂何文字(記)とか豊何(記)とか名告(記)るべき十八九の白齒(記)、よきことをきくといふ昔模樣、詠染の新形浴衣(記)ををかへて

よき夜汽車 夜行の汽車。

よきち 避路【名】よきみち(避路)に同じ。【古語】萬葉みわの崎荒磯(記)も見えず浪立ちぬいづこゆ行かむ避路はなしに

よきごち ばり 夜着綴針【名】やぎごちばり(夜具綴針)に同じ。

よきなし 餘儀無し、餘義無し【形】その事以外に取るべき道無し。せんかたなし。よんどころなし。是非に及ばず。

よき一筋に心を寄せてあり。心中腹置、さて女房か。半兵衛殿。これ、伯母様、さてさてと、互に餘儀なく見えければ

よきみち 避路 避道【名】他に避けて行く路。わきみち。よきち。【古語】源氏「かの瀬は、よきみち無かなるを」

よきん 預金【名】「英」英「Deposit」直接又は間接に利殖の方便として、金銭を預けおき、預かりたる者は、これに對して、規定の利子を付與すること、又その金銭、當座預金定期預金などの別あり。

よきんがかり 預金掛【名】官公署銀行、會社などの一部預金の事務を擔任するもの。

よきんぎん 預金銀行【名】預金の取扱を主要なる業務とする銀行。

よきんじゆんひぎん 預金準備金【名】銀行が、預金の拂戻に應ぜんための準備に充つる金。預金總額に對する割合は、貯蓄銀行に對しては、預金の四分の一以上の金額を、利附國債證券又は地方債に備へおき、これを供託所に預け入るる

よきんせ

を要し、もし、擔保金額が資本金の半額以上に達する時は、商業手形及び確實なる會社の債券又は株券を用ふるを得と規定せり。

よきんせん 預金箋【名】「商」當座預金を銀行に預け入る時、その金高を記入し、銀行に入るべき現金又は小切手形、有價證券などを添へて、出納掛に差し出す用箋。斯くして、差し出したる預金箋は、收納済の検印を得て、當座預金掛に至り、預金元帳への記入を請ふべく、又、現金及び當該銀行宛の小切手形ならば、現金だけは出納掛に納め、検印を得たる預金箋に小切手形を添へて、當座預金掛に差し出すべきものとす。

よきんせんちやう 餘金箋帳【名】「商」英「Deposit slip book」多數の現金箋を綴ぢ合はせ、當座預金預入の關係ある者に交付し、預入の都度、その預金箋を漸次に使用せしむるやうにす。

よきんてがた 預金手形【名】「商」英「Certificate of deposit」銀行が、一時の預金に對して振り出す證券(商法上の手形には非ず)現金授受の手数と危険とを省くため發行し、預金主又はその人の指圖人の要求次第に、その金額を支拂ふべきものとす。ふりだし手形。

よきんてがた 預金手形預金【名】「商」銀行に當座預金を有せぬ者が、預金手形の交付を受けるためになす預金。通例利子を附せず。

よきやう 餘經【名】他の經文。その佛經以外の佛經。大鷲法華經一部を説きたてまつらんとてこそ、まづ餘經を説きたまひけれ。【西國當座】彌陀の教を頼まば、未の法(記)、萬年(記)經るまでに、餘經の法(記)は、よもあらじ

よきやう 餘響【名】よん餘響に同じ。

よきやう 餘行【名】佛餘宗の行法(記)沙石集餘行餘宗を誹り、餘の佛菩薩神明を輕しむる事

よきやう 餘興【名】「集會」宴會などの際、規定の式の終りたる後に、種種の技を

よきり

演じて、興を添ふること。興を添ふために、他の物事を附け加ふること、又、附け加へたるために、興の添はる物事。

よきり 夜霧【名】夜間の霧。夜立つ霧。よきり 夜切【名】夜の屋尻切(記)。新永代集「主藏に夜切をして、したたか巻物を盗み

よきりがくり 夜霧隠【名】夜霧の暗きに紛れ隠ること、又その場所。萬葉「年において今日かまくらむねば玉の夜霧がくりに連雲の手を」

よきりこもる 夜霧籠る【動四自】夜霧にこもりて、明かならず。萬葉「ねば玉の夜霧ごもりて遠くとも妹が傳(記)は古く告げこそ」

よきり 過る【動四自】通り過ぐる序に立ち寄る。過訪。駕を枉ぐ。源氏「よきりおはしましけるよし、只今なん人中すにおどろき」

よく 欲慾【名】物をほしがること。物を望み貪る心。欲心。欲情。欲望。利欲。欲が突張る【句】次條を強めていふ語。

欲が張る【句】よくばる慾張る【句】同欲する體は爪落す【句】「慾の蕪塵、誤を裂くに同じ。【諺語】

欲と相談【句】利益の有無に依りて、事を爲し或は爲さぬこと。【形容語】欲と二人連【句】利慾のために働く

欲に頂は無い【句】欲心は満足する時無し。【諺語】

欲には目見えす【句】次條に同じ。【諺語】

欲に目が暗む【句】次條に同じ。【諺語】

欲に目が暗る【句】次條に同じ。【諺語】

欲に目が無い【句】利欲のために、是非の判斷を失ふ。【諺語】

欲に目が見えず【句】前條に同じ。

欲の皮【句】「かば皮」は接尾語「よき(欲を強めていふ語。

欲の皮が突張る【句】「欲が突張る」

「こと」 印青〔名〕 汰青を指さる

よくや

よくじやう 翼狀「名」鳥の翼を、張り展
げたるに似たる形。
よくじやうがこく 欲生我國「句」「佛」

『我國に生れんことを欲(ひ)ふ意。我國と
は、阿彌陀佛が、その居る所の西方淨土を
指していふ。大無量壽經の卷上の四十八
願中の第十八願に「設我得佛、十方衆
生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不
生者、不取正覺。唯除五逆、謗謗正
法」とあり。西方淨土に生れて、阿彌陀
佛の許に至らんことを、衆生(しゆじやう)の欲
(ほ)ふこと。 聖古教信七卷に「欲生我國の提
燈に、不取正覺(せきぎやく)の與を照ちして」
よくじやうきん 翼狀筋「名」「醫」咀嚼
筋の一部。内・外の二に分る。

よくじやうく 翼宿「名」よく(翼)に同じ。
よくじやうく 翼手類「名」「動」哺乳類
の一目、外形は鼠に類すれども、前肢、後
肢及び尾部の間に皮膜ありて、前肢の趾
骨、著しく伸長して、これを支持する骨と
なり、これによりて、空中を飛行し、又、
趾骨の皮膜外の端に鉤爪あり、飛行せざ
る時は、皮膜を疊み、その鉤爪によりて倒
懸す。蝙蝠(ひょうぶ)の類、これに屬す。

よくじやうく 翼如「貌」掛(か)きたるさま、
左右の臂を擴げて、前に進み歩むさま。
よくす 浴主「名」「佛」ちよく(知浴)に
同じ。

よくす 横白「名」「漢白(びやく)の約」横ざ
まに造りたる白。「古語」記「横(びやく)の生
(う)」によくすを作りよくすにかみし大御
酒(みよし)。

よくす 浴す「動」佐變目「動」浴む。入浴す。
よくす 浴す「動」感謝すべき程に受く。
よくす 浴す「動」佐變目「動」長き絲を矢に結
びつけて、鳥を射る。いぐるみにす。

よくす 浴す「動」水を浴ぶること、又
その水。
よくす 抑制「名」抑(おさ)へるとどむるこ
と。
よくす 翼成「名」扶翼して成就せし
むること。

よくす 沃饒「名」地味肥えて、作物の
みのり饒(に)かなること。肥沃なること、

よくせき

よくせき 翌夕「名」翌日の夕。翌晩。
よくせき 沃瘠「名」地味の肥えたるこ
と、瘠(し)せたること。肥瘠。

よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。

よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。

よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。

よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。

よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。

よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。

よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。

よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。

よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。

よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。
よくせき 翼「動」よくよくに同じ。

よくちや

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。
よくちや 浴湯「名」湯を浴ぶること、又
その湯。

よくねん

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。
よくねん 翌年度「名」その次の年度。

おと

よに

五

ををわ ゐれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

をさるわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

あ

よこし。【名】「動」うづわがつを（雲文松魚）に同じ。

よーびじ【名】『いをぐし(魚串)の訛』魚を焼く時に刺す串。「東北地方の方言」

よこし夜越【名】夜を越えること。一石を過すこと。よどほし。よひごし。散木

「君がため夜ごしに摘める七草のなつた
の花を見てしのびませ」
■夜道に、山・

原などを通り越すこと。よごえ。道中雙六
私シは、今夜は夜越に行く」

よごじ 汚【名】**㊦**よごすこと。**㊧**あへもの
(汚物)を云ふ。「女の語」藤栗毛「南瓜(カボチャ)」の

胡摩汁か、薩摩芋のよどしが出るだらう」

又その敷方の疊。禁秘抄「横敷前有硯」

横敷の座〔包〕疊を横に敷きて設けたる座。江次第「大辨著二横敷座二」

よこしぐれ 横時雨【名】横さまに降るしぐれ。夫木「旅の庵は嵐に騒ぐ横しぐれ」

れ柴のかこひにとまらざりけり」

よこじとみ 榎並
【名】ヨコカハシ(廊下)榎
二に同じ。

よこしぶき 横繁吹 **【名】**横さまに吹き
掛くる雨。横ぶりのしぶき。なぐれ。

よこごぶじ 横十字【名】十字形の模様
の黄の泉を、縦のよりも長くせるもの。

よこしま邪【名】『よこさま(横様)の轉』

心のねちけ曲れること。心術の正しからぬこと。よこさま。邪曲。

横しまの義をば神祇用ひず〔名〕
「神は非禮を享(う)けず」に同じ。〔諺語〕

盛衰記「神は非禮を享けずといふ事なれ
ば、……黄しまの義をば、神祇用ひず

といふ事なれば」

よこしま 杖紮「名」絆の絆の 杖角
なせるもの。(縦縞に對して) 諸國はなし

「帯は常常見つけし横縞の黃色にして」
よこしまい 夜越米「名」たてまい（建米）

に同じ。「取引所の語」
よこし事ごと 邪言〔名〕ざんげん（讒言）

に同じ。「古語」紀「讒言、ヨコシマユト」

うに模様を現したる菖蒲草。くつめがた。

よこす

よこす 【勤四他】 おこすに同じ。 狂言(鈍根草
「己(オ)がぢや。 よこしをろ」

いふ事だ。はは、はは、こりや、はあ、横
つ腹が痛くなり申す。辨慶の差してお
出てやつた腰の物は、御座へたもんだ
から、流れべいかたあ御座んないは」
よこつら 横面「名」よこがほ(横面)を
卑しめていふ語。よこつら。横の表
面。よこがは。側面。

よこて 横手「名」横の方。側面。よこつ
て。夫木「木細神樂」手に取り飾る神
神(羽)のみを横手にすめつるかな」
諸國はなし「横手の舞を切り抜き」乳附
(乳)の旗の上部に、横に取り付けて、乳に
通すやうにせる、短き棒、又、長旗の横上
(乳)。

よこて 横手「名」(地)羽後國平鹿(平鹿)郡
にある町。陸羽街道平和街道由利縣道
の交叉點。國內東部第一の都會。秋田市
を距る十九里二十五町。郡役所あり。

よこて 横手「名」側面にて、雙手を合は
せ拍つこと。

横手を合はす「句」次條に同じ。舞の
本(鳥)折「横手を、ちやうど合はせ」
横手を打つ「句」感じ入り、思ひあた
る節ありなどしたる時、思はず知らず
兩手を打ち合はす。五人女飛脚、横手
を打つて、さても忘れたり。刀に掛りな
がら、狀箱を宿に置いて来た」若風俗
「これはと横手を拍つて、いつとなく亂
酒になつて」

よこて 横手「名」横の方より
縋り附くこと。吉野忠貞(組)を傳ひに
滑(り)り来て、横手縋にしや捕つた」
よこて 横手山「名」(地)信濃・上野
二國に跨る山。高さ七八九〇尺。

よこて 善事「名」善き事。幸(ひ)ある事
柄。吉事。「古語」舊曆新しき年の始の
初春の今日降る雪のいやしけよこと」
よこて 壽詞「名」(吉)き言葉の義。天
皇の御代を壽(き)き奉るために綴りた
る詞。皇天(の)つ神の壽詞。祈り請
ふ言葉。「古語」竹取「今より後は、毛
の末一筋をだに動かし奉らじと、よごとを
放ちて、立ち居、泣く泣く呼ばひ」

よこて 夜毎「名」夜になるたびに。よな
よな。毎夜。

よこて 横綴「名」書冊を、横に長き形
に綴つること、又その綴方の書冊。
よこて 横飛「名」身を横にして、飛
び越ゆること。よこつとび。身を斜に
して、突き切るやうなる姿勢にて、急ぎ
走ること。よこつとび。義經千本櫻挑燈吹
消し、首ひつさび、わが家をさして」

よこて 横樋「名」横に取り附けたる
樋。(堅樋に對して)
よこて 横艦「名」和船にて、剣先船
(舟)大和建造(舟)船などにある艦の
形式。

よこて 横取「名」横取ること。横奪。
諸國はなし「某の一人娘……横取にして抱
き逃ぐるを」

よこて 横取「名」横あひより
奪ひ取る。横奪す。「古語」源兵衛より
御氣色(さ)あらんを引ききたがへ、横ど
りたまはんを、かたじけなき事とおぼすこと」
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに
よこて 横長「名」横に長きことに

疑はるる女に代りて、移くれを引く袖人は数多なれど君より外に横目やはする」(四見守ること、又その人。監視。油精「命知らず」とし言はば言へ(いふ句)に横目ある若衆につんと打込みて」若風俗「風俗なる美少(さか)」、何れか大名の御慈愛と見え、横目らしき坊主二人召し連れられし」(四よこめつけ(横目)召し寄せ) 甲陽軍鑑横目の二十人衆を召し寄せ」(四よこめつけ(横目)召し寄せ) 略。相撲、秋來ぬと古き扇を忘れれば又貼り替へよ横目ならぬに」(四形、目の字を横に書きたるが如くなるよりいふ) 漢字の部首の一。「羅」に「罪」に「罪」などの字の上部にある四。四、四、四、四とも書き、元來、「網」の字の古字にて、この部首を帯びたる字は、大抵、「網」の意を含めるより、「網頭(まなこ)」ともいふ。

横目を造ふ(一)横目(二)を爲す。
よこめ 夜籠(一)夜をこめて爲すこと。夜をも含めて卒すること。新古今夜籠るもと山遠く列卒(二)立てて夜ごめの鹿の行く方ぞなき」
よこめ あぶき 横目扇(一) 櫓扇の一種。櫓の板の横目なるものにて製す。

よこめいた 横目板(一) 横に取り附けたる目板。堅羽目板の横の横目に取り附くる目板。
よこめつけ 横目附(一) 足利時代より織田豊臣兩時代にかけて、武將の家にて、政治の可否將士の舉動等を注意監視せし職。よこめ。めつけ。ききや。

よこめやく 横目役(一) 横目(二)なる職務。めつけやく。織田家久しき者ばかり召し寄せられ、實引(二)を仰せつけられける。……横目役の人、自然と目がねの當るもをかし」根拠其其冥途……三人の一生の事を見届けて、帳に記す横目役」

よこめくろく 横目録(一) 目録(二)の横紙に記したるもの。昔、下輩より貴人へ

の目録は、この方式に依るべきものと定まりたり。(堅目録に對して)
よこめ 横文字(一) 横さまに書きゆる文字。左より右へ書く西洋文字、梵字、又、右より左へ書くアラビヤ文字などあれど、主として、西洋文字を指していふ。
よこめ 横木瓜(一) 紋所の一。横に長き形に描きたる木瓜。(堅)木瓜に對して。浮世風呂將菜……そりや玉手、逃げたな、逃げたな。逃げたの内に横木瓜」

よこめ 横物(一) 横に長き形の品物。書畫などの横廣に書きたるもの(堅物に對して) 三日本平記定家家隆の歌書横物」
よこめ 夜籠(一) 夜ごめること。夜深きこと。神佛の堂舎に、祈願のために通夜(二)して籠ること。きこと。

よこめ 世籠(一) 世ごめること。年若きこと。夜籠る(動四目) 夜深くあり。夜、未だ明けず。(古語) 重々集東雲(二)にあしたの原を越えればまだ夜ごめれる心地こそすれ」神佛の堂舎に、祈願のために、通夜(二)して籠る。夜ごめりす。

よこめ 世籠る(一) 生先(二)籠る。年若くあり。春秋に富む。源氏「少しよこめりたる程にて」
よこめ 横矢(一) 敵の横あひより射る矢。側面より飛び射る矢。太平記川を渡す敵あらば、横矢に射る」同清き雙べたる敵に、射手と覺えたる兵數萬人……、横矢を射んと稱へたり」(よこめ)横矢狭間の略。

よこめ 横谷玄圃(一) 人(二) 儒者。名は友信、字は文卿。藍水と號す。江戸の人。初、醫術を學び、後、高井蘭亭に詩歌を學び、服部南郭と共に、詞壇の盟主たり。安永七年歿す。年五十九。
よこめ 横矢狭間(一) 横谷宗現の間に同じ。

よこめ 横谷獅子(一) 横谷宗現の門人柳川宗圓直政の彫刻せし獅子。

よこめ 横谷獅子(一) 横谷宗現の門人柳川宗圓直政の彫刻せし獅子。

よこめ 横谷宗現(一) 人(二) 金工。名は友常、通稱は長三郎。後、治兵衛と改む。遷庵と號す。江戸の人。宗知の養子。横谷風中興の祖と稱せらる。享保十八年歿す。年八十三。
よこめ 横谷宗現(一) 人(二) 金工。名は盛次、通稱は治兵衛。京師の人。後藤の門。寛永中、徳川氏に仕ふ。元祿三年歿す。

よこめ 横谷風(一) 江戸時代の金工横谷宗現等一派の彫刻の風。圖樣斬新にして、刀法雄健なり。
よこめ 横谷宗現(一) 影金術の一派。正保中、横谷宗現、これを始め、宗知、宗現、二代目宗現等の名匠輩出し、主に小柄目貫、縁頭等の装剣具を製したり。まちほり(町彫)參照。

よこめ 横山(一) 横たはれる山。祝詞「奥(二)つ葉菜(三)邊(四)つ葉菜に至るまで、横山の如く、打積み置きて」
よこめ 横山(一) 武藏國南多摩郡にある村。八王子市の西南、もと横山の名は、小佛(二)峠以東多摩河畔に至る、淺川以南の一帶の稱にて、今の八王子市の邊を含みしが、近世その縁を以て、この村名を立つ。和泉國泉北郡にある村。もと舊泉郡の莊名にて、池田川の上流、七越(二)山横尾(三)山の山麓に當る。後、東横山、西横山、南横山の三村となり、明治三十六年、東西二村を合はせて、この村名とす。木炭の産出によりて有名なり。

よこめ 横山興孝(一) 人(二) 通稱みち、月廻合と號す。本間游清に學ぶ。安政二年歿す。年五十六。
よこめ 横山神道(一) 神道の一派。横山當榮(當永とも書く)の唱導せしもの。

よこめ 横山桂(一) 人(二) 女歌人。通稱みち、月廻合と號す。本間游清に學ぶ。安政二年歿す。年五十六。
よこめ 横山神道(一) 神道の一派。横山當榮(當永とも書く)の唱導せしもの。

よこめ 横山炭(一) 元だずみ(枝炭)を見よ。新古今としていかに焼けばか和泉なる横山炭の白くなるらん」
よこめ 横山黨(一) 武藏國の七

よこめ 横山黨(一) 武藏國の七

黨の一。今の南多摩郡に屬する、多摩川南岸の丘陵即ち、もと多摩の横山と呼びし地に住みしもの多なるが如く、猪股(二)黨と同じく、小野武藏守孝泰より出で、その氏族、三十八の多きに達し、織田信長時代までも、存続したりといふ。
よこめ 横山邊(一) 名「ろは接尾語」横山のほとり。(古語) 萬葉妹をこそ相見に來(二)しか肩引(三)の横山べるの應(四)なす思へる」

よこめ 横山丸三(一) 人(二) 海宮衛の開祖。江戸の人。三五郎の子。名は興孝、通稱は三之助。海山人、小駒弁百田棟、春龜齋木黃山人などの號あり。徳川幕府に仕へて、御留守居番組頭たり。奥野清次郎に天源衛を學び、落髮して、丸三を通稱とし、海宮衛の名を設けて、弘く教授す。安政元年歿す。年七十五。

よこめ 横山由清(一) 人(二) 國學者。通稱は保三。江戸の人。本間遊清に學び、歴史法制に精しく、著書頗る多し。明治に至り、元老院少書記官に任ぜられ、同十二年歿す。年五十四。
よこめ 横槍横鐵(一) 兩軍の接戦中に、別に敵の側面より、槍にて突きかかること。わきやり。甲陽軍鑑「一の手二の手横槍脇備後備(二)」對話中に、横あひより、第三者のさして口を爲すこと。容喙。

横槍が入る(一) 敵の側面より、槍にて突きかかる。對話中に、横あひより、話をまじへらる。
横槍に入る(一) 次條に同じ。甲陽軍鑑「小田原退口の時……、勝頼公自身、鐵取つて横鐵に入り、崩し」横槍を入る(一) 敵の側面より、槍を以て突き入る。脇槍に入る。對話中に、横あひより容喙す。脇槍を入る。

よこめ 横雪(一) 横さまに降る雪。右京大夫集、袖にも、横に、横雪にて入りて」
よこめ 汚る(一) 動下二目(二) ける(三) 汚るに同じ。相模集「早苗引き裳裾(四)汚るといふ田子もわがごと袖はしほとからじな」甲陽軍鑑心中のよごれたるは、何に

よこめ 汚る(一) 動下二目(二) ける(三) 汚るに同じ。相模集「早苗引き裳裾(四)汚るといふ田子もわがごと袖はしほとからじな」甲陽軍鑑心中のよごれたるは、何に

し、西に屈折して、住吉の淺澤となりし
が、寶永中大和川の流域變更の際、過半は
その川床となり、ただ僅かに、大阪市東成
(註)區依羅に、その址を存するもの、仁
右衛門(註)池の名を以て呼ばる。

よさみののらは 依羅原(名)「(地)大阪市
東成區の一部、舊住吉郡大依羅(註)郷の
地にある式内の古社大依羅(註)神社の
邊、舊葉あをみづら依羅の原に人も途
はぬかもいははしの近江縣(註)の物語
せむ」

よさむ 夜寒(名)「秋の末頃、夜の寒くな
ること、又その季節。玉葉、庵むすぶ早稻
田(註)の鳴子(註)引きかへて夜寒になり
ぬ露のころもて」

よさむのささ 夜寒里(名)「(地)尾張國
にありきといふ地、名古屋市の一部熱
田の附近、高藏森の南なりといふ。親太
「風吹く夜寒の里の寢覺にはいとど人こ
そ戀しかりけめ」

よさむやき 夜寒焼(名)「名古屋市中區
東古渡町辻鉦二郎が明治二十四年、夜寒
の里にて焼き初めし陶磁器。染附(註)の
磁器、最もすぐれたり」

よさん 餘山(名)「他の山。その山以外
の山。太平記若し遅く退治せば、朝白山
の衆徒等成り合ひて、由由(註)しき大事な
るべし。時を替へず餘山を打落して」

よさん 餘算(名)「決算して餘れる數。
殘餘の數。『よめい(餘命)に同じ。方丈
「一期(註)の月影傾きて、餘算、山の端に
近し」

よさん 豫算(名)「あらかじめ見つも
りを立つること。『(經)國家又は公共
團體が、財政監督の方法として、次の一會
計年度の收入と支出とを、あらかじめ計
算して、表にまとめるもの。國家のは、
各省より提出せる豫定經費の概算書を基
礎として、大藏大臣總概算書を調製し、
閣議を経て、帝國議會に提出し、議會の議
決と裁可、公布とを経て成立し、公共團體
の内、地方自治團體のは、執行機關に於て
調製し、議決機關の議決を経て成立し、
行政官府又は執行機關は、その成立した

るもの。範圍内にて、收支を爲すべきも
のす。

よさん 豫參預參(名)「豫は與・預と
同義。さん(參)に同じ。東鑑、備二具
便宜勇士等、可豫參。太平記、宗論あり
しに、...、南都よりは、松室貞松房仲算
已謬ぞ參られける。豫參の日にたりしか
ば、仲算既に南都を出てて」『江戸時
代に、將軍の寛永寺・増上寺等へ御成の
日、先に寺に參り居りし役。』

よさん 豫算案(名)「豫算の草案。
『(法)政府の豫算の、帝國議會に提出し
て、未だその議決を経ざるもの。』
よさん ちりあけかんちやうしよ 豫算實
上勘定書(名)「商しちりあけかんちや
うしよ(試算實上勘定書)に同じ。』

よさん ちりあけいさんじよ 豫算實上
計算書(名)「商しちりあけいさんじよ
に同じ。』
よさん おくりじやう 豫算送狀(名)「
『商しちりあけいさんじやう(試算送狀)に同じ。』
よさん かくかんすう 餘三角函數(名)「
『數』三角函數の六條の内、餘弦・餘切・餘
割の總稱。』

よさん きていけん 豫算議定權(名)「
『(法)帝國議會の、政府の豫算を議定する
權限。』
よさん ぐわい 豫算外(名)「豫算に費
目を組み入れてあらぬこと、又その費目。
『豫定の外。豫想の外。』

よさん てうくわ 豫算超過(名)「收入、又
は支出が、豫算以上の額に達すること。
よさん ふうせいりつ 豫算不成立(名)「
『(法)國家の豫算の成立するに至らざる。』
政府が豫算案を提出せざりし時、政
府の提出したる豫算案に對して、帝國議
會が討議、議決せざりし時、帝國議會の
解散又は停會を命ぜられ、或はその案を
否決せる等のため、裁可を請ふに至らざ
りし時、若しくは、議決を経て、奏請した
る後、裁可を得ざりし時等に、この結果を
生ず。この場合は、前年度の豫算に依る
べきものとす。

よさん へんじやう 豫算返上(名)「(法)

帝國議會が、政府提出の豫算案を、編制粗
漏なりと認めて、更に適當なる編制を爲
さむるために、これを返付すること。
よさん おねん 豫算委員(名)「貴族院と
衆議員との常任委員の一名。政府の提出し
たる豫算案を審査して、その所屬の議院
への報告を任務とするもの。』

よさめ 夜雨(名)「夜降る雨。やう。諸曲
(註)「村雨の古屋の軒の板庇、目ざます
程の夜雨や」
よさよ 夜雨(名)「ゆさゆさの轉。狂言那須與一
「昔紅の扇の目を出したる、舟のせがい
に、よさよと挟みて」
よささ 夜さら(名)「よさ(夜去)の轉訛。
『(註)「私(私)は松坂へ戻る者ぢやがな、
夜さら、一人、こはうて、こはうて」
よささ 夜晒(名)「夜、戸外に晒しおく
こと。』

よささ 夜去(名)「ゆさ(夕去)を見
よ」よる。よ。ばん。ようさ。よさ
つきた。ようさつきた。源兵衛の夜さ
り、家子(註)の餅(註)參らせたり」
よささ つかた 夜去方(名)「前條に同
じ。夜さりつかた式部の丞のりま
さ參りたり」
よささ かな 夜去夜中(名)「よるよな
(夜夜中)に同じ。『(註)「この三位中將の
御事をいみじき事に思して、よさりよな
かばかりにおはするにも」
よささ 寄る(動四目)「よる(寄る)に同
じ。『(東國の方言) 萬葉、遠しといふな古
奈(註)の白峰(註)に逢ほしども逢はのへ
しも汝(註)にこそ依れ」
よさ 葎(名)「(植)「あしは惡しの意に
聞ゆるより、善しの意に言ひ變へたるも
のといふ。あし(葎)を云ふ。『(東國の方言)
葎の髓から天井を見よ』(句)「管の
穴から天を覗く」に同じ。『(談語)』
よさ 由(名)「四段活用によさ(寄す)より
出づ。『(物事)の起る由來。よりどころ。
いはれ。ちなみ。ゆかり。ゆゑ。よせ。
よるべ。よすが。由緒。理由。事情。紫
式部日記物思みける人の行く末、命長か

るめる由ども見えぬなり」源兵衛聊か由
ある人は、...、なほ絶えず言づれ来る
も」奥ゆかし、なほ絶えず言づれ来る
もの。ふし。おもむき。ゆゑ。源兵衛、よしあ
る果物(註)「有など。』目手がかり、方法。
手段。口實。萬葉妹が門(註)行き過ぎか
ねつ久方の雨も降らぬかそを因(註)にせ
む。今出てて行かん人をとどめん由
なきに隣の方に昇るひぬかな」因うは
べの様子。そぶり。形式。日中行進する
はしく召すべきを、近代はよしばかりな
り。太平記、きたなし、返せと置(註)りて、
馬を争ひて追ひ懸けたり。...、聞かぬよ
しに打ちけるを、手茂く追ひて懸かり
しかば。』いはれ。儀。旨。次第。『云
云なる由申居り候。』壁臺記、北條四郎時政
は、兵衛佐殿を取り立てて、謀叛を發(註)
すべき由承り及ぶ」
よさ 由(名)「(句)古、禁中にて、御忌
服などのために、神事などの取り止め
られたる時、その由を神に告ぐのため
の祓。『(註)「近代由祓也。自二日一
精進、不供魚味」
よさ 由(名)「(句)事の由を神に告げ奉る
ための奉幣。大嘗祭由奉幣、齋王卜定由
奉幣、御元服由奉幣などこれなり。御
即位の後、奉幣使を遣して、大嘗會を行
はるべき由を、伊勢大神宮、又、後には、
その外、石清水(註)、賀茂の二社にも、
報告せしめられしこと。三社に報告せ
らるることとなりては、三社の奉幣とも
呼ばれたり。『(註)「せられし御使
由の奉幣使(句)前條の奉幣に派遣
よさ 止(名)「よすこと。止(止)むること。
やめ。『(註)「萬葉、物を用無といふ詞の代り
に、よしにせよといふは」
よさ 善し良し佳し好し吉し嘉し
可し「形」「すぐれてあり。上等な
り。良好なり。美麗なり。』身分す
ぐれてあり。たふとし。尊貴なり。古今
しへの(註)の緒環(註)いやしきもよ
きも盛(註)はありしものなり。』仕合
(註)すぐれたり。幸運なり。幸福なり。
四程あひ、すぐれてあり。適度なり。ほ

を五むわ ゐるるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねにほ とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

を五むわ ゐるるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねにほ とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

を五むわ ゐるるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねにほ とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

を五むわ ゐるるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねにほ とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

そ

どよし。⑤筋道に叶へり。ただし。善なり。正當なり。⑥害を防ぎ又は除くに適してあり。ききあり。効能あり。⑦「病によし」。⑧意に適してあり。快し。樂し。めでたし。むつまじし。萬葉。春山の崎のたをりに若菜摘む妹が白紐(シ)見らくし好しも。⑨若菜よき中なれば聞かせてけり。⑩祝ふべし。めでたし。今日の佳き日。⑪難き點なし。やすし。たやすし。樂なり。⑫許して差支無し。苦しからず。可なり。⑬殊更に反對にいふ。善からず。

善い加減(句)⑭適當なる程あり。狂言。⑮「海道に出て、茶屋をして食ふ奴(シ)が、ぬるい。熱いを知らぬか。これこれ、茶屋殿、よい加減にして進ぜられ」。⑯結果は如何にとあれ。その場の都合よきやうにしておくこと。まにあはせ。ごまかし。いい加減。⑰他人の過度なる振舞を制するにいい語。いい加減。

好い氣(句)⑱他人の思ふ所を顧みず、ただ己一人満足してあること。自分勝手。得意。いい氣。⑲「人の迷惑は考へず、よい氣なものだ」。⑳「少し譽められると、すよい氣になる」。

好い肝を潰す(句)㉑非常に肝をつぶす。甚しく驚く。いい肝をつぶす。狂言。②「なんぢや、馬ばくらうぢや。身どもは、目代殿かと思つて、よい肝をつぶした」。

好い兒になる(句)㉒次條に同じ。好い兒の振をする(句)㉓幼兒が、他と共に惡戯をしながら、見附けられたる時、自分のみは興り知らぬやうに裝ふ。㉔自分も關係しながら、迷惑を避けて、興り知らぬやうに裝ふ。

好い衆(シ)㉕次條に同じ。天の網鳥「上下(シ)著飾り、脇差、羽織、あつぱれよい衆の金遣(シ)」。紙屋とは見えぬ。好い衆(シ)㉖「身分よき人たち。よいしゆ。二代男、平城の袖鑑に、よい衆分限者(シ)」。金持として、これに、三つの別あり。俗言に、よい衆といふは代

そ

代、家傳もなく、名物の道具職へて、雲に茶の湯、花に歌學、朝夕、世の事わざを知らぬなるべし。又、分限者といふは、所に、人もゆるして、商賈は止めず、その家の風を、手代に捌かせ、その身は、諸事を構はぬなるべし。金持として、ふは、近代のしあはせ、米のあがりを請け、よろづの買置、又は、金貨、自身に、帳面も改むるなるべし。

好い月日の下(シ)㉗に生る(句)㉘結果より見て、生れたる月日の好かりしためならんと想像していふ。幸運なる人を形容していふ語。好い面(シ)の皮(句)㉙他人のために非難、不利益等を蒙りたる時にいふ語。いい面の皮。

好い手(句)㉚よき方便。都合よき手だて。重難(シ)乳母(シ)が不調子とは、よい手な事おつしやれな。天神(シ)拾子といふたらば有免せうと思つてか。よい手な事言ふまい。

好い年(句)㉛可なりの年齢。相當の年齢。いい年。狂言。③「よい年をして、子供のやうに大鼓持役をするといふ事があるものか」。㉜「下を見よ」。

好い鳥が囀(シ)㉝「(句)とり(鳥)の條。好い仲に垣をせよ(句)」。㉞「親しき仲には垣をせよ」に同じ。㉟「諺語」。

好い仲の垣(句)㊱「前條を見よ」親密なる間柄ながら、守る所はあらること。生玉心中「懇の仲、手形も入らぬとぬかしたれど、よい仲の垣と、預(シ)證文してやうた」。㊲「小靜」に同じ。㊳「諺語」。

そ

好い仲の小靜(シ)㊴「(句)」。思ふ仲の好い値(シ)㊵「(句)」。可なりの値段。高價。好い星の下(シ)㊶に生る(句)㊷「好い月日の下に生る」に同じ。㊸「よ」。

好い目が出る(句)㊹「(句)」。條下を見善かれ。悪しけれ「(句)」。善きにもせよ。悪しきにもせよ、意に介せずして爲すにいい語。どのみち。善き哉「(句)」。せんさい「善哉」に同じ。

善き哉「(句)」。せんさい「善哉」に同じ。著聞「その夜の夢に、貴き僧、枕に来ていはく、善きかな、善きかな、汝、一乘の轉讀企てつる事をとて、感涙を流して」。好き佛師も、斧の蹟(シ)あり「(句)」。「猿も木から落ちる」に同じ。㊸「諺語」。

善きも悪しきもあるべし「(句)」。人の噂も七十五日に同じ。㊹「諺語」。

善くなし物の煮彫(シ)㊺「(句)」。味無い物の煮太(シ)に同じ。㊻「諺語」。

そ

可し、來た「(句)」。確かに引き受けたり、安心せよ。まかせ。善しに餘る「(句)」。善しと譽められて、なほ一層譽められんとす。お世辭を言はれて、得意になる。お調子に乗る。狂言。④「その時、某が、よしに餘り、板際にすると立ち寄り、筆、刀おつて」。

よじ 除失「(名)」。數「英 Covered line」。より或角の餘枝を減じたるもの。即ち「core」がAの餘失なる類。ろせん「(六線)參照」。

よじ 豫示「(名)」。あらかじめ示すこと。よじ 典師「(名)」。多くの軍兵。よじ 典子「(名)」。かごかき。轎夫。早子。よじ 餘資「(名)」。餘れる資金。餘分の資産。よじ 餘賁「(名)」。餘れる賁財。餘財。よじ 餘師「(名)」。孟子の告子下篇に「子歸而求之、有餘師」とあり。ゆたかに學力ある師範者。㊸「の外の人人」。

よじ 餘子「(名)」。長男の外の子。㊹「三餘子」は碌碌數ふるに足らず「(句)」。㊺「後漢書の福衡傳に「餘子碌碌、不足數」とあるに本づく」他は人人は、何れも價值なし。

よじ 縱「(動)」。止むを得ず、善しと思ひなして。よしや。よしよ。よしゑ。よしゑや。まよ。まよあらばあれ。萬葉「水底(シ)に生ふる玉藻の生ひ出でずよしこの頃は斯くて通はむ」。古今「萩の露玉に貫(シ)かんと取れば消(シ)ぬよし見ん人は枝ながら見よ」。㊻「たとひ。かりに」。

そ

萬一。よしは。よしんば。よしや。よし。萬葉「人はよし思ひ止むと玉葛(シ)影に見えつゝ忘らえぬかも」。よじ 餘事「(名)」。餘力にて爲す事。㊼「ほのかの事。他の事」。

よじ 否「(動)」。善惡「(名)」。よきと、あしきと。良否。可否。善惡「(名)」。㊽「由有るらしき顔。故ありげなる様子。諸曲(伏見)この尉(シ)が由あり顔に持ちたる花を」。よじ 餘臭「(名)」。後まで残れるにほひ。よじ 餘醜「(名)」。残れる醜類。伐ち洩されてある惡徒。㊾「ふこと。豫習」。

よじ 豫修「(名)」。豫備として修めなら。よじ 豫州「(名)」。地「(名)」。伊豫に同じ。よじ か「(名)」。れんこん「蓮根」を云ふ。「古のよし」か「(動)」。さうは言ふもの。いや、しかしながら。細細初月の紅雲參らしやれといふもあり、よし。置かしやんせ、今、おぢやて見やたら、留守明けたとて、さ(シ)しかる」。㊿「あしがき(草垣)に同じ。㊽「杉丸太を建て、竹の朋縁(シ)の上に葎を張り、竹を押縁(シ)とし、繩にて結び固めたる垣。狂言。⑤「人並敷」やあ、これに葎垣が有る。破りましよ」。㊿「置土産」よし垣に、秋を過ぎたる朝顔の」。よじ かこひ 葎垣「葎垣」(名)」。よしずがこひ(葎垣)に同じ。俳諧。古風。寒月や居合教(シ)の葎垣」。㊿「かじん」や、吉香神社「(名)」。周防國玖珂(シ)郡岩國町に鎮座せる縣社。祭神は吉川(シ)元春經義友兼經基元長等。よじ かは 初たる 吉川 惟足「(名)」。人神道家。初の名は元成。次に惟足、後、從時と改む。通稱は五郎左衛門。觀吾堂又、湘山隱士と號す。江戸の人。初、吉田兼從(シ)に學び、遂に一家を成す。徳川綱吉に召されて、幕班に列し、諸公卿の教を請ふ者、甚だ多し。元祿七年歿す。年七十九。よじ かは ちやう 吉川町「(名)」。地「(名)」。

ををわ るれるりら よゆや もめんむかま ほへふひは のねめにな とてつちた そせすしさ こけきか おえういあ

て謠ふは、曲節、都都逸とは別なり。よし
この。

よしすずめ 葭雀・葦雀【名】「動」よしきり
(葭切)に同じ。 運歩色葉集「葦雀、ヨシスズ

し、子孫、世世神祇官に居りて、その職を傳へ、下官ながら、官の全權を掌握し、白

吉田神社の祠官。神祇大副(ヲタ)に任ぜらる。吉田神道の祖。

よしだ

よしだかねよし 吉田兼好「名」「人」よしだけんかう(吉田兼好)に同じ。

よしだくわうさん 吉田篤敏「名」「人」儒者。名は漢官、字は學儒。世世水月の醫員たりしが、故ありて祿を奪はれ、姓名を佐佐木坦藏と變じて、江戸に出て、井上金峨に學び、博學を以て聞ゆ。専ら考證の學を唱ふ。兼ねて、書畫の鑑定に精し。寛政十年歿す。年五十四(一説には六十八)。自ら姓を修して、吉田といへり。

よしだくわん 吉田官「名」昔京都の吉田家より、裁許狀を興へて、神職に、大和守、和泉守などの官職を授けしもの。

よしだけんかう 吉田兼好「名」「人」本姓は卜部(三)氏。京都吉田に住みしを以て、又、この姓を稱す。老莊の書を読み、詞藻に秀で、和歌をよくし、兼ねて書を巧みにす。後宇多天皇に親寵せらる。天皇崩じて後、難髪して、兼好を「けんかう」と音讀し、閑かに世を送る。その著、徒然草、人となりを見るに足る。觀應元年歿す。年六十九。

よしださだふさ 吉田定房「名」「人」ふさ(藤原定房)に同じ。

よしださんざん 吉田三左衛門「名」「人」みやけしやうさん(三宅尚齋)を見よ。

よしだしげうち 吉田重氏「名」「人」弓術家。通稱は源八郎。一水軒印西(三)と號す。近江國の人。吉田流出雲派の祖吉田重高の子重綱の女を娶りて、その姓を冒す。徳川氏に仕ふ。吉田流印西派弓術の祖。寛永十五年歿す。年七十七。

よしだしげかた 吉田茂方「名」「人」よしだしげもち(吉田業茂)を見よ。

よしだしげかた 吉田重賢「名」「人」弓術家。近江國佐佐木氏一族。上野介と稱す。一説に、名は重長(茂長とも書く)なりともいふ。日置(三)流の祖日置彈正

よしだ

正次の門人。吉田流弓術の祖。よしだしげかた 吉田重高「名」「人」弓術家。出雲守と稱し、露滴と號す。重政の子。一説に、名は經茂(三)なりと、吉田流出雲派の祖。

よしだしげなが 吉田重長・吉田茂長「名」「人」よしだしげかた(吉田重賢)を見よ。

よしだじんじや 吉田神社「名」京都市上京區(三)區吉田町に鎮座せる官幣中社。祭神は武甕槌(三)尊・經津主(三)尊・天兒星(三)尊及び比賣(三)大神。貞觀三年(一)鑄造十七世の孫中納言藤原山蔭の、大和國春日神社の神靈を勧請(三)して、藤原氏の氏の社とせしもの。後二十二社の一に列す。

よしだしんたう 吉田神道「名」京都市の吉田神社の社司卜部兼(三)の唱導に係るよりいふ「ゆあいちんたう(唯一神道)に同じ。

よしだじやういん 吉田松陰「名」「人」勤王家。名は矩方(三)、字は義卿、通稱は寅次郎。二十一回猛士の號あり。長門國萩の藩士。杉常道の子。吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事す。

よしだじやういん 吉田松陰「名」「人」勤王家。名は矩方(三)、字は義卿、通稱は寅次郎。二十一回猛士の號あり。長門國萩の藩士。杉常道の子。吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事す。

よしだじやういん 吉田松陰「名」「人」勤王家。名は矩方(三)、字は義卿、通稱は寅次郎。二十一回猛士の號あり。長門國萩の藩士。杉常道の子。吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事す。

よしだじやういん 吉田松陰「名」「人」勤王家。名は矩方(三)、字は義卿、通稱は寅次郎。二十一回猛士の號あり。長門國萩の藩士。杉常道の子。吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事す。

よしだじやういん 吉田松陰「名」「人」勤王家。名は矩方(三)、字は義卿、通稱は寅次郎。二十一回猛士の號あり。長門國萩の藩士。杉常道の子。吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事す。

よしだじやういん 吉田松陰「名」「人」勤王家。名は矩方(三)、字は義卿、通稱は寅次郎。二十一回猛士の號あり。長門國萩の藩士。杉常道の子。吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事す。

よしだじやういん 吉田松陰「名」「人」勤王家。名は矩方(三)、字は義卿、通稱は寅次郎。二十一回猛士の號あり。長門國萩の藩士。杉常道の子。吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事す。

よしだじやういん 吉田松陰「名」「人」勤王家。名は矩方(三)、字は義卿、通稱は寅次郎。二十一回猛士の號あり。長門國萩の藩士。杉常道の子。吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事す。

よしだじやういん 吉田松陰「名」「人」勤王家。名は矩方(三)、字は義卿、通稱は寅次郎。二十一回猛士の號あり。長門國萩の藩士。杉常道の子。吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事す。

よしだじやういん 吉田松陰「名」「人」勤王家。名は矩方(三)、字は義卿、通稱は寅次郎。二十一回猛士の號あり。長門國萩の藩士。杉常道の子。吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事す。



(んいうよしだしよ)

よしだ

よしだそうけい 吉田宗桂「名」「人」醫家。一に意安と號す。京都の人。天文年間、明國に航し、醫術を究め明主の疾を診察して功あり。又、本草學に精し。慶長十五年歿す。年五十三。

よしだぢやう 吉田町「名」「地」東京市本所區の町。昔は夜鷹の巢窟として知られた。柳澤振袖て天命を知る吉田町(三)同「唐崎」と石山(三)らき吉田町(三)。

よしだつねひ 吉田經茂「名」「人」よしだしげかた(吉田重高)を見よ。

よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。

よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。

よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。

よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。

よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。

よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。

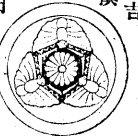
よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。

よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。

よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。

よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。

よしだつねふさ 吉田經房「名」「人」朝臣。姓は藤原。光房の子。建久中、正二位・大納言に至る。源頼朝と深く結託し、正治二年歿す。家、又勘解由小路(三)といひ、その日記を吉田(三)といふ。歌の勳業諸集に入れるもの多し。



(ふてだしよ)

よしだ

名を知る。江漢西遊日記新町を見物す。皆揚屋にて、その内、吉田屋といふ、名家なり。夕霧の文を珍藏す。日(人)俳優風小六(三)の屋號。

よしだやま 吉田山「名」「地」吉田神社あるによりていふ。京都市神樂岡(三)の俗稱。

よしだりう 吉田流「名」弓術の一派。吉田重賢を祖とするもの。よしだんたう(吉田神道)に同じ。日(三)鐵術の一派。吉田意休を祖とする。

よしだりういづも 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重高を祖とする。

よしだりういんさい 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重氏を祖とする。

よしだりういんさい 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重氏を祖とする。

よしだりういんさい 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重氏を祖とする。

よしだりういんさい 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重氏を祖とする。

よしだりういんさい 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重氏を祖とする。

よしだりういんさい 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重氏を祖とする。

よしだりういんさい 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重氏を祖とする。

よしだりういんさい 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重氏を祖とする。

よしだりういんさい 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重氏を祖とする。

よしだりういんさい 吉田流印西派「名」吉田流弓術の一派。吉田重氏を祖とする。

下の内、鎌田盛政・同光政、佐藤嗣信、同忠信の四人。

よじつねこじえじやう 義経腰越狀

よじつね 浄瑠璃の一名。後藤又兵衛基次、その事蹟を脚色し、名を五斗兵衛と改めたるもの。並木宗輔の作。

よじつねせんぼんざくら 義経千本櫻

よじつね 浄瑠璃の一名。源義経の四天王の一人なる佐藤忠信を中心として、その忠義を叙したるもの。竹田出雲、三好松洛、並木柳の合作。

よじつねばかま 義経袴

よじつね 浄瑠璃の一名。源義経の陣中にて用ひしものなるより名づくといふ。裾より少し上の所に、横に細き紐を通して縫い付け、袴装束、襦子軍中綴子などにて仕立て、腰に、白羽二重の紐を付け、裾の紐は、飾とし、又、引き締めて結ぶ料とす。明治維新前、兵士の訓練などに著用せり。

よじつねびき 義経鼻眞

よじつね 浄瑠璃の一名。ある屋

よじつねまゆ 義経眉

よじつね 浄瑠璃の一名。一字に、張

よじつねりう 義経流

よじつね 浄瑠璃の一名。兵法の一派。

よじつね 源義経の遺法なりと稱するもの。

よじつね 葎戸・葎戸

よじつね 葎戸の一名。細き葎にて編みたる葎を張りたる戸。夏季、襖・障子に代用す。

よじつね 夜尿

よじつね 夜尿の一名。夜尿、ヨジト

よじつね 義朝

よじつね 義朝の一名。人みなもとよしも

よじつね 葎鳥

よじつね 葎鳥の一名。動よしきり

よじつね 吉奈

よじつね 吉奈の一名。伊豆國田方郡上狩野の村の大字。大仁の停車場及び修善寺のより共に三里。温泉湧出す。鹽類泉にして妊娠に効ありと傳ふ。陸軍轉地療養所の設あり。

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無しの語幹。感動句に用ふ。新古今通ひ來のよそには人に見えながらよしなや何とつれなかるらん

よじつね 義仲

よじつね 義仲の一名。人みなもとよしも

よじつね 義仲の四天王

よじつね 義仲の四天王の一名。源義仲の臣

よじつね 今井兼平

よじつね 今井兼平の一名。樋口兼光の親忠

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。よりどころ

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。理由なし。故なし。關係なし。つきなし。竹屋益なきあり

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。誠に我君の御説に

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。手ばかりなし。解決の方法なし。更科ただ東路のみ

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。手の付けやうなし。取るに足らず。善からず。つま

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。心にしめて

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き心

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き事

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き事

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き事

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き事

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き事

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き事

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き事

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き事

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き事

よじつね 由無

よじつね 由無の一名。由無き事

よじつね 由無

よじつね 好しなに

よじつね 好しなにの一名。よき様に。よろしく。胸算用十難を一つ一つよしなに

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。大和國吉野

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。大和國十郡の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

よじつね 吉野の一名。地。美作國の舊郡の一名。中世、英多の

よじつね 吉野

4264

住む。龜田鶴齋に師事し、經學に精しく、詩文をよくす。嘉永年間、外交の事起るにあたり、これを憂ひ、同志の士と共に、兵制を講じ、海防の事を論ず。弘化四年、田中藩本多侯に仕へ、文久二年、昌平齋の教官となり、明治の初年、中博士に進み、十一年歿す。年七十七。

よしのくさ 吉野草 [名] 「植」 大和國吉野は、櫻花の第一の名所なるよりいふなるべし。さくら(櫻)の異稱。藏玉葉吉野草、櫻。日あけほのさ(曙草)に同じ。

よしのくさ 吉野葛 [名] 大和國吉野より製し出す葛粉。品質のすぐれたるによりて有名なり。

よしのくわんざん 吉野鑛山 [名] 「地」 羽前國東置賜(佐渡)郡吉野村にある鑛山。赤湯停車場より五里餘。主として、亞鉛鑛を採取す。

よしのくわんざん 吉野廣東繙 [名] 名物ぎれの一。島原の名妓吉野の茜に用ひしもの。

よしのくほり 吉野氷 [名] 吉野葛に、砂糖を加へて、固めたる菓子。白色にして、氷の如く見ゆ。 「草八手」に同じ。

よしのくさう 吉野草 [名] 「植」 くさやつてよしのくさう 吉野櫻 [名] 大和國吉野山にある櫻。 「植」 櫻の一品種。樹皮は黒褐色を呈す。葉は楕圓形にして、尖端光り、邊緣に小鋸齒あり。花は四月頃、葉に先だちて密集して開き、白色又は淡紅色にて、甚だ美し。果實は核果にして、紫黑色を呈し、生食すべし。材は器具の料となる。東京府北豐島(荒川)郡下桑井(新井)村の植木屋より賣り出したる、我國特産の園藝變種なり。えどざくら。そめゆよしの。

よしのくさ 吉野靜 [名] 「植」 あけぼのさ(曙草)に同じ。 「論曲」の一。源義經が八手に同じ。

よしのくさ 吉野山を逃れ出て、遠く落ち延びてきたために、その臣佐藤忠信、假に道者の姿となりて、衆徒の席に入りて、問答に時刻を移し、靜御前に出逢ひて、法樂の舞をまはしむる事を作るもの。

4265

よしのくさ 吉野十八郷 [名] 「地」 南北朝時代に於ける、大和國吉野郡の郷の數。太平記「熊野の八庄司、吉野十八郷の兵、七千餘騎」。

よしのくさ 吉野拾遺 [名] 「書」 筆者が、延元元年より正平十三年まで、二十三年間、吉野の行宮に奉仕中の事を思ひ出て記ししもの。後醍醐天皇の行宮にての御歌の事以下、六十餘項あり。二卷。筆者は松翁とあるのみにて、經歴詳かならず。偽書なりともいふ。又、普通本の下巻を中巻とし、別に下巻を添へて、三巻とせるもあれど、その下巻は、全く後人の偽作なるべしといふ。

よしのくさ 吉野杉 [名] 大和國吉野郡地方より産する杉材。良材にして、主として、吉野川に流して、紀伊國和歌山に輸送し、攝津國灘の酒樽に充つ。

よしのくさ 吉野鮎 [名] やすけし(彌介鮎)に同じ。 「より産する荒鮎」。

よしのくさ 吉野藤 [名] 大和國吉野よしのくさ 吉野藤 [名] 吉野塗の藤。

よしのくさ 吉野大衆 [名] よしのくさ(吉野法師)に同じ。

よしのくさ 吉野内裏 [名] 後醍醐天皇と後村上天皇との、延元二年より五十餘年間、吉野山に居給ひし時の内裏。一時、吉水(吉水院)に居給ひし外は、實誠(實誠院)を以て、充てられたり。實誠院は、今は全く荒墟たり。

よしのくさ 吉野烟草 [名] 大和國吉野より産する烟草。 樺山(吉野烟草)の刻實(實)に同じ。

よしのくさ 吉野絨 [名] 吉野絨なるよしのくさ 吉野朝 [名] 延元元年十二月、後醍醐天皇の京都花山院の皇居より、神器を奉じて、一時、大和國吉野郡賀名生(賀名生)に遷り給ひ、月を越えずして、同國吉野に移り給ひ、後、五十餘年にして、後村上天皇の時、正平十三年、高師直(高師直)來り侵しし時、又、賀名生に移り給ひ、後醍醐天皇の、京都に還幸ありて、後小松天皇に、神器を授けたまひしまで五十

4266

七年間の朝廷、なんほくてう南北朝(參照)よしのくさ 吉野天人 [名] 謠曲の一。吉野山の花を見に行きて、天人の舞樂を見る事を作るもの。

よしのくさ 吉野殿 [名] よしのくさ(吉野内裏)に同じ。 太平記「南方の主上の御座ある吉野殿」 「吉野の君」に同じ。 吉野殿より賜はせける銀を賜ひければ、

よしのくさ 吉野塗 [名] 大和國吉野郡よしのくさ 吉野根來 [名] ねごろぬり(根來塗)に同じ。

よしのくさ 芳野監 [名] 大寶令以後に設置せられ、他の國郡以外に立ちて、大和國芳野地方の事を掌りし職。聖武天皇の時廢せられたり。

よしのくさ 芳野監 [名] 前條に同じ。以後、上古、歷代、大和國吉野に設けたまひし離宮。その位置は、六田(六田)より約二里半吉野川を過りたる中莊(中莊)村大字宮瀧(宮瀧)の地に於て、中莊は、金峯山(金峯山)の東に當り、明治以後、國栖(國栖)村を劃きて新設せし村名なり。離宮は、聖武天皇の頃までにて、その後は廢せられしもの。如し。萬葉天皇幸三子吉野宮、時御製歌「よしのくさ(吉野内裏)に同じ。眞草本吉野拾遺「主上、吉野の宮にて、御歌の事」 大和國吉野郡吉野村に鎮座せる官幣大社。祭神は後醍醐天皇。明治二十五年の創立。吉野山麓六田(六田)より山中へ十五六町にして達す。

よしのくさ 吉野浄瑠璃 [名] 小山田高家が新田義貞に代りて死したる所以と、楠正成の妻が正行を訓ふ事とを合はせて脚色せるもの。近松門左衛門の作。

よしのくさ 吉野鉢 [名] 大和國吉野の邊より燒きて出す鉢。 廣氣(廣氣)櫻鯛入れて鉢めん吉野鉢」。

よしのくさ 吉野雛 [名] 男女共に立像の姿に造れる雛人形。男雛は、冠を戴き、黒袍を着用し、兩手に笏を持ち、女雛は、冠を戴かず、お下髪をなし、模様ある白衣を着け、櫛扇を持つ。

よしのくさ 吉野法師 [名] 大和國吉野山なる金峯山(金峯山)寺の僧。源平時代には、僧坊多く、強盛を極めたり。神興を奉じて、屢ば京師に強訴せり。山法師。寺法師。奈良法師。根來(根來)法師の類。吉野大衆。保元、明日までも延べばこそ吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。大氣(大氣)吉野法師は山雀(山雀)となり(さいふ句)いかなれば兒(兒)の着に葛園子(葛園子)なり。

よしのくさ 吉野詣 [名] よしのくさ(吉野參)に同じ。 夫木山(櫻吉野詣の花しねを奪ねん人の袖に包まん)。

よしのくさ 吉野詣記 [名] 「書」 天文二十二年、京都を出立して、奈良の名所を尋ね、高野山に登りて、舊蹟を訪ひ、更に吉野の花を賞し、翌三月十四日、都に歸著せしまでの日記。一卷。三條西公條の著。

よしのくさ 吉野丸 [名] 江戸時代に、隅田川の船遊流行せし頃の、有名なりし屋形船。矢口渡(矢口渡)荒御新田御神徳(荒御新田御神徳)止吉野丸て騒げば、荷足(荷足)ても賑ふ。

よしのくさ 吉野丸太 [名] 吉野杉の丸太。武藏國の四谷(四谷)丸太と同様のものなり。

よしのくさ 吉野參 [名] 大和國吉野の金峯山(金峯山)寺に參詣すること、又その人。よしのくさ(吉野參)に同じ。 「一代男(花かたがて吉野參の人形)」。

よしのくさ 吉野物語 [名] 「書」 ほんてう(ほんてう)本朝水滸傳(本朝水滸傳)に同じ。

よしのくさ 吉野山 吉野山 [名] 「地」 大和國吉野郡にある山。吉野川に臨み、櫻花の名所、吉野朝の遺蹟として著る。古今「ふる里は吉野の山し近ければ日ともみゆき降るぬ日はなし」。

よしのくさ 吉野百合 [名] 「植」 やまゆり(山百合)に同じ。

よしのくさ 吉野桜 [名] 吉野塗の桜。多くは黒漆にて製し、外面に、朱漆にて、木芙蓉を描けり。

4267

冠を戴かず、お下髪をなし、模様ある白衣を着け、櫛扇を持つ。

よしのくさ 吉野法師 [名] 大和國吉野山なる金峯山(金峯山)寺の僧。源平時代には、僧坊多く、強盛を極めたり。神興を奉じて、屢ば京師に強訴せり。山法師。寺法師。奈良法師。根來(根來)法師の類。吉野大衆。保元、明日までも延べばこそ吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。大氣(大氣)吉野法師は山雀(山雀)となり(さいふ句)いかなれば兒(兒)の着に葛園子(葛園子)なり。

よしのくさ 吉野詣 [名] よしのくさ(吉野參)に同じ。 夫木山(櫻吉野詣の花しねを奪ねん人の袖に包まん)。

よしのくさ 吉野詣記 [名] 「書」 天文二十二年、京都を出立して、奈良の名所を尋ね、高野山に登りて、舊蹟を訪ひ、更に吉野の花を賞し、翌三月十四日、都に歸著せしまでの日記。一卷。三條西公條の著。

よしのくさ 吉野丸 [名] 江戸時代に、隅田川の船遊流行せし頃の、有名なりし屋形船。矢口渡(矢口渡)荒御新田御神徳(荒御新田御神徳)止吉野丸て騒げば、荷足(荷足)ても賑ふ。

よしのくさ 吉野丸太 [名] 吉野杉の丸太。武藏國の四谷(四谷)丸太と同様のものなり。

よしのくさ 吉野參 [名] 大和國吉野の金峯山(金峯山)寺に參詣すること、又その人。よしのくさ(吉野參)に同じ。 「一代男(花かたがて吉野參の人形)」。

よしのくさ 吉野物語 [名] 「書」 ほんてう(ほんてう)本朝水滸傳(本朝水滸傳)に同じ。

よしのくさ 吉野山 吉野山 [名] 「地」 大和國吉野郡にある山。吉野川に臨み、櫻花の名所、吉野朝の遺蹟として著る。古今「ふる里は吉野の山し近ければ日ともみゆき降るぬ日はなし」。

よしのくさ 吉野百合 [名] 「植」 やまゆり(山百合)に同じ。

よしのくさ 吉野桜 [名] 吉野塗の桜。多くは黒漆にて製し、外面に、朱漆にて、木芙蓉を描けり。

よじは 縦は【副】よしや(縦や)に同じ。
孕常盤【よしは】は誠の薬にもせよ」
よじはうしき 四次方程式【名】「數」
『英 Quatio equation』未知數の最高方
程式が四次なる方程式。例へば $x^4 + 8x^3 + 10x^2 + 8x + 1 = 0$ など。

よじはみ 由ばみ【名】よしばむこと。
源氏ざれくつがへる今様のよしばみより
は、こよなう奥ゆかしうおぼしわたるに」
よじはみご 由ばみ事【名】由ばみた
る振舞。紫式部日記も言はぬ由ばみ事
しても、われかしこに思ひたる人」

よじはむ 由ばむ【動四自】由【の】ある
らしく見ゆ。よしめく。よしづく。ゆゑ
づく。紫式部日記も、いとこまかに由ば
める」源氏「由ばみたるしもづかひを出
して」

よじはら 葦原、葦原【名】あしはら(葦原)
よじはら 吉原【名】「地」駿河國富士郡
にある町。鐵道東海道線、鈴川停車場あ
り。舊五十三驛の一。舊驛は東南方、今
元吉原と呼ぶ地に在りしが、腰は波浪に
洗はれ、天和二年、今の地に移れりとい
ふ。『目』もと、葦など叢生せしを刈り取
りて開きたるより、葦原といひ、後、文字
を改む」東京市日本橋區葦原(の)町の附
近なる新和泉町・高砂町・住吉町・難波町等
の地の舊稱。元和四年、江戸最初の遊廓
開かれ、約四十年間繼續の後、一時淺草三
谷(の)の邊に移りて、假宅をし、明暦三年
より、今の淺草區吉原の地に移り、それよ
り、この地を元吉原と呼べり。遊廓の發
起人庄司甚左衛門の住地も、附近にあり
て、甚左衛門町の名ありしが、明治二年、
芳町(の)の一部となれり。『葦原、芳原』
『東京市淺草區にある遊廓。前項の遊廓
の移轉し來りて、新吉原と呼ぶに至りし
もの。なか。』

よじはら 吉原が明るくなれば、内は闇【句】
吉原通して、廓内の諸語(の)に通ずる
やうになれば、家庭は敗壞す。『諺語』

よじはら 伊勢物語に倣ひて、江戸吉原の

遊廓の事を、何くれとなく記せるもの。二
卷。寛文二年の出版。
よじはらか 吉原駕籠【名】徳川時代
に、吉原通の遊客を乗するを主としたる
町駕籠。

よじはら 葦原、葦原【名】あしはら(葦原)
よじはら 吉原【名】「地」駿河國富士郡
にある町。鐵道東海道線、鈴川停車場あ
り。舊五十三驛の一。舊驛は東南方、今
元吉原と呼ぶ地に在りしが、腰は波浪に
洗はれ、天和二年、今の地に移れりとい
ふ。『目』もと、葦など叢生せしを刈り取
りて開きたるより、葦原といひ、後、文字
を改む」東京市日本橋區葦原(の)町の附
近なる新和泉町・高砂町・住吉町・難波町等
の地の舊稱。元和四年、江戸最初の遊廓
開かれ、約四十年間繼續の後、一時淺草三
谷(の)の邊に移りて、假宅をし、明暦三年
より、今の淺草區吉原の地に移り、それよ
り、この地を元吉原と呼べり。遊廓の發
起人庄司甚左衛門の住地も、附近にあり
て、甚左衛門町の名ありしが、明治二年、
芳町(の)の一部となれり。『葦原、芳原』
『東京市淺草區にある遊廓。前項の遊廓
の移轉し來りて、新吉原と呼ぶに至りし
もの。なか。』

よじはら 吉原が明るくなれば、内は闇【句】
吉原通して、廓内の諸語(の)に通ずる
やうになれば、家庭は敗壞す。『諺語』

よじはら 伊勢物語に倣ひて、江戸吉原の



よじはら 吉原の遊女の用文を転め、繪入
中本に仕立てたるもの。一巻。萬治年間
又は寛文初年のものなるべしといふ。一
名、吉原用文章。

よじはら 吉原狂【名】吉原がよ
ひして、遊女に狂ひ溺るること。
よじはら 吉原言葉【名】昔、江戸
吉原の遊女の用ひし、獨特なる言葉。例
へば、「お出でなさい」を「お出でなんし」
といふ類。『浮世草子』まんざら知り切つてゐ
る事を、知らぬ風で、物を尋ねる。諸事、
あどけなく見せるを、俗に、吉原言葉と云
ひやす」

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

よじはら 吉原雀【名】「動」次
條に同じ。『江戸吉原の遊廓に出入し
て、その内情に委しき者。』『書』遊客の
氣質、遊女の心得等を記せるもの。繪入
にて、浮世狂思ひそむる事、身受の事初
春賀の事等の諸項を記せり。二卷。寛文
七年の出版。『清元節の一曲。長唄の
「教草(の)」吉原雀」を改作せるもの。本
外題は「簞花手向橋(の)吉原雀」。

の。五卷。澤田東江の著。
よじはら 吉原田圃【名】「地」あさ
くさた田圃(淺草田圃)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。
よじはら 吉原土手【名】「地」にほん
づみ(日本堤)に同じ。

よし

に通ふを忌み、善しを意を含めて呼び替へたるなるべし。あさひ馬酔木に同じ。

よしみ 吉見(名)「地」よこみ(横見)を
見よ。和泉國泉南郡田尻村の大字。大井川(一名、岡田川)の河口。大阪府の管下。明治維新の際、近江國三上(三)藩の遠藤氏、廣澤前、一時、この地に移されたり。夫木月をのみよし見の里の秋の暮松風ならで呼ぶ人もなし。明治の初年設置の縣の一。四年七月、和泉國舊吉見藩の地に立して、同年十一月、堺縣に入り、十四年、遂に大阪府に入れり。

よしみじば よしみ柴(名)「植」よしみに
同じ。

よしみず 善しみず・好しみず「動四自」
善しとす。是なりとす。よしむす「古語」紀「是非、ヨシミアシミスル」

よしみちさねさだ 善道眞貞(名)「人」
文章(名)博士。伊與郡家守の子。姓を善道(善道)と賜はり、承和中、從四位下に進み、後、東宮學士となる。又、嘗て令義解の撰に與かる。七十八歳にして歿す。

よしみつ 吉光(名)「人」あはだちよしみつ
(粟田口吉光)を見よ。

よしみつ 吉水(名)「地」吉祥なる水の
義。京都岡山(名)の安養寺の内にある池水。天台三昧流の座主源頂の時、この水を用ひたりといふ。ききする。

よしみつくわひやう 吉水和尙(名)「人」
よしみつ(吉水僧正)に同じ。

よしみつじんじやう 吉水神社(名)よしみ
づみん(吉水院)を見よ。

よしみつじやうにん 吉水上人(名)「人」
「所住の地、京都の吉水の邊なりしよりいふ」ほねんじやうにん(法然上人)の異稱。

よしみつじやう 吉水僧正(名)「人」
「所住の地、京都の吉水に近かりしよりいふ」じちん慈鑑の異稱。

よしみつゐん 吉水院(名)大和國吉野
山なる藏王堂(名)を距ること約三町の地にありし。その供僧坊(名)。後醍醐天皇の吉野潛幸の時、實城(名)寺に移り給ふ前、一時行宮に充てられし古蹟。明治

よしめ

八年、吉水神社と改稱し、後醍醐天皇と楠木正成とを祭神とし、南朝中祭の靈場となる。

よしめ 良峯(名)「地」山城國乙訓(名)郡大原野村の南嶺。後世、専ら西山と呼ぶ。次條の略。

よしめね 良峯寺(名)山城國乙訓(名)郡大原野(名)村大字小磯(名)にあり。天台宗の寺。西國巡禮第二十番の札所。長久三年、源信僧都の上足源實の創立。一面千手觀音を脇本尊とす。道覺慈達、尊圓、三法親王の入室あり、世に西山御所とて、山内の僧坊、五十有餘に達せしことあり。善峯寺(名)と呼ぶ。

よしめねやす 良峯安世(名)「人」桓
武天皇の皇子。大納言に至り、大將を兼ね。淳和天皇の勅によりて、經國集を撰む。天長七年薨す。年四十六。

よしむじり 蔑撈(名)「動」よしきり(蔑切)に
同じ。

よしむす 善しむす・好しむす「動佐變」
自「よしみず(善しみず)の轉。「古語」紀「是則ヨシムスレバ」

よしむららみ 吉村蘭陵(名)「人」
畫家。字は無遠、通稱は孝敬。京都の人。應舉の門に學び、最も花鳥を巧みにす。應舉十哲の一人。天保七年歿す。年六十八。

よしん 豫審(名)「法」英 Preliminary
examination 刑事被告事件を、公判に付すべからず、免訴すべきかを決定するため、裁判所にて、その犯罪につき、審理する手續。その結果によりて、免訴か、公判に付するかを言ひ渡す。現行犯以外は、検事の請求手續に依るに非ざれば、これを行ふを得ず。罪人の下しらる。

よしん 餘震(名)「地」英 After shock 大地震の後、必ず引き續きて發生する微震。ゆりかにし。

よしん 輿臣(名)「人」輿臣(名)に同じ。

よしん 輿輶(名)ひつぎ(輿)に同じ。

よしん 輿薪(名)車に滿載せる薪。

よしん 餘燼(名)「燼」もえさし。もえのこ

り。敗殘の軍兵などの譬。

よしん

よしん 餘人(名)「人」その人以外の人。他人。よにん。

よしん 輿人(名)「人」多くの人の。民衆。よしん 輿を造る人。輿を昇く人。

よしん 豫審處分(名)「法」豫審に關して、豫審判事の爲す處分。

よしん 豫審廷(名)豫審判事が、刑事被告人の豫審を行ふ所。

よしん 豫審判事(名)「法」地方裁判所の判事。司法大臣より、豫審の擔任を命ぜられたるもの。

よしめく 由めく「動四自」よしむ(由ばむ)に同じ。禁式部日記人のためしにしつべき人がらなり。艶がり由めくかたはなし。源氏けだかく、もてなしなど、恥しげによしめきたまへり。

よしも 縦も「副」よし(縦)に同じ。萬葉「嚴降りとはつ大浦に寄する浪よしも寄すとも憎からなくに」

よしも 蔑瀝・葦瀝(名)當歳の洲走(名)の、生育せず、六七寸ほどにて、十二月の頃、一旦上流に溯りて、蔑の中に潜り、更に下流に下り來るもの。粕漬とし、奥州泉の名産とす。

よしも 蔑擬葦擬(名)「植」よし(蔑)を云ふ。「山城國伏見の方言」

よしや 輿車(名)「輿」輿と車と。輿又は車。輿輶(名)輿物の總稱。

よしや 縦や「副」よし(縦)に同じ。古今流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中」よし(縦)に同じ。古今吉野川よしや人こそつらからめ早く言ひてし事は忘れじ」

よしや 縦や「副」よし(縦)を強めていふ。和泉式部日記よしやよし今は恨みじ。議に出てて消き離れゆく螢の小舟を」よし(縦)「本地の功德、垂跡の利生」餘聖の越ゆべきなく」

よしや 餘聖(名)他の聖人(名)よしや 餘聖(名)餘聖・權權(名)「植」くすのき(權)の漢名。

よしやう

よしやう 餘情(名)詩歌・文章などの文字以外の情趣。餘韻。

よしやう 豫讓(名)「人」支那晉の義人。上黨の人。初、范中行氏に仕へ、後智伯に仕へて寵用せらる。趙襄子の智伯を殺すや、その讎を報ぜんとし、姿を變じて、橋下に俟ち、復、襄子に獲られしより、その衣を請ひ得、劍を抜き、三たび撃ちて、遂に謀に伏して死す。

よしやう がかりよしや掛(名)よしやう(縦風)に同じ。一代男よし風の大男袴高く、裾取つて、大小よしやがかりに、編笠深く着て、魚三昧袴高く、裾取つて、大小よしやがかりにばつ込み」

よしやう 吉屋組・吉彌組(名)よしや風(の仲間)の義。徳川時代の初期に於ける旗本奴(名)の一團。水野十郎左衛門の部下に屬し、近藤登之助、阿部四郎五郎等を頭領とし、風俗は、頭髪を手一束に切りて、髻を掴まれぬ用意をし、冬は、丈短き縮緬の大綿入一枚を着、帯も、白きを三重に廻し、袖口は、白く太く括り、長き大小を帶し、柄絲(名)下緒(名)共に白く、然諾を重んじて、花柳の巷を横行し、狼藉に至らざるなく、遂に、幡隨院長兵衛、唐犬(名)權兵衛等の町奴、蹴起して、これに反抗するに至れり。白柄組(名)異本詞原國寛文の初より、吉原へ通ひし鐵棒組「吉屋組などいひし六方男達」俗つれれ「よしや組も若盛りのこと、大小の神祇組も、天の岩戸の靜かなるこの御時」

よしやう 輿車圖考(名)「書」鳳輦、葱花輦(名)以下、我國の輿車の種類を、圖を掲げて考證せるもの。十二卷。松平定信の著。

よしやう くりよしや作(名)よしや風の好なる製作。若風(名)絲打の平帶、よしや作の大小、いかさま衆道(名)のわけらしき風俗なり」

よしやう くりよしや杖(名)次條を見よ。昔、吉原がよひする人の用ひし杖、うきよづる。

よしやう 風(名)よしや、人

は、何とも言はば言へ、あへて顧みずとの意。萬治寛文の頃行はれし異様な風體。遊蕩なる俠客など、好んでこの風をなせり。洞房語、白柄(びょうが)はつばの大小、よしや風の掴みよしし。

よしやむすびよししと結「名」紐の結び方の一。其、山城のよしと結に松もこそ。

よしや豫修預修「名」佛「ぎやうしゆ」逆よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

よしや餘宗「名」佛「自己の宗旨以外、餘宗を請ひしむ、大なる誤なり」。

紫式部日記「齋院より出でたる歌の、すぐれてよしと見ゆるも、ことに侍らず。ただ、いとをかしう、よしよししうはおはすべからざる所のやうなり」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

よしや與次郎「名」非人國の頭、藤州府志「悲田寺……今専乞人僧長居之。總謂與次郎」。

郡にある町。鎮(ちん)川の南岸。多胡(たご)の碑の所在地。又、鑛金の産地として古來有名なり。吉井氏の舊藩地。姓氏の。まつだひら(松平)を見よ。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしや吉井鍛冶「名」昔、今の備前國上道(じやうどう)郡御休(ごきよ)大字吉井の鍛冶(かじ)。

よしをかきいりう 吉岡流「名」けんはふりう(憲法流)に同じ。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よしをむすびよしを結「名」江戸時代の女の帯の結び方の一。

よすが

よすがが縁便因「名」『寄す處の義』
ゆかり。たより。よるべ。よりどころ。
萬葉うつせみの世の事なればよそに見し
山をや今はよすがに思はむ」夫、妻、
かかり子など、すべて頼り恃む相手。源氏
「近きよすがにて見んは、あかぬここに
やあらん」
忘れぬよすが「句」むかひめ。もつ
め。嫡妻。本妻。「古語」源氏忘れぬ
よすがとおもう給へんは、たのもしげ
なく」

よすがら終夜「副」よすがら「夜もすが
ら」に同じ。拾遺「打つ人はかはりやしぬ
る唐衣よすがら袖にわが涙のみ」
よすぎ世過「名」くちすぎ。生活。生業。
身すぎ。

よすぎみ夜涼・夜納涼「名」夜のすぎ
み。狂歌百人一首賀季文「月をささぬか
しこき世にも風はちと枝を鳴せと思ふ夜
すぎみ」

よすてびと世捨人「名」隠遁又は出家
した人。僧又は隠者。捨人。太極初雪
や町に居合はす桑門」

よすても世捨者「名」前條に同じ。
若風俗「好色中興の世捨者」

よすみ四隅・四角「名」四方のすみ。四
方のかど。しぐら。俳諧新選「諸九」雪の日
や四角汚れし張枕」

よすみよつのさかひのまつり四角
四境祭「名」しかくしきやうのまつり「四角四
境祭」に同じ。

よする世擦る「動下二目」よする「世馴
る」に同じ。「ぬこと」

よすお餘酔「名」酔ひて、全く醒め終ら
ずお餘水「名」あまりの水。
よすお寄「名」寄すること。寄らしむる
こと。千五百番歌「蕪りぬれど杉はしる
しもありぬべし浪のよせなき松が浦島」

よす信頼すること。後見又は人望。源氏無品
「親王の外戚」のよせなきにては
漂はさじ」同世の人の思へるよせ重く、

よせ

おぼえことにかしづきたり「四」(由)
に同じ。徒然「大臣の大業……させる
事のよせなければ、女院の御所など信
り申す故實なり」とぞ。太平記「御在位の
間、風教、多くは延喜の聖代を追はれしか
ば、尤もその寄ありとて、後醍醐天皇と諡
し奉る」

よせ多種の藝人等が、錢を取り
て、多くの人を集め、おのれの技藝を示し
て、快樂を興ふる場所。人よせ席「寄敷
せき。よせば」。

よせ園基に、対局の終に近づき
たる時、雙方互に、たとひ一目にても多
く敵の範囲内を占領して、勝敗の決算に
備ふること。(布石)に對して、「打堅」
四地上に小き木を立てて、錢を投げ、その
木の上に寄るをよしとする遊。

よせ與瀬「名」(地)相模國津久井(地)郡
にある町。甲州街道の一驛。桂川の北岸。
鐵道中央線の停車場あり。

よせあし寄足「名」よせて「寄手」に同じ。
「軍陣の語」義經「川くら法師と申して、
惡僧あり、寄足の先陣をぞしたりける」

よせあつむ寄集む「名」(動下二他)寄
り集まらしむ。まとい。

よせあつめ寄集「名」寄せ集むること。
よせあつめもの寄集物「名」寄せ集め
たるのみにて、統一のなき物。

よせあはす寄合はす「動四自」行きあ
ふ。出あふ。めぐりあふ。大藏流狂言家語
「例の情強者(情)に寄せ合はひい」

よせあはす寄合はす「動下二目」攻め
寄せて、敵の相手になる。太平記「兵、十方
より遠方に射るばかりにて、寄せ合はせ
んとする者ぞなかりける」

よせあはす寄合はす「動下二他」よせあ
つむ(寄集む)に同じ。「同じ」
よせあはせ寄合「名」よせあつめ(寄集)に
よせあはせびし寄合菱「名」よせあひびし
(寄合菱)に同じ。

よせあひびし寄合菱「名」模様の一
單線の井桁を、四箇、互に、その一邊づつ
寄せ合ひて、方形を形作るやうに配列し
たるもの。

よせあひ

よせあひびし寄合菱「名」模様の一。三
階菱を、互に斜に列
なるやうに組み合
はせ、その各箇の中
に、又、小き菱形を
中央に、武田菱の如き形に四箇を又、その
上下に一箇づつ描きたるもの。

よせい餘生「名」よめ(餘命)に同じ。
よせい餘勢「名」餘りたる勢。はずみ。
よせい餘聲「名」あとに残る聲。餘音。
よせい餘情「名」よじやう(餘情)に同
じ。景氣の添はること。外見の立派
なること。「代男」いたづらなるよせい、
大人(男)も恥しく。近頃河原の道引、僅か
な弟子衆のよせいや、わが身のはたらき
で」

よせいじざいく寄石細工「名」もさい
よせいだうぐ餘情道具「名」景氣を添
ふる道具。外見の立派なる道具。見聞集
「當世のはやり道具よせい道具」

よせいだて餘情立「名」殊更に景氣を
添ふること。外見を装ふを、主とするこ
と。梅雪「勝負わざ、よせいだて、腕だて、
こはざれ」

よせいづら餘情枝「名」けしやう(化
粧枝)に同じ。「かなること」
よせうら餘饒「名」有り餘るほどに饒(ニ
よせうら寄植「名」草木を、寄せ集めて
植うること、又その植方にしたる草木。
よせかい世世界「名」世の中。うき世。
浮世風俗「今の世世界ぢやあ」

よせかかりのわがひ倚懸輪違「名」
紋所の一。寄掛目結(寄)の如き形にせ
る輪違か。太平記「二引兩(寄)の如き形に
(寄)・直連(寄)・倚懸の輪違の旗」
よせがき寄書「名」一枚の紙糊などに、
數名の者の、書畫を寄せ合はせて書くこ
と、又その書きたる書畫。よりあひがき。
よせかく寄掛く「動下二他」近くへ寄
せて立て掛く。

よせかく寄掛く「動下二目」押し寄せ
て攻めかく。太平記「五十餘箇所に火を掛
けて、三方より寄せかけたりしかば」

よせかけ寄掛「名」近くへ寄せて立
てかくること。土藏の壁を保護する
ため、外側に取付く板張。

よせかけめゆひ寄掛目結「名」『物を寄
せかけたが如き形なるよりいふとぞ』
【目結】の、片方を高く、他を低くせるも
のといふ。舞の本高麗「寄掛目結の直垂
(元)」

よせがひ寄貝「名」波などに漂ひて、岸
上に寄せ來れる貝。國難並赤貝に心よ
せ貝」

よせかへる寄返る「動四自」寄せ來て
は、又元へ戻り返る。夫木「寄せ返る波
の花すり亂れつつしどろにうつす眞野の
浦秋」

よせかけ

よせがまち寄輔寄框「名」家の入口の
かまち。五十年忌歌念燈皆これ懸路の寄
輔、根太(木)も根つよき門柱(寄)」

よせがや寄框「名」框の實を、寒天にて
寄せて、固めたる料理。

よせがれ世伴世伴「名」世つぎのせが
れ。狂言「世伴」某は、世伴を、數多持つて
ござるが。平假名盛盛馬さあ、女、その世
伴渡せ、渡せ」

よせき夜關「名」夜の關所。俳諧新選
川「私に夜關を越ゆる時雨かな」

よせき寄木「名」よせき(寄木細工)
の略。

よせき礮石「名」(礮)ひせき(礮石)に同
よせききく寄木細工「名」種種の木
片を、薄く小さく切りたるを、器物の表面に
貼りつけて、種種の形象又は模様を造る
細工。よせき。

よせきちやう寄几帳「名」古、濱床(云々)
の上、左右前後に立てめぐらし几帳。
よせきれ寄切「名」新しき布帛の裁餘
(のり)などを、數種取り合はせたるもの。
袋入などにして賣る。

よせくち寄口「名」攻め寄せて來る方
よせくち寄事「名」かこつけて爲す事。
雜言「參宮をよせ事に徒參(カサツ)」

よせさいく寄細工「名」種種の物を寄

よせさいく寄細工「名」種種の物を寄

せ合せて作りたる細工物。即ち寄木(きぎ)細工(きぎ)寄石(きぎ)細工(きぎ)など。

よせさん 寄算(きさん)「名」若干の数を、一つに寄する算法。たしさん。くはへさん。加法。加算(かさん)算(さん)對して

寄算(きさん)の符號「句」【數】「英」*sign of addition* 寄算(きさん)を行ふべき意を示す符號。十と記し、プラスと呼ぶ。例へば「十」が七に九を寄する意を示す類。加號。

よせざる 寄猿(きざる)「名」横猿の一種。堅猿を上げた後、その下に、横に差し込み、その堅猿の落ち込まぬやうに防ぎ止むもの。

よせしき 寄敷(きしき)「名」たみよせ(疊寄)に同よせざる寄相撲(きさむ)「名」くわんじんさぶ(勸進相撲)に同。

よせせき 寄席(きせき)「名」よせ(寄)に同じ。よせだいの寄太鼓(きだいのき)「名」攻め寄する時に打つ太鼓。おしだい。ひとよせだい(人寄太鼓)の略。

寄太鼓(きだいのき)「名」一座の人々の先に立ち、太鼓持(きだいのき)の役を勤む。諸儀太平記「醒興のあまり、寄太鼓をたたき」

よせつ 餘説(きせつ)「名」よらん(餘論)に同じ。よせつ餘切(きせつ)「名」【數】「英」*Cohangent* 角ABCの一邊ABの上の一點Aより、他の邊BOに垂線AQを下す時、BO、AQに對する比を角ABOに對していふ稱。六線の一。

よせつ 豫設(きせつ)「名」あらかじめ設けおくよせつぎ 寄接寄繼(きせつぎ)「名」よびつぎ(呼接)に同じ。

よせつく 寄附(きせつく)【動下二他】己の近くへ寄り附かす。自己に接近せしむ。呼び寄せて近づくし。

よせつけ かもお 寄附鴨居(きせつけ)「名」壁の面に取り附くる化粧(かしょう)鴨居。よせつな 寄綱(きせつな)「名」物を引き寄するための綱。萬葉多胡(たこ)の綱(な)によせ綱延(の)て寄すれども豈來(の)や沈石(しんせき)のその顔(かほ)よきに

よせて 寄手(きせて)「名」攻め寄する軍勢。攻撃

よせどき 寄閑(きどき)「名」攻め寄する時の閑の聲。文武五男寄閑(きどき)と揚げさせ

よせなへ 寄鍋(きなへ)「名」鳥魚などの肉、又種種の蔬菜などを、刻みて、同じ鍋に寄せ集め、汁を多くし、煮ながら食ふもの。ふきよせなへ。

よせば 寄場(きば)「名」人を寄せ集めておく場所。【目よせ寄場】に同じ。よせばしら 寄柱(きばしら)「名」馬などを繋ぎおく柱。とつなぎ。和名柳(やなぎ)與勢波(よせな)の良、繫馬柱(きばしら)也。宇道檢非違使(うみちのくみふじ)ども、河原に行きてよせ柱(きばしら)掘り立てて身を働かぬやうにはりつけて

よせばら 寄場人足(きばら)「名」寄場に留置して使役する人足。よせばらぎやう 寄場奉行(きばらぎやう)「名」徳川幕府の職制の一。若年寄支配の下に、江戸石川島の寄場を管理せしもの。

よせひだ 寄襲(きひだ)「名」昔、左右の膝の中どほりに、細く繩を寄せて仕立て、麻上下(あした)と共(とも)に用ひし袴。

よせひやう 寄拍子(きひやう)「名」太鼓を打つ拍子。曲曲(ききく)攻鼓(きこ)寄拍子(きひやう)ととう打ち給へ

よせぶ 寄文(きぶ)「名」【名】「植」よびの轉。よせぶみ 寄文(きぶ)「名」【名】「寄託」讓與證として、その旨を記載して渡す文書。【古語】續世田「親の譲りたる所を取りたまひけるを、辛(くる)く思ひける程に、よせ文をたてまつれ、預けんなどはべりければ」

よせほん 寄本(きほん)「名」俗曲の同じ流儀の節に屬する詞曲を寄せ集めたる本。例へば、蘭八(らんぱち)の節の寄本を「千草の種」といふ類。

よせみや 寄宮(きみや)「名」幾つかの小社を合よせむね 寄棟(きむね)「名」【建】次條の略。よせむね 寄棟造(きむねぞう)「名」【建】屋根に、大棟と四つの隅棟(すみむね)とを具へ、又は四つの隅棟が、一箇所に集合するやうにしたる建築。よせむね。四注。集棟。

よせん 豫選(よせん)預選(よせん)「名」前以て選ぶこと。

よせん 餘錢(よせん)「名」つかひのこしの錢。餘りたるに。【生存せること。餘命。よせん 餘喘(よせん)「名」死にかけて、辛うじて餘喘を保つ【句】餘命幾ばくもなし。【日落せんとして、暫く、辛うじて免る。】

よせめ 夜攻(よせめ)「名」【夜討】に同じ。よせもの 寄物(よせもの)「名」【次條の略。】魚類の猪肉、麥粉、山の芋、百合、雞卵、薩摩芋、葛粉などを材料として、種種に調合して、味を附け、蒸籠(むす)にかけて蒸し上げ、寒天にて固め、羊羹の如くにする料理。口取とし、又、焼肴の添物とす。かためもの。

寄物の文(きぶのふみ)「名」古、除目(のぞめ)の時、守【介】(か)【目】(め)等の関官を抄出して、執筆の人の備忘用として持たせしもの。よせもの。

よそ 餘所(よそ)「名」ほかの所。萬葉よそに居て戀ひつつあらすは君が家の池に棲むといふ鴨(か)ならましを【密接の關係なき物事。人又は場所。他人。他所。はそ。萬葉心には思ひ渡れど由を無きものにのまして嘆きぞがする】大鷲道隆(おほしり)は豐樂(とよがく)の院、道兼(みちかね)は仁壽(にじう)殿の繪籠(えかご)【道長は大極殿(みちのけ)へ行(い)けと仰せられければ、よその君たちは、便(た)なき事を奏してけるかなと思ふ】他人の家。續萬葉餘所に寐て綴子の夜者の年忘(としわすれ)餘所(よそ)ながら【句】餘所に居ながら。遠き所に離れてゐながら。間接に。大和果てぬ夢ぞはかなかりける】

よそ 四十【數】十を四つ合はせたる數。よそち 源氏雜物(げんじざぶ)四十枝(よそち)【】

よそ 餘所行(よそ)「名」餘所へ行くこと。他行。他出。外出。よそゆき。【外出の時に着る衣服。はれぎ。よそゆき。【特に、平生と異なる、儀式ばりたる態度又は物言(ものごと)を爲すこと。よそゆき。餘所行の口は持たぬ【句】他の場所に行きたりして、食事の必要な量を減するとは叶はず。【諺語】よそ 餘僧(よそ)「名」その僧以外の僧。他の僧。平賀餘僧等、歸り去りぬ。御房一人來る事いかにん】萬葉記「講師・讀師・高座に上り、餘僧、法用して、十萬人大行進す】よそ じばと 與總次鳩(よそ)「名」【動】さばさ(鳩)を云ふ。【西國の方言】よそ 四海(よそ)「名」【四海】の海に同じといふ。萬葉「よそ海、四海也】

よそ 四十日(よそ)「名」日數の四十なること。【古語】土佐引く舟の綱手の長き春の日をよそか五十日(よそ)までわれは經にけり】

よそ たり 餘所語(よそ)「名」相手の人人に直接の關係なき話。世間ばなし。よそ 接(よそ)「名」餘所がまし【形二】よそよそし(餘所餘所)に同じ。諸曲(もろきょく)水無瀬(みづなし)親と名乗らて、情なく、よそがましげにおはします】

よそ ぎき 餘所聞(よそ)「名」他人へのきこえ。ひとぎき。外聞。輔親(すけ)人(ひと)に初めて文遣(ふりか)ずし馴れて頼まるかな【殘賊。よそく 餘賊(よそ)「名」討ち洩らされた賊。拾玉(しゆぎよ)もみぢはおのが染めたる色ぞかしよそけ もない 裝氣も無い【句】飾氣(しやくき)無し。そけなし。】

よそ 餘所子(よそ)「名」よその子。他人の子。榮花(えい)散りたる御子ども、いと多くおはします。同じほど、よそ子のやうに生ませさせたまへり】

よそ ころ 餘所心(よそ)「名」よそよそしき心。芭蕉(ばしやう)葉にそむく椿(つばき)や花のよそ心【事柄。和合(わが)まづよそ事は置いて】よそ だつ 餘所だつ【動四自】よそよそしく見ゆ。疎げに感ず。山雲(やまぐも)草葉(くさば)に澤にぬはれて伏す鴨(か)のいかによそだつ人の心ぞ】

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【次よそ たり 餘所(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそ たり 餘所(よそ)「名」余會多本媛(よそ)「名」人【人】孝

よそぢ

昭天皇の後。又の名は日置姫。天皇の二十九年、立ちて、皇后となり、孝安天皇を生む。孝安天皇尊びて、皇太后と稱す。古事記には、余曾多本(3)媛とあり。

よそぢ 四十・四十路(數) 〔よそ(四十)に同じ。源氏折檻物(3)よそぢ〕

よそぢの祝(句) 年賀(3)の、四十歳の時に行ふもの。伊勢昔、堀河の太政大臣、よそぢの祝、九條の家にてせられける日。

よそづま 餘所妻(名) 餘所に圍ひおく妻。松尾村雨集(3)外のいたづら、餘所妻は知らぬ花よ、折らば折れ。

よそづら 吉葛・宛葛(名) 〔葛・よそづら(古葛)に同じ。古語〕 馬天吉葛、此云三阿摩能與佐國羅、一云、與曾豆羅。

よそながら 餘所作(句) 〔よそ(餘所)の條下を見よ。〕

よそねひま よそね島(名) いはほ(巖)の異稱といふ。〔古語〕 堀太、よそね島下は生ふるさがり、苦露からかねど乾く間も無し。

よそへのひ 粧粧(名) 〔よそのふこと。よそひ。古語〕 字鏡集、装、ヨソノヒ・ヨソフ・ヨソホヒ。

よそへのひ 装ふ粧ふ(動四他) 〔よそふ(装ふ)に同じ。古語〕 字鏡集、粧、ヨソフ。よそへきり 夜番麥切(名) 〔よそへきり夜鷹蕎麥に同じ。〕

よそひ 装(名) 〔よそほひ(装)に同じ。萬葉〕 水鳥の立たむよそひに妹(3)のらに物言はず來(3)にて思ひかねつ。〔よそほひ(装)に同じ。〕 〔粧〕 源氏何ばかりの御よそひなくうち寢して、御前なども、ことになく忍びたまへり。同、よそひもなく、事そきて。

よそひ 装(動數) 〔衣服・調度などの、一式揃ひてあるを數ふる語。そひ。よろひ。具(3)。〕 萬葉、女の裝束一よそひ。よろ器物に盛りたる飲食物を數ふる語。大鏡冠(3)奈良茶粥、この手盛(3)にて二よそ

よそひく

よそひくさ 裝草(名) 〔植、き(菊)のよそひくさ 裝言(名) 〕 一つはりごと、うそ。虚言。

よそびと 餘所人(名) 〔よその人。直接の關係なき人。他人。伊勢珍しく逢ふ棚機(3)はよそびとも影見まほしき物にぞありける。〕 藤原よそびとにこそ預くべかりけれ。

よそふ 装ふ(動四他) 〔よそほひ(装ふ)に同じ。萬葉難波津によそひよそひて今日の日や出てて罷らむ見る母無しに〕 源氏御舟よそひて参れるなり。〔よそほふ(装ふ)に同じ。〕 〔粧ふ〕 萬葉、君無くばなぞ身装はむ櫛笥(3)なる黄楊(3)の小櫛(3)も取らんとと思ふはす。梅麿〔麻福田(3)が袴よそふやつくづくし〕

よそふ 装ふ(動四他) 〔よそほひ(装ふ)に同じ。〕 飲食物を器に盛る。空蕨粥……坏(3)ともよそひて、皆まゐる。

よそふ(動下二他) 〔よそ(寄す)に同じ。萬葉争へば神も憎まずよしそやしよそふる君が憎からなくに。〕 くらふ。なずらふ。譬ふ。寄す。比す。擬す。古今、富士の烟によそへて人を戀ひ。狂言(3)〔物によそへて聞て來たがよい〕

よそへ(名) 〔よそふること、又よそへたる物。たとへ。なずらへ。源氏、いで、この形によそへは、人腹立ちぬべき事なり〕 源氏、似つかはしき御よそへにつけても。

よそへもの よそへ物(名) 〔よそふる物。なずらへ(譬ふる品。狂言、義太夫)よそへ物によつて覺えうす。〕

よそへか 餘所外(名) 〔よそ(餘所)に同じ。盛衰記、よそへかの者までも、悲を含み哀を催して〕

よそほひ 装ほし(形二) おごそかなりうるはし。物物し。源氏、出てたまふ儀式の、いと殊によそほしくて。大鷲今日らんもなどかはともやおほしめしけん。よそ

よそほひ 装(名) 〔よそほふこと。よそ支度。準備。設備。紀、隊仗、ツハモノヨソホヒ〕 徒然、已も入りて、立て

こめて捕へつ殺しけるよそほひ、おどろおどろしく聞えける。〔取、り捕へる。こと。よそひ。けはひ。裝飾。容儀。裝束。〕 〔粧〕 夫本、たやめの飾る朝日のよそほひにまづあけて見る玉櫛笥(3)かな。増鶴、白き御よそほひに改めて、母屋(3)に移されたまふ。〔おもむき。けはひ。様子。風情。堀太、望月の山の端出づるよそほひにかねて光る秋の空かづる、堀太、吉野に大川水のよそほひは代代にも更に絶えじと思ふ。〕

よそみ

よそみ 餘所目(名) 〔よそみ(餘所)に同じ。こと。聞くともなしに聞くこと。好忠集、よそみ耳に鹿の常聲(3)を聞きしより秋は悲しきものと知りなき。〕

よそん 餘尊(名) 〔佛、他の佛たち。諸曲(善見)「明王の誓約、まぢまぢなりといへども、その利益(3)、餘尊に越え」

よそめ 餘所目(名) 〔よそみ(餘所)に同じ。こと。見るともなしに見ること。萬葉、よそ目に君が姿を見てばこそわが戀はたまめ命死なずば。〕 他、よりのみえ。はため。ほかめ。をかめ。傍觀。外見。拾玉。〔松が枝に枕定むる鳴ししのよそ目あだなるわが庵かな〕 御伽草子、小町、よそ目をつつむ文(3)。〕 〔よそみ(餘所目)に同じ。〕 〔諸曲、善見〕よそ目はせじな、一筋に頼む誓の未清き、五條の神に詣てけり。〕

よそもの 装物所(名) 〔古、節會(3)などの時、紫宸殿の内に、屏風にて圍ひ、御椅子を立てて、主上の御装束をせられし所。〔粧物所〕名物抄、御粧物所、オヨソモノドコロ。〕 〔ひのどの(襦殿)に同じ。侍中群、御裝物所、御襦殿也。又稱、襦殿。〕

よそもる 歸る(動四自) 〔よそよそ(見)よ。〕 山の、大きく高く峙つをいふ。〔古語〕 字鏡、歸、山高大堅固之貌、與曾毛留也。〕

よそよき 餘所行(名) 〔よそよき(餘所行)に同じ。〕 遠く別別に離れてあること。よそよそしきこと。疎遠。馬内侍集、いみじき事ありとも、よそよそにならじと契りける人。源氏、しばしにても、よそよそに、思ひのほかにまじきなしはべらんが、やすからず思はるべきかな。〔場所を確かに示さずにいふ語。云云(3)の所、そこらあたり。そんでふそこ。重井、其の銀鈿で、よそよそのお山が、一つ買うて見たい。〕

よそよそ 餘所餘所(名) 〔形二〕 親しからず。へだてがまし。うとうと。よそがまし。疎遠なり。狹衣、いとかうがうしく、よそよそしからん御もてなし。〕

よそり 寄(名) 〔よそること、又その物。たよること、又その所。古語〕 萬葉、春日野(3)の山邊の道をよそりなく通ひし君が見えぬ頃かも。〕

よそりづま 寄妻(名) 〔よそる妻。思を寄する妻。信賴する妻。古語〕 萬葉、一嶺(3)ろに言はるものから青嶺(3)ろにたゆたふ雲のよそり妻はも寄る。〕

よそる 寄る(動四自) 〔寄る。近寄る。片寄る。接近す。よそる。古語〕 萬葉、白波のよそる濱邊に別れなばいとすべなみ八たび袖振る。同、荒山も人し寄すればよそるとぞいふ。〕 〔男女間にて、思を運ぶ。浮名を立つ。よす。古語〕 萬葉、山鳥の尾ろのはつ尾に鏡懸け唱ふべみこそ汝(3)によそりけめ。〕

よた 與太(名) 〔よたらう(與太郎)の略。〕 役に立たぬこと、又その事。與太を飛ばす(句) 〔たためなる事を喋り又は文章に書く。〕

よそせ

よそせ 餘所所(名) 〔形二〕 親しからず。へだてがまし。うとうと。よそがまし。疎遠なり。狹衣、いとかうがうしく、よそよそしからん御もてなし。〕

よそり 寄(名) 〔よそること、又その物。たよること、又その所。古語〕 萬葉、春日野(3)の山邊の道をよそりなく通ひし君が見えぬ頃かも。〕

よそりづま 寄妻(名) 〔よそる妻。思を寄する妻。信賴する妻。古語〕 萬葉、一嶺(3)ろに言はるものから青嶺(3)ろにたゆたふ雲のよそり妻はも寄る。〕

よそる 寄る(動四自) 〔寄る。近寄る。片寄る。接近す。よそる。古語〕 萬葉、白波のよそる濱邊に別れなばいとすべなみ八たび袖振る。同、荒山も人し寄すればよそるとぞいふ。〕 〔男女間にて、思を運ぶ。浮名を立つ。よす。古語〕 萬葉、山鳥の尾ろのはつ尾に鏡懸け唱ふべみこそ汝(3)によそりけめ。〕

よた 與太(名) 〔よたらう(與太郎)の略。〕 役に立たぬこと、又その事。與太を飛ばす(句) 〔たためなる事を喋り又は文章に書く。〕

よとわ ゐれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

また夜田(名)夜の田。時笑話「秋は收納の月、月に夜田刈る忙はしき」。「僕謙。またい興臺(名)身分低きめしつかひ。またう夜盜(名)やたら(夜盜)に同じ。蕭蕭無聲(山賊・夜盜のぬす人ら)。

またう與黨(名)「與」する人。なかなか。またい。同志。黨與。政府の味方なる政黨。野黨に對して。

またう餘黨(名)徒黨の内、敗れてなほ残れるもの。殘黨。餘類。

またう餘桃(名)「食ひあまりの桃の實。餘桃の罪」(句)「韓非子の説難篇に「昔者、彌子瑕有寵於衛君。衛國之法、竊駕君車者罪別。彌子瑕母病。人聞往、夜告彌子。彌子矯駕君車」以出。君聞而賢之曰、孝哉、爲母之故、忘其罪。不盡、以其半、啗君。君曰愛我哉、忘其口味、以飽寡人。」及彌子色衰愛弛、得罪於君。君曰、是固嘗矯駕吾車、又嘗啗我以餘桃。故彌子之行、未變於初也。愛憎之變也」とあるに本づく)人の愛憎は頼むに足らぬ譬。彌子瑕にも過ぎ、安祿山にも越えたり。餘桃の罪をも恐れず、ただ榮花の恩にぞ誇りける。

またうか、夜盜蟻(名)「動」蟻類に屬する昆蟲。長さ七分、肥大にして、圓筒状をなし、腹背兩面に毛塊ありて隆起し、翅は茶褐色を呈し、外縁近き處に、一條の太く淡黃色なる波狀線あり。幼蟲は、夜盜蟻といひ、圓筒形にして、淡灰褐色を呈し、油菜、蕎麥、大豆、豌豆、蠶豆(豆)などを食害す。

またうに、與黨人(名)與黨なる人。仲間の人。東鑑「平家與黨人家資」。

またうむし、夜盜蟻(名)「動」よたらが夜盜蟻を見よ。

またか、夜鷹(名)「動」かすひざり(蚊吸鳥)に同じ。和名、怪鳥、與多加。其伏夜行鳴以怪者也。夜あるきをなす者の譬。大鑑實貴乳(乳)して有てても、五

郎介を思ふゆゑ、大事の男を夜鷹にして、舉句に、こまてのさばり面(句)。目やほち夜鷹を云ふ。「江戸の語」。守貞漫稿「江戸にては、……よたかは土妓の名」。

またかそは、夜鷹蕎麥(名)「夜鷹」の街上に徘徊する時分に、擔ひて賣りあるきしよりいふ。夜間遅くまで、街上を賣りある蕎麥屋、又その蕎麥。よたかそはきり。よそばきり。「江戸の語」。江戸にては、蕎麥を主として、鹽麩を兼ね賣り、京阪はこれに反するより、京阪にては、夜鷹鹽麩(名)の名ありき。鹽麩を「夜鷹蕎麥を食逃(た)して、落(お)ちの中へ落(お)ちた事」。

またかそばきり、夜鷹蕎麥切(名)前條よたきつり夜鷹蕎麥(名)夜、篝火・石油燈・アセチレン瓦斯の燈火等にて、魚類を寄り集まらせて釣ること。多くは、手釣にして、鰯・鰯・鰯(名)鰯などに適用す。

またく餘澤(名)死後まで残れる恩澤。おかけ。餘光。餘德。

またく預託(名)あづかること。寄託。よたくら「貌」よたに同じ。

またくれもの、與太くれ物(名)よたもの(與太物)に同じ。

またけ、節竹(名)節のある竹。竹。「古語」記「いくみ竹よたけ」異編幸本記「石田記」河の河島の節竹を取りて、八日(ハ)の荒籠(カ)を作り」。

またけ、ゆだけ(弓丈)に同じかるべし。「古語」山雲よだけ斷つ袖にたぐへて忍ぶか袂の濡に落つる涙を」。

またけ、彌猛(形)「形」ものものし。ことごとし。仰山なり。「古語」源氏何くれの儀を御心にはいとも思はさぬ事をだに、おのづからよだけ儀式を盡しける。同「所せく世だけき儀式を盡しける」。「大儀なり。億劫(カ)なり。面倒なり」。「古語」源氏公(カ)に仕ふる人ともなくて籠りはれば、よろづ初初(カ)しくよだけくりにて侍る」。

まただどり、夜直鳥(名)「動」夜直(カ)直(カ)の條に引ける古今集の歌に本づきていふ「ほささき(時鳥)の異稱」。「古語」。

またち、鼯鼠(名)「動」いたち(鼯)に同じ。よたち、夜立(名)「夜」の明けぬ中に立すること。夜をかけて旅だつこと。玉葉「朝あけの山わけ衣濡れてけり深き夜だちの露のしめりに」。「ゆふだち(夕立)に同じ。紅花千句「帝釋天と響く神鳴(カ)に」。

またち役(名)えだち役の轉訛。「東國の古の方言」。萬葉大君の御言(カ)かしこみなし妹が手枕離れよだち來(カ)ぬかも」。

またつ、與奪・予奪(名)「あたふと、うばふと。與へ又は奪ふこと」。「奪は、意味なく添へたるものなること、くわんきふ(緩急)の綬の類」職權を譲り與ふること。「鎌倉・室町兩時代頃の語」。關白の人爲「左大臣・時、右大臣行三」上(カ)事。依關白與奪。廣訓往來依三探題管領與奪」。

またつ、彌立つ「動」四自(カ)いよだつ(彌立つ)の略。「身の毛彌立つ」參照。

またん、餘談(名)主なる話の外の話。またん、四段(名)次條を見よ。

またん、四段の活(カ)「句」「語」次條。またん、四段活(名)「語」次條の略。

またん、くわつよう、四段活用(名)「語」動詞の語尾の、あ列い列う列え列の四段に活用すること。かさたはまらの六行以外には無し。例へば、「行く」「泳ぐ」「押す」「勝つ」など。「拔」を見よ。

またん、ぬき、四段抜(名)にだんぬき(二段)またん、ぬき(名)「よたたんばう(酔うたん坊)に同じ。京都大阪邊の語」。

またよた、(貌)幼兒又は中氣を病める者など、足元の重苦しく確かならぬさま。よろよ。ひよりひよ。よた。よた。よた。よち。よち。

またらう、與太郎(名)「智慧」の足らぬ人。愚人。よた。またらめに喋る者。うそつき。よた。「江戸の語」。

またり、四人(數)人の數四つ。よたり。またり「貌」よたに同じ。

またり「名」よと垂る義。流れ垂るの泉汁。「漢語」。「古語」名義、漢・漢・ヨダリ・ハナススリ・ハナタリ・ナミダ。またれ(涎)に同じ。「涎」。「古語」和名「津頭與多利。小兒多涎唾・流・出於頤下一也」。

またり、余田流(名)砲術の一派。またり、かけ、涎掛涎懸・頸鑑(名)よたれかけ(涎掛)に同じ。「古語」釋名・頸鑑者、俗稱・與多利加氣之物也」。

またる、彌地し「形」甚だるし。犬子集「よだるかりし手足も立つや今朝の秋」。

またれ、涎(名)「よだり」の後世の語形。口の外に流れ垂るる唾液。よだり。涎を繰(カ)る「句」涎を流し垂る。涎を垂らす「句」欲し望む情甚しき形容。盛衰・涎、とろとろと垂らして、見入りたまへり」。「前條に同じ」。

またれ、涎を流す「句」「りうぜん(流涎)を見よ」涎を紙(カ)る「句」創見なく、ただ他人の眞似を爲す。糟粕を嘗む。よたれ、かけ、涎掛涎懸(名)涎の流れに掛くる布。昔、咽喉部を防ぐために、その部分を被ひし武具。頬半頬などの下に垂るやうにせしもあり。よだりかけ。よたれがね、のどわ。「頸鑑」廣訓往來半首の「涎懸」目じやうく(蛇袋)に同じ。「建極」の鼻又は切髪(カ)に、垂直に取り附くる板の飾。服裝の、襟の邊に、涎掛に似たる裝飾あるよりいふ「する(水兵)の異稱(俚語)」。

よたれがね、涎金(名)前條に同じ。舞

また

またかそ

まただ

またよた

よだれが

の本「高麗」(後)は「鍬」(コ)母衣附(コ)前、前は半首(コ)よだれ金」

よだれくり 涎線「名」小兒の、常に涎を流れ垂らして、しだらなきこと、又そのしだらなき小兒。手習書「お師匠様の留守の間」に「手習するは、大きな損、おりの坊主あたまの汚書(コ)したと、見せるは、十五の涎くり」

よだれねぶり 涎紙「名」よだれ(涎)の條下を見よ。

よち 餘地「名」餘れる土地。餘る部分。くつろぎ。餘裕。

よち 輿地「名」淮南子の原道訓に「以地爲輿、則無不載也」とあり。地は、萬物を載すること、輿車の如くなるよりいふ。全地球。全世界。方輿。坤輿。地輿。

よち 豫知「名」あらかじめ知ること。

よち「名」小兒の、同じ程の年輩なること、又その小兒。「古語」萬葉「この川に朝菜洗ふ子汝(コ)も我もよちをぞ持たるいて子賜(コ)ばりに」

よちむ 沃鎮・沃陣(羅 Todium)「名」沃「よおそ」沃素に同じ。沃次條の略。「但語」

よちむちんき 沃鎮丁幾(英 Todium 丁 nature)「名」化よおそんき沃度丁幾に同じ。

よちかか 攀掛る「動四自」攀づるやうにして取りつく。攀攀、ヨヂカカリ」

よちかじ 世近し「形」餘年少し。齡、末に近し。「古語」源氏朱雀院の、今はむげに世かくなりぬる心地して、もの心ほそきを」

よちくる 振くる「動四他」よちる(振る)によちくる 振くる「動下二自」よちる(振る)に同じ。

よちこら よち子ら「名」よちなる子。同年輩の子。「古語」萬葉「少女らが少女さびすと唐玉(コ)を袖にまかせよち子らと手たづきはりて遊びけむ時のさかりを」

よちし 輿地誌「名」輿地の地誌。世界の地誌。

よちし

よちし 輿地圖「名」輿地の平面面。萬

よちざる 攀取る「動四他」他動詞のよつ(攀づ)を見よ。攀ちて取る。萬葉「青柳の上枝」攀ち攀ちてくはるは君が宿に

よちのぼる 攀上る「動四自」攀ちながら登る。攀登(コ)す。

よちん 餘塵「名」事の済みたる後に、なほ收まらぬ塵埃。宋史の南唐李氏世家に「退思、集許之餘塵、遠慕夷齊之高義」とあり。よちん(餘風)に同じ。

よちやうてん 四丈殿「名」伊勢兩宮にありて、官幣を點檢する所、雨儀には、又勅使以下、神職の坐となす。

よちゆう 夜中「副」一夜の全部。よもすがら。終夜。

よちゆむ 沃鎮・沃陣「名」化よちむ(沃)よちゆむちんき沃鎮丁幾・沃陣丁幾「名」化よちゆむちんき沃鎮丁幾を見よ。

よちよち「名」よちよちと歩む程に老いよちよち「貌」よちよちに同じ。

よちよち「貌」前條に同じ。

よちよちおやち よちよち親爺「名」老いばれたる男子。

よちよちぢぢい よちよち老爺「名」前よちよちばあ よちよち婆「名」老いばれたる婦人。

よちり「動」振腰「名」腰をよちること、又その腰つき。傾城扇合戦、下女のお福がよちり腰

よちりすぢり 振筋「名」進退に窮し、又は案じ苦しみて、身もだへする形容。宇治「左右の手にて、尻をかかへて、いかにせんいかにせん」と、よちりすぢりするさま。

よちりすぢり 振筋「副」振筋するさま。思案にくるさま。水鏡「連歌……よちりすぢり案じけれども、遂に附けざりけり」

よちりふどう 振不動「名」火焰を、振りたるが如き形に勢よく描きたる不動尊なりべし。十訓繪佛師(コ)良秀といふ僧ありけり。……良秀がよちり不動とて、今も世の人、皆、もてはやしけり」

よちる 振る「動四他」もちる。すぢる。くねる。よる。よぢくる。

よちる 振る「動下二自」よちりたるやうになる。すぢる。よる。よぢくる。

よち(を)ぎ 飯「名」をぎし飯に同じ。「古語」萬葉式與治魚刺「和名、飯、與知佐乎之。以竹貫魚也」

よつ 四「名」よつざき(四時)の略。よつ(う)ざん(四寶銀)の略。天の網島今の治兵衛が、四つ三貫目の才覚、うちみしやいでも、どこから出る」よつ(よ)ぢ(四辻)の略。みつ(三)に同じ。四相撲(分)にて、雙方共諸手(分)を差して取り組むこと、又その取組方。よつて。よつみ。「四手」よつ(よ)あし(四足)の略なりべし。また(穢多)を云ふ。「備前國の方言」よつ 四「數」二と二とを合はせたる數。よ。よつ。四歳の年輪。

四にす「句」四(コ)つにするに同じ。壬生大念佛「行」て抱かれて寝よ。寝きして別る、四つにする」

四に別る鳥「句」四鳥(コ)の別」を見よ。蜻蛉四つにわかるるむら鳥のおのがちりちり集ばなれて」

四に渡る「句」相撲(分)にて、四(コ)四に取り組む」

よちる

よちる 十訓繪佛師(コ)良秀といふ僧ありけり。……良秀がよちり不動とて、今も世の人、皆、もてはやしけり」

よちる 振る「動四他」もちる。すぢる。くねる。よる。よぢくる。

よちる 振る「動下二自」よちりたるやうになる。すぢる。よる。よぢくる。

よち(を)ぎ 飯「名」をぎし飯に同じ。「古語」萬葉式與治魚刺「和名、飯、與知佐乎之。以竹貫魚也」

よつ 四「名」よつざき(四時)の略。よつ(う)ざん(四寶銀)の略。天の網島今の治兵衛が、四つ三貫目の才覚、うちみしやいでも、どこから出る」よつ(よ)ぢ(四辻)の略。みつ(三)に同じ。四相撲(分)にて、雙方共諸手(分)を差して取り組むこと、又その取組方。よつて。よつみ。「四手」よつ(よ)あし(四足)の略なりべし。また(穢多)を云ふ。「備前國の方言」よつ 四「數」二と二とを合はせたる數。よ。よつ。四歳の年輪。

四にす「句」四(コ)つにするに同じ。壬生大念佛「行」て抱かれて寝よ。寝きして別る、四つにする」

四に別る鳥「句」四鳥(コ)の別」を見よ。蜻蛉四つにわかるるむら鳥のおのがちりちり集ばなれて」

四に渡る「句」相撲(分)にて、四(コ)四に取り組む」

四の馬「句」しは馬(馬)の直譯。養蠶草「よつ」の馬(四馬車也。……馬四西して引くなり)」

四の海「句」しかい(四海)の直譯。四方(コ)の海。夫木四つの海の浪靜かなる君が代にあまの命も嬉しかららん」

四の海岸「句」四方(コ)の海の岸。海内(國)國。諸曲(淡路)大八島の國を作つ、紀の國伊勢志摩日向、ならびによつの海岸を作り出し」

四の夷「句」しい(四夷)の直譯。源氏鳥帽子折「よつの夷、やつの隅」

四の翁「句」人「商山の四皓」に同じ。夫木深山より出ててや君に仕へ

よつ

まじ四つの翁の今もありせば」

四の鬼「句」金鬼(金)・風鬼・水鬼・陰形鬼(金)と呼ぶ四種の鬼。太平記「天智天皇の御宇、藤原千方といふ者ありて、金鬼・風鬼・水鬼・陰形鬼といふ四の鬼を使へり」

四の面「句」しめん(四面)に同じ。空想よつの隅、よつのおもてを見めぐらすに」

四の角「句」よつかざ(四角)に同じ。昔の射藝にて、射手は、横に二列をなして、的に向ふ定なりし、その左端の前後二人と右端の前後二人との位置。おほまへ(大前)おほうしろ(大後)「關」の前「關」の後(コ)参照。

四の車「句」佛「羊車・鹿車・牛車」と大白牛車(佛)と。四車(コ)。夫木「しなじなは四の車を進めずばのりはづれたる人やあらまし」

四の品「句」しほん(四品)の直譯。蜻蛉「年経て、四の品になりねば」

四の姿「句」佛「四の身」に同じ。新千載六つの道四つの姿にきすらひて始も果も知らぬ悲しさ」

四の寶「句」おほみたら(大御寶)を見よ。次條に同じ。

四の民「句」しめん(四民)の直譯。四の巷「句」次條に同じ。

四の佛「句」佛の世界。玉葉六つの道よつちまたの苦しみをいつか代りて助け果つべき」

四の辻「句」よつ(四辻)に同じ。諸曲盛念「四の宮の河原、四つの辻」

四の爪白「句」よつ(四爪)に同じ。四の時「句」しじ(四時)の直譯。古今「天下しろしめすこと、四つの時、九かへりになんなりぬる」

四の時日「句」前條に同じ。諸曲(養蠶)「四の時日は晏なくて」

四の隣「句」しりん(四隣)の直譯。新大「家になき四つの隣の垣ごしはうたてといふも憎からぬかな」

四の船「句」古、遣唐使を發する時、仕

よちる 振る「動四他」もちる。すぢる。くねる。よる。よぢくる。

立てたる、四艘の船。大使、副使判官、主典の四人、分乗せり。萬葉よつの船ふなの船(一)並べ平らけくはや渡り來て返言(二)申さむ日に

四の蛇(一)「句」(佛)「鼠」(云)藤を喰むを見よ「四大(二)」を毒蛇に響へていふ語。佛石歌よつのへみ五つの物の集まれるきたなき身をば厭ひ棄つべし

四の信(一)「句」(佛)佛が、法華經の功德の(二)を明かすに、その分別功德品に於て、在世の弟子に約して立てたりといふ一信解略解言趣(廣為人説)信深觀成の四種の段階。又、滅後の弟子に對しては隨喜品とて、實相の法を聞きて、信解(三)隨喜すること、讀誦(四)品とて、更に法華を讀誦して、觀解を助くること、說法品とて、自己の内解(五)を説きて、他人を導利すること、兼行六度品(六)とて、六度を兼修して、觀心を助くること、正行六度品(七)として、正しく六度を行じて、自行(八)變化他(九)の事理具足して、觀行(十)轉した勝ることの五段の品類を立てたりとし、合はせて、四信五品(十一)といひ、四信と五品との兩者は、畢竟、同體異名なりと説く。「天台宗の語」。拾玉急ぎ行く宿し變らぬ道なれや五つの品の四つのまことを一「眞如と、三寶を信ずることとの、四種の信心

四の身(一)「佛」しじやろ(四生に同じ。拾玉、天つ空光を分つ四つの身に何の草木も洩るものかは)

四の緒「句」「絃」の數、普通四なるよりいふ「び」(琵琶)の異稱。新編古今雲の上のなかばの月に引かれてや四つの緒までも聲はすむらん

よづ 奥圖に同じ。

よづあし 四足「名」四本の足、又それを見へたるもの。よづあしもん(四足門)の略。舊「東」の門(二)は四足をなして「著」東の洞院、西の四足をば過ぎて「目」机膳などの、四本の足を取り附けたるもの。四足の數四本なるよりいふ「獸類」の異稱。しそく。四脚。他人人を縛りていふ語。けだもの。畜生。天の網鳥「くされ女の四足め」。

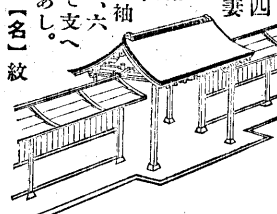
よづあしどろ 四足鳥居「名」四本の柱を立て、その上に日覆を施したる、小き通船(舟)。

よづあしもん 四足門「名」切妻破風(三)造の屋根を、左右兩側に、間き大柱と、その前後の袖柱と、合はせて、六本の柱を立てて支へたる門。よづあし。

よづあし四石「名」紋所の一。五箇の方形を以て、十字形に組み合はせたるもの。

よづあしめ 四銀杏丸「名」紋所の一。銀杏の葉四枚を輻射狀に組み合はせたるもの。胸算用紋所を、葉附の牡丹と四銀杏の丸、女中方のはやり物。

よづあしめ 四入「名」經二本を引き揃へて、一本としたるを、篋の一羽に引き込みたるもの。地質を薄く密にし、又は、縞縞を明瞭ならしめんとするに適用す。



(んもしあつよ)

よづおりあをめ 四織青梅「名」武藏國青梅の産を本として言ひ習へる語。筋の盛り上るやうに繰りたる格子縞。

よづかいだう 四街道「名」(地)下總國印旛郡旭村にある鐵道總武本線の一驛。千葉より四里半、佐倉(五里餘を隔つ)。

よづかいちまつり 四日市祭「名」伊勢國四日市市の鎮守なる諏訪神社の祭禮。毎年九月二十六・七兩日に亘りて行はる。

よづかか 四掛「名」的蝶(二)の、掲指(三)じ(田字)に同じ。紋所の一。花辨四箇より成る饅頭草。

よづかか 四變四替「名」四種の染色のものを寄せ合はせすること、又その方法にせる物。衣類ならば、兩袖と上前(二)と下前(三)との、互に色がはりに仕立つる習にて、昔は、十六變(四)八變(五)などもありて、貴人の外用ひざりしが、四變は、平人も著用せりといふ。かたみかはり(片身變參照。「代男」四替の大振袖)五

よづかか 四織「名」次條の略。

よづき 世嗣世繼「名」家の跡目を嗣ぐこと、又その人、家督相續、又家督相續人をあとり。より。正統天皇の世繼を記せる文(一)。昔より今に至るまで、家家に數多あり(二)。中古の、國文にて記せる歴史を、六國史などの漢文の正史と區別していへる稱。五代帝王物語神代より代代の君のめてたき御事どもは、國史・世繼・家記の記に委し見えて(三)。

よづきのあがり 世繼物語の略。大體世繼の、一月の宴、二花山たづぬる中納言、三、三十鶴の林、袖中抄(二)の大嘗會の歌ども書きたる世繼の第十二巻を、玉の村菊の巻と名づけた(三)。

よづきのあがり 世繼物語の略。大體世繼の、一月の宴、二花山たづぬる中納言、三、三十鶴の林、袖中抄(二)の大嘗會の歌ども書きたる世繼の第十二巻を、玉の村菊の巻と名づけた(三)。

よづきのあがり 世繼物語の略。大體世繼の、一月の宴、二花山たづぬる中納言、三、三十鶴の林、袖中抄(二)の大嘗會の歌ども書きたる世繼の第十二巻を、玉の村菊の巻と名づけた(三)。

よづきのあがり 世繼物語の略。大體世繼の、一月の宴、二花山たづぬる中納言、三、三十鶴の林、袖中抄(二)の大嘗會の歌ども書きたる世繼の第十二巻を、玉の村菊の巻と名づけた(三)。

よづきのあがり 世繼物語の略。大體世繼の、一月の宴、二花山たづぬる中納言、三、三十鶴の林、袖中抄(二)の大嘗會の歌ども書きたる世繼の第十二巻を、玉の村菊の巻と名づけた(三)。

四臺に傘放すな【句】午前に霽れたる雨は、再び降ると言ひ習はせるによ

【名】四の又、又

竹を川ひひ六七寸ほどづつ間隔を置きて、
縦横に組みたる竹垣。鳩翁道話「青竹まじ



器。太平記一 出井が濱の浦風に、濃き紅の大笠符(オホカサシロフ)を吹き返らせ、三物(ミツ)・

よつもの

よつものなり 四物成「名」百石の穀を

摺りて、四十石の米を得ること。又、三十

五石あるを、三五分と稱す。

よつもん 四紋「名」紋を四所に現した

るものか。若風登つぎつぎの、紫に四紋

の後帯(きんぎょ)の宿

よつもん 四門「名」昔、遊廓にて、夜の

四時(よる)の太鼓の音を相圖に、大門を閉

ぢしこと。これを「四門を打つ」といひ、

これを限として、一切の遊客の出入を止

むる定なりき。松の落葉、枕並ぶ床の内、

……、四門の跡、夢も無し」

四門を打つ「句」前條を見よ。後者日

三味線「大夫が今夜のもてなし、前後に

覚えぬ最中、四門打つとて觸るれば、名

残をしきは」

よつもんよこほひ 四紋横這「名」(動)

有吻類に屬する昆蟲。横這の一。體長六

よつや

江戸四谷より送り出ししとんびだこ。形、

普通のと少し異なりき。

よつやまるた 四谷丸太「名」吉野丸太

と同様なる杉の磨(き)丸太。武蔵國の多

摩川と荒川との間の高地に産し、中にも、

高井戸村の産、最も有名なり。よものあ

「所が四谷丸太の床柱かけし墨畫の竹

町(やぎ)の宿

よつゆ 夜露「名」夜間にくだる露。

よつゆき 四雪「名」(種)でんじろ(田宇

草)に同じ。

よつゆひ 四結「名」よつめゆ(四目結)に

よつろ 寄占「名」よりら(寄占)に同じと

いふ。歌林拾葉集、忘るなよよるべのみ草

占と書きて、よつらと讀めり」

よつり 夜釣「名」夜、魚を釣ること。

よつりう 四輪鼓「名」紋所の一。四箇

の輪鼓を上下に並べて、その各箇の一邊

よつん

額未定保険證券)に同じ。

よてい 豫定論「名」(哲)ていめいろん

(定命論)に同じ。

よてき 餘滴「名」餘れる滴(しず)の残滴。

よてき 子「名」(ば)し(末子)を云ふ。

よてき 方音「名」

よてふはん 四疊半「名」一室に、普通

の疊四枚と半疊一枚とを敷き詰めてある

こと。四方共一間半なる正方形を成す。

茶室は、常にくの廣さにする定にて、茶道

の祖珠光が、京師室町の幕府十八疊の殿

中を四分し、その一を圍みて、茶室に充て

しに始まるといふ。書生部屋待合の

奥座敷など、この廣さなるが多きより、そ

の意に流用す。

よてふはん 四疊半式「名」男女

の、差し向ひて、しめやかに物語る光景の

形容。正正堂堂と振舞はず、人に隠れ

よ

京都府の管下。京都市より三里三十町、

稻葉氏の舊藩地。郡内第一の繁華の地。

古(こ)真(ま)盛(せい)の川の渾水雨降れば常(とこ)より

ことにまざるわが(わが)ひ(ひ) 地(ち)山城

國(くに)乙訓(おつ)郡(ぐん)にある村。地(ち)明治

の初年設置の縣の一。四年七月、山城國舊

淀藩の地に立てしもの。同年十一月、京

都府に入る。

淀の大橋「句」地(ち)山城國木津川の、

淀川に注ぐ邊に架けて、久世(くせ)の郡(ぐん)淀町

と綴(つづ)喜(き)郡(ぐん)八幡(はち)町(ちやう)方面との交通

路に充てたる橋。長さ百三十六間。

淀の大渡「句」地(ち)おほわたり(大渡)を

見よ。

淀の川瀬の水車「句」次條に同じ。

淀の車「句」淀の水車に同じ。俗(ひん)

(淀の車)淀の車は水ゆゑまはる私(わが)の

や情(なさけ)氣(き)がまはる」

よ

淀の小橋「句」地(ち)山城國淀川の、伏

見町の下と、對岸なる久世(くせ)の郡(ぐん)淀町と

の間に架けたる橋。長さ七十六間。淀

川上下の船は、この橋の下を通過する

より、膝(ひざ)毛(も)など、その他、これを淀

の大橋と混同して記せるもの、妙(た)から

ず。胸算用程無う淀の小橋になれば、

大間(おほ)の行燈目(あんどんめ)あてに、船を爐(くわ)

より逆下(さか)にせし時(とき) 兼(かみ)鍋(なべ)さげて

淀の小橋を雪の人」

淀の鯉「句」よさこひ(淀鯉)に同じ。狂

言(き)體(てい)魚(ぎょ)「淀一(い)番(ばん)の鯉(り)を求めまして、と

てももの事に、生(な)鯉(り)に致(いた)して持つて

参(まゐ)らうと存(ぞん)じました」

淀の繼橋「句」川の淀に架け渡したる

繼橋。一説に、固(こ)有名(めい)なりと。萬葉

まぬの浦(うら)の淀の繼橋心(こころ)も思(おも)へや妹(い)が

めにし見(み)ゆる」

よ

淀の舟「句」よさね(淀舟)に同じ。柳

橋「淀の舟車近くてゆり起し」

淀の水車「句」徳川時代に、山城國久

世(くせ)郡(ぐん)淀の城外(ぐわい)淀川に、巨大なる水

車を設けて、水を城中に引きしもの。

「淀の川瀬の水車」とも呼びて、人口に

膾炙(かいし)せり。

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

よ

淀の渡(ワタ)【句】「地」山城國淀川の渡津の一。淀川の水勢は、古今の變轉多きが故に詳かにしがたけれども大渡(ワタ)、「一口(ワタ)封戸(ワタ)」の三箇所ありしもの如しといふ。各條を見よ。拾遺いづ方に鳴きてゆくらんほととぎす淀の渡のまだ夜ふかきに「佛藏古選贈鎌月卿」短夜を淀のわたりに雀鳴く」

よど 四度【名】よたび。四回。しど。四度の公文(ワタ)【句】しどむん(四度公文)に同じ。

よど 四度の使【句】つかひ(使)の條下を見。四度の幣【句】(幣)の條下を見よ。

よど 餘怒【名】後まで残る怒。餘憤。よどろ 與同【名】興力(力)同心すること、又その人。なまき。徒黨。庭訓往來不貽與同輩本之族、被誅之」

よどろ さい 與同罪【名】王朝時代に、主犯に連座する者を、主犯と同一の刑に處せしこと。

よどろ 上 淀上荷【名】攝津國淀川の上荷船(ワタ)。その制、柏原船(ワタ)に似て、二十石積なり。二十石ぶね。

よどろ 淀川【名】「地」山城國宇治川の伏見町邊より下の稱。淀町の邊にて、木津川及び桂川會流し、なほ攝津國の水無瀬(ワタ)の二流、河内國の天川(ワタ)等をも併せ、大阪市に近づきて、神崎(ワタ)川・中津(ワタ)川を分ち、本流は市中を貫流し、數流に分れて、琵琶湖の水源より第一の大川にして、琵琶湖の水源より十六里三十三町餘、幅は八町乃至十町に及ぶ。【澁川】「書」山崎宗鑑の大筑波集中の附句(ワタ)に、批評を下せるもの。一卷。松永貞徳の著。油槽(ワタ)御傘(ワタ)と共に、貞徳三部の書の一。一名。新筑筑波集。

よどろ 淀川煮【名】大さ二三寸乃至五六寸の鮎を開き、鱈の儘數時間、酒に濕し、酒と水と等分にして、半日ほど煮、その上、少量の醤油酢を加へて、又半日ほど煮、前後一日間ほど煮たる食品。酢のために、頭骨まで柔かになり、全部その

まま食ふを得。

よどろ 世時【名】ときよ(時世)に同じ。縁何にても自由なる世時になりける」

よどろ 夜伽【名】「夜間の伽。夜寝ず」に附き添ふこと、又それをなす人。侍夜。源氏物語類にも病人がござつて、家内

の者が、代代(ワタ)に夜伽に參るの」一茶「輝(ワタ)を隠して母の夜伽かな」二女が、男の意のままに同衾すること。閨の伽。枕の伽。とき。

よどろ 淀木【名】「建」よど(淀)に同じ。よどろ 淀君【名】「人」初、山城國淀城に居りしよりいふ。豊臣秀吉の妾、秀頼の母。淺井長政の女。名は茶茶。秀吉の歿後、その所生秀頼を輔佐して、威權を弄し、中外の事、皆自らこれを決す。慶長十九年十一月、大野治長(ワタ)の言に従ひ、徳川家康と兵を構へしが、元和五年五月、軍敗れ、秀頼自殺するに及び、遂に、近臣に命じて、己を殺さしむ。淀殿。淀の方(ワタ)。

よどろ 餘徳【名】死後になて残る徳澤。よどろ 餘得【名】餘分の利得。まうけ。よどろ 餘毒【名】後まで残る害毒。よどろ 餘他【名】あざける。嘲弄す。「豊後國の方言」

よどろ 夜床【名】夜の寢床。舞臺春風のなほさむしるを重ねばや旅の夜床は牙えもこそすれ」

よどろ 夜床片去る【句】配偶者の一方(多くは男)が旅中・外泊中などの時、残りたる方(多くは女)の者が、平生と同様に、寢床の一方に片寄りて寢ぬ。かたしき(片敷く)。「枕片去る」参照。萬葉はしきよねしつめの命(ワタ)の衣手の別れしときよね玉の夜床片去り出て來し月日よみつづくくらむ」

よどろ 夜床寝【名】夜床に寝ぬること。後拾遺竹近夜床寝はせじ鶯の鳴く聲聞けば朝寝(ワタ)せられず」

よどろ 淀鯉【名】攝津國淀川に産する鯉。品質すぐれたりとして名高く、昔は、高貴への献上には、城の邊のを用ひ、常

には遊獵を禁じたり。養州府志、鯉魚所有之。其中淀橋下所産爲勝。是稱「淀鯉」

よどろ じやう 淀城【名】山城國久世郡淀町の西北部にありし城。永正の頃、細川氏の屬城なりしが、天正の末、豊臣秀吉の妾淺井氏居り、元和九年、徳川氏、伏見の城を毀ち、その遺物を以て野築し、松平定綱を置く。その後、永井・石川・松平(光熙・松平(乗邑)の諸氏を経て、享保八年以後、稻葉氏の治城となりて、明治維新に至る。西に淀川・河内に互峙(ワタ)池あり。

よどろ 淀瀬【名】河瀬の中の水の淀みたる所なるべしといふ。「古語」萬葉宇治川は淀瀬無からし網代人(ワタ)船呼ばふ聲をちこち聞ゆ」

よどろ つみ 淀堤【名】「地」山城國の、淀の小橋と伏見との間にありて、淀川と淀澤(ワタ)との境をなす。數十町の堤防。橋上に松樹を列植せり。淀屋辰五郎の父三郎右衛門、命を受けて、築造すといふ。日本新米代篇「昔は、八幡(ワタ)の人にて、伏見繁昌の御時代、淀堤の御普請を請け負ひ、……、四十八丁の長手番を築く」

よどろ 夜外出【名】夜分にて、屋外に出づること。よあるき。朝外出(ワタ)に對して「古語」萬葉我妹子(ワタ)が夜外出の姿見てしより心空なり地(ワタ)は踏めども」

よどろ 淀殿【名】「人」よどろ(淀君)に同じ。

よどろ ぬき 淀貫【名】「建」よど(淀)に同じ。よどろ 淀縫【名】「初」山城國の淀にて作りしよりいふ。烟草入・巾着などの材料に用ふるために、革の裁餘(ワタ)の小片に、模様などを織ひたるもの。

よどろ 夜殿【名】夜寝ぬる家。寢所。寢室。後拾遺置く霜の鳴起を思はずば君が夜殿に夜がれせしや」其みまじ君がもやすばかりの春の日によのさへなど残らざるらん」

よどろ 淀野【名】「地」山城國淀澤(ワタ)の附近なる野。一名、伏見野(ワタ)。新後拾遺「あやめ草けふ刈るあとに残れるや淀野に生ふる眞菰なるらん」

よどろ のかた 淀方【名】「人」よどろ(淀君)に同じ。

よどろ こひしゆ せのたきのぼり 淀鯉出世瀧徳【名】「人」淨瑠璃の一。山城國八幡(ワタ)の富人江月屋勝三郎(淀屋辰五郎に擬す)、大阪新町遊樂茨木(ワタ)の遊女吾妻に迷ひ、惡手代惣七の奸計によりて、その財産を官沒せられし、吾妻は爲に殺人の罪を犯すに至りたりしかど、忠實なる舊從者新七夫妻兄弟の救護によりて、めつたく解決すといふ筋。近松門左衛門の作。

よどろ のさは 淀澤【名】「地」山城國紀伊納所(ワタ)及び横大路(ワタ)の東方、伏見町に至る、卑濕の地。一名、伏見の澤。

よどろ のふじは 淀伏柴【名】「植」まこも(眞菰)に同じ。

よどろ 淀橋【名】「地」武藏國豊多摩郡にある町。東京市四谷區内藤新宿の西に連接す。淀橋淨水工場ありて、東京市の水道を濾過及び分送す。又、郡役所ありたり。鐵道中央東線山手(ワタ)線の新宿驛亦、ここにあり。

よどろ 淀船【名】淀川を通ふ船。徳川時代には、主として、伏見と大阪との間を、この川筋によりて上せし三十石船をいへり。諸曲逆勇「都を出て、淀船や、たつ旅ごらも」太馬、淀舟や炬燵(ワタ)の下の水の音」

よどろ 夜通【名】夜をほして、曉に達すること。終夜。通宵。一代玄夜どほしに、丹波なる山人に言ひやりて」

よどろ 夜通【副】夜を通して、曉まで。よどろ 夜つぎ 夜通繼【名】驛馬を、夜どほしに、繼ぎ立つること。

よどろ 夜泊【名】夜、他の家に泊ること。多くは、男が、女の計に泊るにいふ。一代玄女めが、氣を通し過ぎて、男の夜泊するを構はぬものぢや」

よどろ 夜泊【句】前條の語を強めていふ語。萬葉玄女夜泊三勝(ワタ)とやらに心奪はれ、夜泊日泊して、女房を嫌ふ半七」

よどみ

よどみ 淀殿〔名〕水流のよどむこと。又その所。よど。和名淀殿。調止美。俗用三淀字云興止所謂淀渡也。方丈よどみに浮泡(泡)の事。淀り滞ること。「よどみなき婦人」。

よどむ 淀む 淀む〔動四自〕流水湛(た)むこと。淀をなす。たたふ。萬葉「さざ波の志賀の大わだよどむ」とも昔の人にもまたたけはめやも。土砂・塵芥など、水底に留まり溜る。沈澱す。おどむ。目事澱り滞る。萬葉洗衣(き)鳥貝川の川淀の淀まむ心思ひかねむと。其末平記石門(吉)梓(き)の淀まぬ座敷は大きわき、幸頭(き)末社が彈く三味に乗って、吞むやら瀧ふやら。

よどや かあん 淀屋今庵〔名〕「人」よどや(か)あん(淀屋古庵)に同じ。

よどや がは 淀屋草〔名〕「淀屋古庵」の草の古渡(き)を珍蔵せしよりていふとぞ。質は若草(わ)に同じくして、模様を極印(き)にて打ち出し、黒漆にて括りたる草。

よどや きあん 淀屋巨庵〔名〕「人」大阪の豪商淀屋の祖。天正中、大いに米粟を買ひて、日に豊臣秀吉の軍中に輸し、その賞詞を受けしより、海内の米粟穀麥その手に歸し、始めて、淀屋橋を架けて、南詰なる自宅の前に米市を開き、遂に堂島(き)米市の起源たるに至れり。

よどや こん 淀屋古庵〔名〕「人」茶人。大阪に住す。名は音富。一に今庵(き)といふ。戲畫連歌等に通ず。源光寺祐心に從ひて、古今傳授を受く。寛永二十年歿す。年六十。

よどや たつごろう 淀屋辰五郎〔名〕「人」大阪の豪商淀屋の第九世。吉安の子。豪奢のため、財を没せられ、元禄九年(一)一説には享保中)歿す。

よどや ばし 淀屋橋〔名〕「地」大阪市の土佐堀(堀)川に架し、北區中の島と東區船場(ば)との交通路に當る橋。一代名淀屋橋を越えて、中の島の氣色。よどや 卅取〔名〕よつき(世繼)に同じ。

よどろ

丹波與生千三百石の卅取。よどろ 〔動四他〕なぐさむ。あやす。愚言吾妹子(き)が心あし慰よどりつつかへりさすまてなつてしがな。

よどれ 動他〔動〕「づ」が、上の「よ」の韻に引かれて、「ど」に變じたるなりし「よつ」(攀づ)の已然形「攀づれ」の轉訛。諸曲歌占「手に劔の樹をよどれば、百節零落す」。

よどろ 動〔動〕(轉)の轉訛。「紀伊國の方言」。

よな 動〔動〕ほごさ(時鳥)の異名。

よな 動〔動〕噴火口より噴きいだす黄土。「九州の方言」。

よな 動〔動〕共に感嘆の意なる助詞よとなとを連結せるもの。念を入れて確かむる意。よなう。よの。榮基斯くたまふよな。桂川連理(き)さては、その方たちが娘よな。

よない 餘荷〔名〕よない(餘荷)を見よ。

よなう 動〔動〕前條に同じ。狂言樂阿彌「古今に通ずる心よなう」。

よなか 夜中〔名〕夜のなか。中宵。夜中曉(き)に親しき人とならば、夜中曉にかけても語らひかはすが、世の習なり。〔諺語〕「夜中、曉と、つきづきしき人の言ひはるめる、何事の折も、疎からずおぼしたまはせば」。

よなか 節中〔名〕節のなか。慶賀主母集「竹の臺に月の浪りたりし、竹のよなかに出づる月かな。更けにけりこやふし待の程ならん」。

よなか 夜中〔名〕「地」近江國高島郡今津の古稱ならんといふ。萬葉「夜深(き)け夜中の方におほししく呼びし舟人泊(き)てにけむかも」。

よなが 夜長〔名〕夜間の長きこと。長夜(き)。榮基九月(き)になりぬれば、夜長になりまきりて。大床子(き)の御膳のおろしを、夜食に食すること。「古の宮女の語」。

よながし 夜長し〔形〕夜長なり。夜間長し。萬葉明日の宵照らむ月夜(き)は片寄に今宵になりて夜長からなむ」。

よなか

よなかば 夜半〔名〕よなか(夜中)に同じ。平家三五夜中の新月の色白く冴え、涼風颯たりし夜半に。

よなき 夜啼〔名〕鳥などの、夜啼くこと。「夜啼」萬葉ほととぎす夜なきをしつつわがせを安寝(き)しなすなゆめ心あれ。乳兒の、一種の病のため、夜間、安眠を得ずしく泣くこと。夜驚症(き)「夜泣」萬葉わがせに戀ふとにあらしみどり子の夜なきをしつついねがてなくは。目(動)へたり(申香)に同じ。

よなき 夜風〔名〕夜間、海上の風。よなきい。夜啼石(き)遠江國小夜(き)の中山にありて、昔、夜間啼聲を發したりと傳ふる石。もと山頂より東へ約一丁下りたる路の中央に在りしが、今は久延寺の邊に移したり。俚俗傳ふる所に依れば、古旅の婦人、山中にて賊に殺害せられ、胎内の子、その傷口より生れしを、近き處の者ども拾ひ上げ、土地の名物なる餅の餅を興へて養育せしに、長じて、大和國の有名なる鍛工の弟子となり、遂に母の仇を復せしかど、婦人の怨念、この石に留まりて、夜間啼聲を發し、後、弘法大師の功力(き)によりて解脱(き)せりなどいへり。〔夜驚症(き)を見よ。〕

よなき うどん 夜啼饅頭〔名〕よなかそば。〔京都の語〕

よなき そば 夜啼蕎麥〔名〕よなかそば。〔京都の語〕

よなき どり 夜啼鳥〔名〕宵より夜半までの間に時を告ぐる雞。

よなきのまつ 夜啼松〔名〕遠江國小夜(き)の中山を西へ下りたる處にありきといふ松。東海道名所製佐夜の中山より十町ばかりを過ぎて、夜啼の松あり。この松を燈(き)して見すれば、子供の夜啼を止むるとて、往來の人削り取り、切り取りけるに、その松、遂に枯れて、今は、根ばかりになりけり。

よなぐ 淘ぐ 動下二他〔動〕米を水に淘(き)て磨ぐ。水に入れて細かき物などを淘(き)り分く。淘汰す。選り分け

よなご

て、悪きを捨つ。淘汰す。よなごにしま 與那國島〔名〕「地」琉球國八重山(き)列島の一。その西端に位置す。周圍七里。

よなごら 米倉〔名〕こめくら(米倉)に同じ。和名廣倉。有屋(き)萬呂久良。一云、與余久良。一云、伊余久良。

よなご 米子〔名〕「地」伯耆郡西伯(き)郡にある町。鳥取縣の管下。弓ヶ濱半島の咽喉部に位し、國中第一の都會。出雲國安來(き)へ海路一里、松江へ同六里。米子の深浦(き)伯耆國中海(き)の別稱。

よなじ 夜無〔名〕夜様の車夫。

よなじだけ 節無竹〔名〕「種」じゅちく(實竹)に同じ。

よなどりより よな鳥〔名〕「動」うさどり(善知鳥)に同じ。〔古語〕

よなばり 吉隠〔名〕「地」大和國磯城郡初瀬(き)町の東部に位する大字。宇陀郡への通路。萬葉降る雪はあはに降りそ吉魚張(き)の猪養の山の塞きなきまきくに。同吉魚張の猪養の山に伏す鹿の妻呼ぶ聲を聞くともしき。

よなばりのほか 吉隠墓〔名〕大和國吉隠にある、光仁天皇の御生母紀氏の墓。今は高塚と呼ぶ。

よなひ 餘荷〔名〕役者又は藝人などの、給料の割増(き)を取ることを、又その金銭。よない。〔江戸の劇場の語〕

よなひ 豫納〔名〕ぜんなん(前納)に同じ。

よなひ 夜鍋〔名〕「夜並(き)」即ち夜を並べて爲す義とも、夜延(き)の轉にて、夜にまで延ばしてする義とも、又、夜鍋に松のひで等を燃やし、その光にて爲すよりいふともいふ。夜に入りても爲す仕事。よしこと。よなべしこと。ゆふなべ。長町女城(き)彼岸過ぎたりと、めつきりと日が短い。夜なべしよにも、この油の高きでは、まうける程、皆戻る。房事の隠語。〔俚語〕

よなべし 夜鍋仕事〔名〕前條に同じ。

よなべし 世直〔名〕世直(き)を改め

よに

よ

1045

とゑぬわ ゐれるりら よゆや もめんむみき ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

病ベスト等の感染預防のための一種の注射。細菌を寒天に培養したるを、食鹽水に混じたる上、六十度で一時間熱して殺菌し、防腐のために、石炭酸を、〇・五パーセントの割合に加へたるを用ふ。

よばうちゆうじや 豫防注射「名」傳染病の感染預防のために、薬液の注射。

よばうはん 豫防委員「名」てんせんびやうばあるん(傳染病豫防委員)の略。

よばかり「名」四十一歳の稱。

よはく 餘白「名」紙面の、文字を書き、又は印刷したる殘の、白く殘れる部分。空白。

よはり 汚す「句」自己の詩歌文章を掲げ、夜走「名」夜船を走らすこと。(晝走に對して) 晝夜走の帆に有明けて若菜かな」

よはす 餘害「名」矢の害の、繼管(ぎん)ならすして、その管の末に、直ちに作附(つ)にせるもの。運歩(うんぽ)餘管、ヨハズ。矢之筈、其ママ目刺(めさ)筈也。

よはす 筈害「名」やばす(矢筈)を見よ。

よはだ 夜肌「名」夜のはだへ。六點ひとりねの夜はだの寒さ知りそめて昔の人ぞ今も戀しき」

よはたぐさ 夜半草「名」螢の宿りたる草なりといふ。「古語」 蘇玉集「火借草」これ、螢の宿りたる草なり。夜半草。同。よはた草立つらん川の夕暮にかげの紛るる月出てにけり」

よはたらき 夜働「名」夜はたらきとよかせぎ。『夜うち(夜討)に同じ。』

よはせき(夜棲)『夜に同じ。』

よはせき 夜話「夜咄」『夜話すこと、又その話。よがたり。夜話(や)のふはけの物語。夜話の座敷にて、夜なかの鐘を聞ききて。』『午後六時頃より行ふ茶湯(ちやう)』。朝衣百語「蚊蚊は殊にはげしき、かの七賢の夜咄には、いかに團扇(うちや)の障(さ)なりけん」

よはなる 世離る「動下二目」世俗に遠ざかる。俗世間を離る。源氏「世ばなれ

たる海づらなどにはひ隠れぬかし」

よはねもくじろく 約翰默示録「名」『書』もくじろく(默示録)に同じ。

よはのねざめ 夜半寢覺「名」『書』次條の略。更科日記「よはのねざめ、みつのままつ、みづかるくゆる、あさくらなどは」

よはのねざめものがたり 夜半寢覺物語「名」『書』ねざめものがたり(寢覺物語)に同じ。

よははり 呼喚「接尾」針小棒大なる惡名を冠せて、他人を罵る意。よばり。中將(なかつ)古跡(こせき)の松(まつ)假初(かりはつ)にも繼母(けいぼ)の呼はり、汝(き)の口が腹(はら)れうぞや」

よははり 呼喚「名」犬追物(いぬお)の時、日記附の役人の左方に斜に控へ、檢見(けんけん)より、矢の命中したる旨の相圖(さうず)ありたる時、馳(は)り寄(よ)りて、その射手の名字(な)官途(くわんと)を聞き、日記附の前に馬を止めて、聲高く、日記附に報告する役。

よははる 呼ばはる「喚ばはる」『動四自』よば(呼ばふ)に同じ。

よはひ 齡齒「名」『よ世』因に接尾語はひの添ひたる語。人の、この世に生れて、經來れる年月の程度。とし。よ。年齒。年齒。源氏「こちのよはひに、まだ斯く騒(さわ)しき野分にこそあはざりつれ」

齡足る「句」成人す。源氏「やうやう御齡足りおはしまして、何事も辨(わ)へさせたまふべき時に當りて」

齡の雪「句」白髮の譬。頭の霜。近江源氏「先師(せんし)雲にちらつく雪(ゆき)より、齡の雪を覆(おほ)うたる、衰(おとろ)著(しやく)たる老人(らうじん)も、齡を延(の)ぶ「句」命の延ぶる程に面白く感ず。源氏「この度のやうに、文(ふみ)どもきやうさく、舞(ま)い(樂)ども調(しら)ほりて、齡延ぶることなん侍らざりつる」

よばひ 夜這「名」『次條の語の轉義』夜間男が、女の寢所に忍び寄ること。油漬「及ばぬ戀をするぞをかしきさいふ句に二階へと夜ばひに行けば階(か)引きて」男よばひ婚「名」『よば(婚)ふ』を見よ」男

又は女が情を通ぜんとて呼び誘ふこと。さよばひ。「古語」萬葉初瀬小國(おのくに)に夜延(よのの)せすわがせの君に」

よはひくさ 齡草「名」『植』きく(菊)の異稱。蘇玉集「よはひ草、菊」

よはひくらへ 齡比「名」年齢の多少を比ぶること。空襲「よはひ比する類にや」

よはひさかり 齡盛「名」さかりなる年齢。壯年。著聞「未だ齡さかりにて、見目、殊に清けなりけり」

よはひす 齒す「動使變自」『齒』の字、列なる意あるを、年齒(ねんし)の意に訓讀せるものにて、實は誤訓に出たり。同列にならぶ。仲間になる。伍す。「人のよはひさかり人(ひと)」「年齢よはひさかり人(ひと)」「よばふ人(ひと)」「古語」大和(おほ)その婚人(むすめ)どもを、呼びに遣りて」

よはひふみ 婚文「名」よばふ意を述べたる手紙。艶書。「古語」 雲葉(うん)女人(にょ)求めしめんとするに、よばひ文(ふみ)のやまと歌なきは、人毎(ひと)のちかはしきものなり」

よはひさき 婚星「夜這星」『名』『天空を飛ぶさま、婚(よ)に似たりとて名づく』りやせ(流星)に同じ。夫木(ふき)うちやまし誰をみそらのよばひさき暮れば出て光知るらん」 俗語「日月星夜(にちげつせいや)續分(つづぶん)飛んで氣輕な夜這星」

よばふ 呼ばふ「喚ばふ」『動四自』よば(呼ばふ)に同じ。萬葉里をさが聲は閑處(かんじょ)まで來立ち呼ばふ」

よばふ 呼ばふ「喚ばふ」『動四自』よば(呼ばふ)に同じ。千載(せんざい)山城(やましろ)の美豆野(みまの)の里に妹をおきて幾たび淀の船呼ばふらん」 傾城(けいせい)反響(はんきやう)「物問はんとぞ呼ばはる」

よばふ 婚ふ「動四自」『前條の語の轉義』婚(よ)を爲す。「古語」 記八十神(きそじ)のおものおも、稻葉(いなば)の八上(やへのかみ)の姫をよばはむの心ありて、大和(おほ)故式部卿(こしきぶけい)の宮を、桂(かへ)のみこ、いと切(き)によばひたまひけれど、おはしまさざりける時」

よばん 夜番「名」夜中、寝ねずに番をすること、又、その人。夜の當番。やばん。夜警。(晝番に對して) 更科「夜番にて」

よばんとえ 四番肥「名」にばん(え)二番肥(え)を見よ。

よはんもの 四番物「名」おにのう(鬼能)に同じ。

よはり 夜針「名」婦人の、夜裁縫をするよはり夜尿「名」ねせう(ん)寢小便(しんせう)に同じ。醒睡(せいすい)「今夜は冷えて、夜尿仕りて」

よはりこき 夜尿放「名」次條に同じ。

よはりたれ 夜尿垂「名」夜ばりを垂ること、又その人。よばりこき。

よはり 呼喚「接尾」よば(呼)に同じ。天(あま)の鶴(つる)盗人(たうじん)よばりは、おのれか。治兵衛(ちへいゑ)が、何盗んだ、さあ、ぬかせ」

よばる 呼ばる「喚ばる」『動四自』よばはる(呼ばはる)に同じ。赤染衛門(あせぞゑもん)近き程に「呼ばはるし」 曠野(くわうや)何事か呼ばりあひては打笑(うちわら)ひさいふ句に蛤取(かきが)は皆女中なり」

よばる 呼ばる「動下二目」『よば(呼ばふ)』の受動の形の轉義「響應を受く。御馳走になる。『關西地方の方言』

よひ 夜日「名」よるひる(夜遊)に同じ。一代(いち)夜日を送りぬ」

よひ 宵「名」『よは。よは。夜間。』「古語」 萬葉「よひに逢ひてあした面(おもて)無(な)み名張(なはり)にかけながき妹が庵(い)せりけむ」

『夜に入りて、未だ間もなき時。初夜。古今(ここん)夏の夜はまだ宵ながら明けるを螢のいづこに月宿るらん」

宵の秋「句」秋の初夜。夜半(よ)の秋。參照。萬葉「しだり尾の切籠(きりかご)焦(こ)げたり宵の秋」

宵の庚申「句」よひあらしん(宵庚申)に宵の口「句」目が暮れて間もなき時刻。宵のうち。驚(おどろ)仲人(なこうど)は宵の口」

宵の年「句」よるとし(舊年)に同じ。

宵の春「句」春の宵。萬葉「肘白(ひら)き僧の假疑(かりが)や宵の春」

宵の間「句」『よひま(宵間)に同じ。曠野(くわうや)轉(てん)「宵の間は笹に亂る螢かな」

『江戸にて、宵に、提燈をともして、市中を歩きまはり、遺失物を拾ひて、生活の資とせし者。地見。』

宵の明星「句」『天(てん)きんせい(金星)を見

よび

よび 酔(名) 系ひ(酔)の轉。
よび 指(名) ゆび指に同じ。

よび 呼(名) 呼ぶこと。

よび 豫備(名) あらかじめのそなへ。
ひかへ。準備。預備。法。犯罪に
必要なる準備行為。よびはん(豫備犯) 参
照。よびえき(豫備役)の略。四よび(い
豫備兵)の略。

よび あぐ 呼上ぐ(動下二他) 聲高く
呼ぶ。よび たつ。目下の者を、招き
て、手元に來らしむ。招き寄す。

よび あげ 呼揚(名) その折折の都合に
て、待合・小料理屋などに呼び寄する姿。

よび あつむ 呼集む(動下二他) 招きて
來り集まらしむ。召集す。

よび いく 呼生く・呼活く(動下二他)
死にたる人に對し、耳元などにて、聲を掛
け、名を呼びなどして、よみがへらしむ。

よび 息の通ふを頼にして呼び生ける
に。浮世風鳥呼び生ける。呼び生けると、
顔へ水を吹いて、大膽になる。やうやう
に、ぶた七は息を吹き返す。

よび いたす 呼出す(動四他) 招きて、
その人の居る所より、わが所に出て來ら
しむ。よび よす。召しだす。召喚す。

よび だす。聲を掛けて、屋外に出て來
らしむ。呼び出す。よび だす。

よび 一つ 呼出す(動下二他) 前條に同
じ。空穂・兵衛の君呼び出でて。

よび 引きて、その物を動かす絲。
より引きて、その物に結びつけ、遠く
よび いる 呼入る(動下二他) 呼びて、
内に入らしむ。招きて、入り來らしむ。

よび 入る。後掛人の許にまかりて侍る
召し入る。よび 入る。よび 入る。よび 入る。
に、呼び入れねば。よび 入る。よび 入る。
に、同じ。繰返す。よび 入る。よび 入る。
房に、無用の自慢なり。

よび えき 豫備役(名) 常備兵役の一。
現役を終了したる後に服するもの。將
校・准士官は、海陸軍又は兵科により、士
卒は、その現役に服したる年を、通算し
て、陸軍にては七年四箇月、海軍にては七

よびおろ

よび おろす 呼下す(動四他) よびくたす
(呼下す)に同じ。一若小組を呼び下しけ
り小田の雁。

よび かいふ 宵庚申(名) 庚申待の
宵宮(名)。俗曲(大和い手問五字)ほんに、思
へばあとの月、宵庚申の日待の夜。三
しんちゅうよびかいふ(心中宵庚申)の略。

よび かいふ 豫備行為(名) 準備として
の或行為。

よび かく 呼掛く(動下二自) 聲を掛け
て、よび かけ 呼掛(名) 呼び掛くこと、
又そのもの。能樂にて、橋掛(か)より
り出づる時、舞臺に居る者に呼び掛くる
詞。よび かけ 寄せて、足を掛くる義。相撲
(ふ)の手の一。相手の突き出したる片手
を掴みて引き廻し、機を見て、足を相手の
外より引き掛け、突き倒すもの。

よび かね 呼鐘(名) 人を呼び集むるた
めの相聞の鐘。

よび かいふ 呼返(名) 呼び返すこと。
よび かいふ 呼返す(動四他) 呼びて、引
き返さしむ。招きて戻らしむ。よび もど
す。召し返す。

よび かん 豫備艦(名) 在役艦にあらず
よび かんせん 豫備艦船(名) 在役艦の
任務に就きをらぬ艦船。

よび かんせん 豫備艦艇(名) 豫備艦と
よび かん 豫備金(名) 豫備の金銭。
よび かん 豫算の費目の一。第一豫備金と第
二豫備金とに分つ。前者は、國家の設計
上、避くべからざる豫算の不足を補ひ、後
者は、豫算外に生じたる、必要の費用に充
つ。豫備算。

よび かん 呼具す(動佐變他) 呼び寄せ
て伴ふ。宇通法師ばら呼び具して來(一)
よび くだす 呼下す(動四他) 呼びて、下
らしむ。よび おろす。

よび くだす 呼下す(動四他) 呼びて、下
らしむ。よび おろす。

よび くだす 呼下す(動四他) 呼びて、下
らしむ。よび おろす。

よび くだす 呼下す(動四他) 呼びて、下
らしむ。よび おろす。

よび くだす 呼下す(動四他) 呼びて、下
らしむ。よび おろす。

よび くだす 呼下す(動四他) 呼びて、下
らしむ。よび おろす。

よびかん

よび かんかん 豫備軍艦(名) よびかん 豫
備艦に同じ。

よび かんかん 醉食(名) よびかん(醉拂)を
云ふ。薩摩國の方言。

よび かんかん 醉狂(名) よびかん(醉狂)
に同じ。犬子集。同じ丸をせん方の時
さいふふじとらまへて下月を上戸の醉狂。
よび かんかん 豫備教育(名) 高き程度
の學科を教ふるに先だち、その豫備とし
て施す教育。

よび かんかん 豫備檢事(名) 新たに檢事
に任ぜられたる者が、檢事に關位あるま
で勤務する間の職名。豫備判事・豫備書
記の類。

よび かんかん 醉心地(名) よびかん(醉心)
に同じ。地に同じ。

よび かんかん 宵越(名) 一夜を越ること、又
その越たる物。語。江戸兒は宵越の錢
を遣はす。一若宵越の豆腐あかりに藪
蚊かな。

よび かんかん 呼越す(動四他) 呼びて來ら
しむ。呼び寄す。萬葉集。越ゆる犬召(一)
び越して鳥狩(一)する君青山の葉繁き山
邊馬休め君。一馬車。關東川越より、は
るばる呼び越し奉る間。

よび かんかん 宵込(名) 宵の頃に、敵中に入
り込みて宿ますこと。よび かんかん
よび かんかん 呼込む(動四他) よびかん(呼
入る)に同じ。

よび かんかん 呼範む(動下二他) 呼び寄せ
て、そこに押し籠む。萬葉集。これをさへ呼
びこめたまふ事と腹立たれたまへば。
よび かんかん 呼聲(名) 呼名。よび かんかん
と網子(一)整ふる響の呼聲。呼名。と
なへ。稱呼。名稱。醒睡さうかとした呼
聲はいやて御座る。二つながら撥れた名
を附けて賜はれ。

よび かんかん 呼聲高し(句) 人選などの場合に、人
氣ありて、噂に上ること。多し。

よび かんかん 呼坂(名) 駿河國富士郡
田子浦にあつて、古惡神、人を取るとて、
通行する者、互に名を呼びかはしたり
といふ地。萬葉集。東路(一)の田子の呼坂

よび かんかん 呼坂(名) 駿河國富士郡
田子浦にあつて、古惡神、人を取るとて、
通行する者、互に名を呼びかはしたり
といふ地。萬葉集。東路(一)の田子の呼坂

よび かんかん 呼坂(名) 駿河國富士郡
田子浦にあつて、古惡神、人を取るとて、
通行する者、互に名を呼びかはしたり
といふ地。萬葉集。東路(一)の田子の呼坂

よび かんかん 呼坂(名) 駿河國富士郡
田子浦にあつて、古惡神、人を取るとて、
通行する者、互に名を呼びかはしたり
といふ地。萬葉集。東路(一)の田子の呼坂

よびきけ

越えかねて山にか寝むも宿(一)は無し
に。業武集。猿。もなほ遠方人(一)の
聲かきせわが越しあむる手兒の呼坂。
よび かんかん 呼酒(名) つかへさけ(通酒)に
同じ。

よび かんかん 醉覺(名) よびかん(醉覺)に同
よび かんかん 豫備試驗(名) 本試驗を受
けるに先だちて、受くる學力の試験。
よび かんかん 豫備仕拂人(名)
「法」手形の仕拂人の仕拂又は引受を拒
絶したる時、これに代りて、仕拂又は引受
をなす人。

よび かんかん 呼鹽(名) 料理の際、鹽からき
食品より鹽分を溶出せしむるために、假
に更に鹽を振り掛くること。

よび かんかん 呼喚(名) 喚狀(名) 人を呼び出
すために遣す書狀。めしじやう。召喚狀。
よび かんかん 豫備書記(名) 新たに裁判
所書記に任ぜられたる者が、書記に關位
あるまで勤務する間の職名。豫備判事・豫
備檢事の類。

よび かんかん 呼掛う(動下二他) 呼び寄せ
て、そこに坐らしむ。源氏。何心も無くて
ありきたまふを……呼び掛ふたまひて。
よび かんかん 宵涼・宵納涼(名) 宵の間
の納涼。萬葉集。血針のほかに闇の宵す
ずみ。

よび かんかん 呼捨(名) 次條に同じ。
よび かんかん 呼捨(名) 人の名を呼ぶに、
殿様君などの敬語を添へぬこと。よび
つけ。

よび かんかん 豫備水雷艇(名) 在
役艇にあらずる水雷艇。
よび かんかん 豫備潜水艇(名) 在
役艇にあらずる潜水艇。「に」に同じ。
よび かんかん 宵工(名) 實行はおぼつか
なき事を、前夜より計畫すること。萬葉集
(一)の宵工。

宵工・朝臥(一) 前夜には、計畫
を立てながら、翌朝には、朝寝のために
實行し得ぬこと。「謔語」

宵工・朝臥(一) 前夜には、計畫
を立てながら、翌朝には、朝寝のために
實行し得ぬこと。「謔語」

宵工・朝臥(一) 前夜には、計畫
を立てながら、翌朝には、朝寝のために
實行し得ぬこと。「謔語」

宵工・朝臥(一) 前夜には、計畫
を立てながら、翌朝には、朝寝のために
實行し得ぬこと。「謔語」

宵工・朝臥(一) 前夜には、計畫
を立てながら、翌朝には、朝寝のために
實行し得ぬこと。「謔語」

宵工・朝臥(一) 前夜には、計畫
を立てながら、翌朝には、朝寝のために
實行し得ぬこと。「謔語」

宵工・朝臥(一) 前夜には、計畫
を立てながら、翌朝には、朝寝のために
實行し得ぬこと。「謔語」

居らず、宵の内に歸り去ること、又その

呼びて、わが面前に來らしむ。 枕さぶら

宵泊【名】夜淺き時より泊り

ひとり、にたにた笑し

よび

よび

よび

よび

よびのく 呼退く【動下二他】呼びて、多勢の中より離れて來らしむ。他の者より放ちて呼び附く。よびはなつ。太平記大江山の麓にて、道より上手に、馬をうち上げて、奴可四郎を呼びのけて言ひけるは「

よびのぞき 宵覗【名】物を盗まんとて、宵の頃より、屋内の様子を覗くこと。手習無宵覗めを手引する内と外との相拘摸【名】めら。

よびのもり 宵森【名】【地】伊勢國松坂のよびはなつ 呼放つ【動四他】よびのく【呼退く】に同じ。源氏君達ばかりをぞ呼びはなちて、見たてまつりたまふ」

よびはん 豫備犯【名】【法】豫備【名】をなしたる犯罪。

よびはん 豫備判事【名】新たに判事に任ぜられたる者が、判事に關位あるまで勤務する間の職名。豫備檢事豫備書記の類。

よびひ 豫備費【名】豫備の費用。

よびびと 呼人【名】よびて呼手に同じ。若風俗【針立】の張紙しても、呼人なく、世渡の悲しきに」

よびふえ 呼笛【名】「呼子【名】の笛」に

よびふす 醉臥す【動四他】あひさす【醉臥す】に同じ。

よびへい 豫備兵【名】豫備役に服するよびへいえき 豫備兵役【名】よびえき豫備役に同じ。

よびま 宵間【名】宵のあひだ。よひ。保妻女集「冬川の波の宵間にこほれるを風もて織れるあやかとぞ見る」

よひま 宵祭【名】よみや（夜宮）に同じ

よひま 宵惑【名】宵の口より眠がること。よひねまどひ。ゆふまどひ。ゆふねまどひ（朝惑に對して）源氏「宵まどひもせず、起きるなり」芭蕉「山鳥よ我もかも寝ん宵まどひ」

よひま 呼廻る【動四他】呼びなが

よひみ 呼水【名】他所の水を、樋又は地脈などを通じて導くこと、又その水。

よひみや 宵宮【名】よみや（夜宮）に同じ。

よびむかふ 呼迎ふ【動下二他】呼び

寄せて迎ふ。呼び取る。招待す。妻又は婿として、家に迎へ取る。呼び入る。呼ぶ。武家通稱、姉妹の兄よければ、近近呼び迎へんと」

よひん 羅 Yohinbun, 英 Yohin-line【名】「草鞋」科に屬するユメホアの樹皮より採取せるアルカロイド。色慾を増進せしむる効ありといふ。亞弗利加の土人も、同樹皮より、一種の混和劑を釀造して、同様の目的に使用する。

よひもどし 呼戻【名】呼び戻すこと。

よひもどす 呼戻す【動四他】よひかへす【呼返す】に同じ。

よひもの 呼物【名】遊興のために、呼び寄せるもの。招きて慰とするもの。一代為一人を金一角に定めおきしは、輕ゆきなる呼物なり。商店興行場などの事物の内に、最も人氣のあるもの。

よひや 呼屋【名】大阪の新町【名】以外

の遊廓にて、新町の揚屋【名】よりは品位劣れる家。藝妓【名】の遊女屋【名】に新造が出る、とあないに言うて呼屋を觸れて歩きをのぢやはいな」

よひやう 餘病【名】或病氣の經過中に、新たに發する他の病氣。

よひやうし 四拍子【名】やびやうし【八拍子】を見よ。

よひやくし 宵藥師【名】ゆやくし【夕藥

よひやみ 宵闇【名】陰曆十六日乃至二十日頃の宵の間は、月いまだ上らずして、闇なること。ゆふやみ。

よひやす 呼寄す【動下二他】呼びて、手元に寄り來らしむ。招き寄す。召し寄す。招致す。萬葉沖邊より船人のぼる呼び寄せていざ告げやらむ旅のやどりを」

よひよせ 呼寄【名】呼び寄すること。

よひよこ 宵宵毎に【副】次條に

同じ。伊勢人知れぬわが通路の關守は宵宵ごとにうち寝なん」

よひよに 宵宵に【副】宵ごとに。夜毎に。古今よひよに枕定めん方もなしにかに寝し夜か夢に見えけん」を見よ。

よひよわり 宵弱【名】【日方】の宵弱

よひら 四片【名】四箇のひら。しへん。紫陽花【名】の花。拾遺あちさるの下葉にすだく螢をば四ひらの數の添ふかとぞ見る」

四片少き花【句】次條に同じ。【古語】新あちさるの四ひら少き初花を開けはてずと思ひけるかな」

四片の花【句】よひら（宵ら）の條に引きたる六帖の歌に本づきていふ「紫陽花【名】の花。【古語】

よひら 宵ら【名】よひ（宵）に同じ。六帖「蕙【名】す葦はこちたしあちさるの花のよひらに逢ひ見てしがな」

よひり 豫備理事【名】現職又は非職中、他の文官に専任し、又は非職満期となりたる理事。

よひりん 呼鈴【名】人を呼び寄せる合圖に鳴らす鈴。大抵電鈴を用ふ。

よびわく 呼分く【動下二他】多くの中より、分けて呼び出す。よびはなつ。

よひお 宵居【名】宵に、眠らずに、坐りてあること。夜居【名】。【古語】源氏あま

り久しき宵居も、例ならず人や咎めたりよびをさて 宵男【名】宵の間の遊客なる男。二代男女郎……宵男歸れば朝込姿【名】。

よふ 興夫【名】興を昇く賤夫。かこか

よふ 醉ふ【動四自】あふ【醉ふ】の訛。

よふ 呼ぶ【動四自】よむ【讀む】と、語源相同じ。聲を立つ。よばふ。よばはる。さけぶ。叫喚す。【喚ぶ】萬葉朝風に船出をせむと舟子も柝子も聲よび」

よふ 呼ぶ【動四他】聲を掛け、又は書面にて招く。よびよす。よびむかふ【呼迎ふ】に同じ。然、驗者【名】……ここかしこ呼ばれ時めくにつけて、安げもなし」【みちびく。誘導す。水を呼ぶ】

よふむかふ【呼迎ふ】に同じ。油鹽及ばぬ戀をするをかしき【いふ句】に死んだらば別の妻を呼びもせて」【名づくとなふ。

妻呼ぶ【句】鳥獸の男性が、聲を發して、女性を誘ひ寄す。萬葉「この頃の秋

の朝けに霧がくり妻呼ぶ鹿の音のさやけさ」【鳥まと方の湊の洲鳥【名】浪立てて妻呼び立てて邊【名】に近づくも」

呼べば應へんとす【句】【こころ【呼應】を見よ】にや遠方に見ゆる山・人家などの、極めて、近きやうに見ゆる形容。

よふう 餘風【名】あふ【遺風】に同じ。

よふか 夜深【名】夜ぶかきこと、又その時刻。よふかに。深夜。深夜。縣縣雲北野（夜ぶかに參詣しけり」

よふか 夜深夜更【名】夜をふかすこと。夜遅くまで起きてゐること。よひつ

よふか 夜深し【形】夜更けてあり。【古】翌日の曉に達せぬ意に用ひ、後世は、その日の初夜を過ぎたる意に用ふ。【式部日記】まだ夜ぶかきほどの月さしくも、木の下のをぐらきに」源氏「夜ぶかき御ありきを、わりなしとおぼせど」

よふけ 夜深夜更【名】夜のふくることと又その時刻。よふか。深夜。深夜。夜深さ深【句】前條を強めていふ語。源氏風鳥夜ぶかきふけてまで、能い氣になつて酒落てるが」

よふけ 夜更方【名】よふけ（夜深）に

よふけ 呼子【名】次條の略。

よふこ 呼子【名】人を呼び集め、又は、變事などありたる時、合圖のために吹く、小き笛。よふこ。よびふえ。

よふこ 呼子【名】【地】肥前國東松浦郡にある村。唐津【名】町の西北四里。名古屋と並びて、一港灣を擁す。玄海灘の西南に位し、豪岐への要津にして、港内狭ければ、水深し。

よぶこ 呼子錢【名】はねわんせん【撥寬永錢】に同じ。

よぶこ 呼子鳥・喚子鳥【名】【動】古今傳授の三鳥の一。へわく【郭公】に同じ。とも、つづり【荷鳥】に同じともいふ。萬葉大和には鳴きて來る【らむ】呼子鳥象【名】の中山呼びぞ越ゆる」古今をち

こちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」
よふすま 夜食夜被「名」すま(表)に同じ。佳言。夜ふすまもなく、取りしたためたるけしきなれば」
よふすま 夜食草「名」種。菊科に属する多年生の草。莖は平滑にして、高さ數尺、葉は互生し、戟形にして大きく、先端尖り、齒牙あり。筒狀花小く頭狀花序をなして開く。山地に自生す。

よふね 夜船「名」夜行く船。夜航の船。夜船(表)。新古今「鴨ある藤江の浦の沖つ洲」に夜船いさふ月のさやけさ」
よふね 何時(著)「著」きたるか知れずとの意よりいふ。ほたもち(牡丹餅)の異稱。鶴翁漫筆「若狭國にて、牡丹餅を夜舟といひ、又、隣知らずといふ。……夜舟とはついたを知らぬといふ事、隣知らずといふも、同じ事なり」

よふべ 夜「名」ゆべ(夕)に同じ。名義抄「早晩、ヨフベ、ユフグレヒクレヌ」
よふん 餘憤「名」後まで残るいきどほり。餘怒。
よぶん 餘分「名」あまる分量。餘計の餘(分の根)(句)「數むをえん」(無縁根)に同じ。

よぶり 夜振「名」暗夜、船の上より、炬火を振り照らすこと。
よぶろ 鰯「名」よほろ(鰯)に同じ。
よべ 昨夜「名」きのふの夜。昨晚。よんべ。鰯兵よべも、御あそびに、かしこく求めたてまつらせたまひて」

よべ 夜邊「名」よる(夜)に同じ。
よへい 餘兵「名」敗れて、なほ残れる兵。討ちもられの兵。殘兵。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。

よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。

よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。

よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。
よへい 餘弊餘敵「名」後まで残れる弊害。

よへ(る)すし 與兵衛餅「名」江戸向兩國「元町」にありし餅屋。江戸名物狂詩選「流行餅屋町町に、此頃新開兩國東、和路次奥名與兵衛、客來爭坐二間中」
よほ 「名」種。りやぶ(令法)に同じ。
よほ 「名」よほよほとしてゐること。又その人。朝鮮人を罵りていふ語。
よほく 餘木「名」その木以外の木。他の樹木。
よほく 「動下二目」次條に同じ。

よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。

よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。

よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。

よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。

よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。

よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。

よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。
よほく 「動下二目」次條に同じ。

接する左右の二つの間(一)。四坪に構へたる間なる故、四間なりとの説もあり。長門本堂四間の所の縁際。義經四間の御出居(二)に、ともし火數多き立て」
よま 「名」つり(と)釣絲を云ふ。「九州の方言」ひびく(よま)「硝子」よま参照。「略」
よまい 四枚「名」よまい(四枚肩)のよまい(かた)四枚肩「名」駕籠を、四人に昇くこと。又その駕籠。二枚肩、三枚肩乃至八枚肩などもあり。柳屋「四枚肩衣香簪じてもり殺し」同。先陣を迫ひこす駕籠は四枚肩」

よま 「名」彌時の義なるべしといふ。米穀、蔬菜などの種子を、出来たと同じ年に蒔くこと。又その結果として、採取し得たるもの。
よま 「名」いまきを云ふ。「伊勢國津よまき」夜紛「名」夜の紛に同じ。義曲仲光「薄衣に包み、夜まきぎに、遠達と御目に掛くるならば」「まし夢」の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。

よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。

よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。

よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。

よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。

よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。

よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。
よま 「名」むぎ。よまし(夢)の詠。

よみ 齊の夜間男、これもをかしからず」
よみ 黄泉夜見「名」地下にありて、日月の光を見ざる暗き處なり。夜見の義にいてゐるなりとも、やみ(闇)の轉なりともいふ。古代の人の、死後魂の行くと考へし所。ねのくに。したつくに。よもつくに。よるのをすくに。黄泉。九泉。九原。冥土。「古語」黄泉葦原の瑞穂の國に家なみやまた歸り來(三)ぬ遠つ國よみの境に」
よみ 黄泉の坂「句」よもつひらさか(黄泉平坂)に同じ。「古語」其そのよみのさかに塞れりし石は」

よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」

よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」

よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」

よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」

よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」

よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」

よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」
よみ 讀「名」讀むこと。よみ(訓)に同じ。發聲合點「文字のよみをもて名の」

よみあや

よみあやまり 讀誤「名」讀みあやまること。よみそこなひ。

よみあやまる 讀誤る「動四他」誤りて讀む。よみそこなふ。よみちがふ。

よみいる 讀入る「動四自」心をこめて讀む。讀み耽れる。榮生、殿、いよいよ涙留めがたくて、讀みいりておはします」

よみいる 讀入る「動下二他」よみこむ「讀込む」に同じ。

よみうた 讀歌「名」古、樂府「名」に於て、節調を添へず、單に讀み上げしよりの名なるべしといふ。調など無くて、ただ讀むために作りたる歌。三、この二歌の終は讀歌なり」

よみうり 讀賣「名」奇事、異聞などを、摺物にして、讀みながら路上を賣りあるること、又その人。徳川時代には、唄、繪雙紙などもこの方法にて、賣り歩く者ありたり。緒綱御月紅葉「この身の果を讀賣に、誰」が節附けて、田舎まで唄ひ流さん蜷川」柳、讀賣は第一ぜんを分けて持ち」

よみうりうた 讀賣歌「名」讀賣のうたふ歌。萬代狂歌集序「聞いてこらへぬはやり歌、讀賣歌の上下を言はず」

よみかき 讀書「名」書物を讀み、文字を書くこと。學問。

よみかき 讀書算用は世渡「名」の三藝「句」書を讀むと字を書くと算數の道とは、生活に極めて必要な術なり。「諺語」

よみかく 讀掛く「動下二他」傍なる人に對し、歌をよみて、返歌を求む。「詠掛く」十訓小式部内侍、……直衣「句」の袖を控へて、大江山いく野の道の遠ければまだふかみも見ず天「句」の橋立とよみかけけり」

よみさす 太平記人の讀みかけて置きたる大般若」

よみかけ 讀掛「名」讀みかくること、又讀みかけであること。よみさし。

よみかた 讀方「名」その文字を適當に讀む筋道。よみやう。

よみかた 讀方「名」その文字を適當に讀む筋道。よみやう。

よみかた 讀方「名」その文字を適當に讀む筋道。よみやう。

よみかは

振「名」に同じ。四小學校にて、讀むことを主とする科目「書方」二級方「名」に對して

よみがはま 夜見濱「名」地「名」神代史の黄泉「名」は、この地なりと附會する説あり「伯耆國弓濱」の古稱

よみかへす 讀返す「動四他」繰り返して讀む。一旦讀みたる物を、更に讀む。

よみがへり 蘇、甦「名」よみがへること。又よみがへりたるもの。よみぢがへり。著聞「驗者」よりましなど据ゑて新る。……よみがへりの如くにて、十四五ばかりまでは生きてありし」諸國はなし「昔に變らず美女となりて……例なき蘇生ぞかし」

よみがへる 蘇る、甦る「動四自」黄泉「名」より還る義。死にて、再び生く。生きかへる。再生す。蘇生す。

よみがかる 讀骨牌「名」文字を讀みて取り合ふカルタ「櫻浦」花合「名」などとは區別して、特にいふ。世間半代氣「丁種四五人、狀箱の陰にて、讀がた打てゐて」

よみきかす 讀聞かす「動下二他」讀みよみきり 讀切「名」讀みきること。三小説、讀切などのその場のみにて完結せるもの。四「よみ」讀「見」よ「く」(句讀)に同じ。「讀點」に同じ。

よみきりてん 讀切點「名」くさてん(句讀)に同じ。

よみきりてん 讀切點「名」くさてん(句讀)に同じ。

よみきりてん 讀切點「名」くさてん(句讀)に同じ。

よみきりてん 讀切點「名」くさてん(句讀)に同じ。

よみきりてん 讀切點「名」くさてん(句讀)に同じ。

よみきりてん 讀切點「名」くさてん(句讀)に同じ。

よみきりてん 讀切點「名」くさてん(句讀)に同じ。

よみきりてん 讀切點「名」くさてん(句讀)に同じ。

よみこな

「四位上人、……讀口、世のおぼえ、人にすぐれて、新古今選者に加はり」歌の名。よみて。「古語」無名抄千載集に、わが歌一首入れり。させる重代にもあらず、讀口にもあらず」

よみこなす 讀みこなす「動四他」たやすく讀む。讀みこなすに讀む。たやすく詩歌に作り上ぐ。「詠みこなす」

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみこむ 讀込む「動四他」詩歌を讀むに、事物の名稱などを、その一部に入れて用ふ。よみこむ。

よみたつ

に、冊子の讀初とて、女子は文正草紙を讀みしとなり」

よみたつ 讀立つ「動下二他」よみあぐ「讀み」に同じ。

よみたむ 讀留む「動下二他」幾度も讀む。くりかへして讀む。「古語」今物語、滿座感歎して、この歌讀みためて」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

よみち 夜路「名」夜の道路、又それを行くこと。夜行。萬葉あまの原ふりさけ見れば白眞弓「名」張りて掛けたる夜路はよけむ」

その内の言葉を取り出づるに、讀みつきたる筋こそは強うは變らざるべけれ」
よみづつ 黄泉菰草「名」黄泉へのみやげ。「古語」菰草、よみづつとに侍らんずるなり」

よみづつ 黄泉鳥「名」(動)ぬえ(鶯)の異稱。「古語」鶯、鶯鳴時歌、よみつ鳥わが垣もとに鳴きつとり人皆聞きつ行きたまもあらじ」
よみて 讀手「名」文字を讀む役の人。(聞手に對して) 讀書力のすぐれたる人。 讀その詩歌の作者。よみびと。「詠手」 四詩歌の巧みなる作者。詩歌の名手。よみびと「詠手」

よみど 黄泉戸・黄泉門・泉門「名」黄泉への入口。幽界に通ずる門。「古語」 記「墓」にります黄泉戸の大神とも謂ふ。 記「泉門」大神、ヨミドニサヤリマスオホミカミ」

よみどく 讀解く「動四他」讀みて、意味を明かにす。よみひらく。
よみどる 讀取る「動四他」讀みて意味を解す。 假名手本忠臣蔵「字性」も讀思ひつきたる延鏡、出して、寫して讀取る文章」

よみながし 讀流「名」讀みながすこと。
よみながす 讀流す「動四他」滞る所なく讀み下す。 樂書皆如金色徒阿鼻獄といふわたりを、心ばそげに讀み流したまへる、言ひ知らず悲しきに」三日本記「いらぬ所はそこそこに讀み流したる奥書に」

よみならふ 讀習ふ「動四他」讀みて、馴るやうにす。 源氏「法文」などを讀みならひたまへば」
よみなる 讀馴る「動下二自」讀むことに馴る。よみつく。

よみにく 讀思し「形」 讀むに難し。 詩歌に作るに難し。「詠難し」
よみはな よみ花「名」よみがへりての花の義か「かへりな(返花)に同じ。 和泉式部集「よみ花の咲きたるを見て」

よみびと 讀人・詠人「名」よみて(讀手) 同じ。 源氏「題をも、讀人をもあらはし心えたるこそ、見所もありけれ」
讀人知らず「句」歌の撰集にて、作者の不明なるか、又は、それを明かに示しがたき事情ある場合に記す語。古今百和香 讀人知らず」平家勅勘の人名なれば、名字をば顯されず、「故郷花」といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、讀人知らずと入れられける」

よみひかす 讀響かす「動四他」大音に讀響す。 樂書、何くれの供奉など、四五人ゐて、讀みひかせば、そこに立ちとまりて聞きたてまつれば」
よみひらく 讀開く「動四他」よみどく(讀解く)に同じ。 百葉調和歌、新しき書を見るにも暗からじ讀みひらきぬる大和魂」
よみふだ 讀札「名」歌ガタルタの、讀み上ぐるに用ふる札(取札)に對して」
よみふり 讀振「名」その人の、讀むやうす。よみくせ。よみざま。よみやう。 日「その人の、歌を詠む趣。よみざま。よみやう」(詠振)

よみほん 讀本「名」 讀み習ふべき書籍。とくほん。 日「畫を見るよりも、讀むを主としたる故にいふ」江戸時代の小説の、草雙紙(草紙)に比して、挿畫を少くし、文章は漢字漢語を多く交へ、勸善懲惡主義を標榜せしもの。山東京傳曲亭馬琴の二人、その作者として、秀てたり。

よみの 讀物「名」 讀むべき物。書籍。 龍樂にて、仕手(し)の朗讀する文章。例へば、「安宅(か)」の曲に於ける勸進帳など。 日「寄席」にて、講談師の述べる題目。
よみや 夜宮宵宮「名」よみやまつり(夜宮まつり) 詠様讀様「名」よみかた(讀方)に同じ。 日「よみかた(讀方)」に同じ。

よみや 夜宮宵宮「名」よみやまつり(夜宮まつり) 詠様讀様「名」よみかた(讀方)に同じ。 日「よみかた(讀方)」に同じ。

よみや 夜宮宵宮「名」よみやまつり(夜宮まつり) 詠様讀様「名」よみかた(讀方)に同じ。 日「よみかた(讀方)」に同じ。

よみや 夜宮宵宮「名」よみやまつり(夜宮まつり) 詠様讀様「名」よみかた(讀方)に同じ。 日「よみかた(讀方)」に同じ。

よみや 夜宮宵宮「名」よみやまつり(夜宮まつり) 詠様讀様「名」よみかた(讀方)に同じ。 日「よみかた(讀方)」に同じ。

よみや 夜宮宵宮「名」よみやまつり(夜宮まつり) 詠様讀様「名」よみかた(讀方)に同じ。 日「よみかた(讀方)」に同じ。

よみや 夜宮宵宮「名」よみやまつり(夜宮まつり) 詠様讀様「名」よみかた(讀方)に同じ。 日「よみかた(讀方)」に同じ。

よみや 夜宮宵宮「名」よみやまつり(夜宮まつり) 詠様讀様「名」よみかた(讀方)に同じ。 日「よみかた(讀方)」に同じ。

よみやぶる 讀破る「動四他」破(は)は(讀破)の直譯。よみつくす。どくはす。よみのあか「養」と雪とを聚めて、萬巻の書を讀み破らんや」
よみやまつり 夜宮祭・宵宮祭「名」祭禮當日の前夜に行ふ小祭。よみやまつり。よみや。よみや。一代男明日は十九日、人の埃(は)をかづくも由なし、夜宮にといふ」
よみやまわり 夜宮参・宵宮参「名」夜宮に、その神社に参詣すること。

よみやむ 讀止む「動四他」よみどく(讀止す)に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。

よみやむ 讀止む「動四他」よみどく(讀止す)に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。

よみやむ 讀止む「動四他」よみどく(讀止す)に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。

よみやむ 讀止む「動四他」よみどく(讀止す)に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。

よみやむ 讀止む「動四他」よみどく(讀止す)に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。

よみやむ 讀止む「動四他」よみどく(讀止す)に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。

よみやむ 讀止む「動四他」よみどく(讀止す)に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。

よみやむ 讀止む「動四他」よみどく(讀止す)に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。 日「よみどく(讀止す)」に同じ。

よんに(副)善きに。よく。 鳥追(精)「よんに」に洗ふ。 日「總國の方言」よんにく「名」あやにく。あいにく。「下よんにやう」名「たぐさん(澤山)を云ふ。(肥前國肥後の國の方言)」
よんの おどど 夜御殿「句」夜(よ)の御殿(ど)の音便。「古語」 龍盤よんのおどどとは、東枕なり」
よん 昨夜「名」よべ(昨夜)の音便。土佐「よんべ」のうなぬもがなや、錢はん」 俳諧古歌附録「二十六夜(よ)やよんべあれ見えらせし」

よんや 感「名」よきに同じ。 八笑人よし、よし、さあ来い。あ、よいよい、よんやき」
よめ 嫁娘「名」むすこの妻。めこ。和名婦。子之妻爲婦、與女」 日「女子の、結婚したる當座の稱。新婦。」
嫁が姑「句」姑が嫁につらくするが世上普通の事なるに、嫁の方が意地悪く、姑が柔和なること。「詠語」 日「次條の略。(詠語)」
嫁が姑「句」に成上る「句」年月經過して人の老ゆること早き形容。「詠語」 日「嫁と姑」の仲の好いのも勿怪(な)々(の)内「句」嫁と姑とは、仲悪しきが世態なるにつきていふ語。「詠語」
嫁と姑「句」も七十五日「句」嫁と姑との間の平和なるは、結婚後暫くの間だけなり。「詠語」 日「嫁と姑は、慣るにつれて、疎かになり易き體」(詠語)
夜眼・遠眼「句」夜、しかも遠く離れて見ること。 假名手本忠臣蔵「由良之助釣燈籠の灯(あかり)を照し、讀む長文(ながぶん)は、御臺(ごだい)より……お經は、上より見おるせど、夜眼・遠眼なり、字性(しせい)も瞞(も)れ」
嫁の朝立「句」嫁の、その實家を慕ふ形容。「詠語」
嫁の取掛「句」猫の子の貫掛、嫁の取掛(か)を見よ。
嫁の涙ほど「句」姑の涙汁に同嫁の腹から孫が出る「句」憎憎(にく)の腹からいといとが出たに同じ。「詠語」

よんに(副)善きに。よく。 鳥追(精)「よんに」に洗ふ。 日「總國の方言」よんにく「名」あやにく。あいにく。「下よんにやう」名「たぐさん(澤山)を云ふ。(肥前國肥後の國の方言)」
よんの おどど 夜御殿「句」夜(よ)の御殿(ど)の音便。「古語」 龍盤よんのおどどとは、東枕なり」
よん 昨夜「名」よべ(昨夜)の音便。土佐「よんべ」のうなぬもがなや、錢はん」 俳諧古歌附録「二十六夜(よ)やよんべあれ見えらせし」

よんや 感「名」よきに同じ。 八笑人よし、よし、さあ来い。あ、よいよい、よんやき」
よめ 嫁娘「名」むすこの妻。めこ。和名婦。子之妻爲婦、與女」 日「女子の、結婚したる當座の稱。新婦。」
嫁が姑「句」姑が嫁につらくするが世上普通の事なるに、嫁の方が意地悪く、姑が柔和なること。「詠語」 日「次條の略。(詠語)」
嫁が姑「句」に成上る「句」年月經過して人の老ゆること早き形容。「詠語」 日「嫁と姑」の仲の好いのも勿怪(な)々(の)内「句」嫁と姑とは、仲悪しきが世態なるにつきていふ語。「詠語」
嫁と姑「句」も七十五日「句」嫁と姑との間の平和なるは、結婚後暫くの間だけなり。「詠語」 日「嫁と姑は、慣るにつれて、疎かになり易き體」(詠語)
夜眼・遠眼「句」夜、しかも遠く離れて見ること。 假名手本忠臣蔵「由良之助釣燈籠の灯(あかり)を照し、讀む長文(ながぶん)は、御臺(ごだい)より……お經は、上より見おるせど、夜眼・遠眼なり、字性(しせい)も瞞(も)れ」
嫁の朝立「句」嫁の、その實家を慕ふ形容。「詠語」
嫁の取掛「句」猫の子の貫掛、嫁の取掛(か)を見よ。
嫁の涙ほど「句」姑の涙汁に同嫁の腹から孫が出る「句」憎憎(にく)の腹からいといとが出たに同じ。「詠語」

よんに(副)善きに。よく。 鳥追(精)「よんに」に洗ふ。 日「總國の方言」よんにく「名」あやにく。あいにく。「下よんにやう」名「たぐさん(澤山)を云ふ。(肥前國肥後の國の方言)」
よんの おどど 夜御殿「句」夜(よ)の御殿(ど)の音便。「古語」 龍盤よんのおどどとは、東枕なり」
よん 昨夜「名」よべ(昨夜)の音便。土佐「よんべ」のうなぬもがなや、錢はん」 俳諧古歌附録「二十六夜(よ)やよんべあれ見えらせし」

よんや 感「名」よきに同じ。 八笑人よし、よし、さあ来い。あ、よいよい、よんやき」
よめ 嫁娘「名」むすこの妻。めこ。和名婦。子之妻爲婦、與女」 日「女子の、結婚したる當座の稱。新婦。」
嫁が姑「句」姑が嫁につらくするが世上普通の事なるに、嫁の方が意地悪く、姑が柔和なること。「詠語」 日「次條の略。(詠語)」
嫁が姑「句」に成上る「句」年月經過して人の老ゆること早き形容。「詠語」 日「嫁と姑」の仲の好いのも勿怪(な)々(の)内「句」嫁と姑とは、仲悪しきが世態なるにつきていふ語。「詠語」
嫁と姑「句」も七十五日「句」嫁と姑との間の平和なるは、結婚後暫くの間だけなり。「詠語」 日「嫁と姑は、慣るにつれて、疎かになり易き體」(詠語)
夜眼・遠眼「句」夜、しかも遠く離れて見ること。 假名手本忠臣蔵「由良之助釣燈籠の灯(あかり)を照し、讀む長文(ながぶん)は、御臺(ごだい)より……お經は、上より見おるせど、夜眼・遠眼なり、字性(しせい)も瞞(も)れ」
嫁の朝立「句」嫁の、その實家を慕ふ形容。「詠語」
嫁の取掛「句」猫の子の貫掛、嫁の取掛(か)を見よ。
嫁の涙ほど「句」姑の涙汁に同嫁の腹から孫が出る「句」憎憎(にく)の腹からいといとが出たに同じ。「詠語」

よんに(副)善きに。よく。 鳥追(精)「よんに」に洗ふ。 日「總國の方言」よんにく「名」あやにく。あいにく。「下よんにやう」名「たぐさん(澤山)を云ふ。(肥前國肥後の國の方言)」
よんの おどど 夜御殿「句」夜(よ)の御殿(ど)の音便。「古語」 龍盤よんのおどどとは、東枕なり」
よん 昨夜「名」よべ(昨夜)の音便。土佐「よんべ」のうなぬもがなや、錢はん」 俳諧古歌附録「二十六夜(よ)やよんべあれ見えらせし」

よんや 感「名」よきに同じ。 八笑人よし、よし、さあ来い。あ、よいよい、よんやき」
よめ 嫁娘「名」むすこの妻。めこ。和名婦。子之妻爲婦、與女」 日「女子の、結婚したる當座の稱。新婦。」
嫁が姑「句」姑が嫁につらくするが世上普通の事なるに、嫁の方が意地悪く、姑が柔和なること。「詠語」 日「次條の略。(詠語)」
嫁が姑「句」に成上る「句」年月經過して人の老ゆること早き形容。「詠語」 日「嫁と姑」の仲の好いのも勿怪(な)々(の)内「句」嫁と姑とは、仲悪しきが世態なるにつきていふ語。「詠語」
嫁と姑「句」も七十五日「句」嫁と姑との間の平和なるは、結婚後暫くの間だけなり。「詠語」 日「嫁と姑は、慣るにつれて、疎かになり易き體」(詠語)
夜眼・遠眼「句」夜、しかも遠く離れて見ること。 假名手本忠臣蔵「由良之助釣燈籠の灯(あかり)を照し、讀む長文(ながぶん)は、御臺(ごだい)より……お經は、上より見おるせど、夜眼・遠眼なり、字性(しせい)も瞞(も)れ」
嫁の朝立「句」嫁の、その實家を慕ふ形容。「詠語」
嫁の取掛「句」猫の子の貫掛、嫁の取掛(か)を見よ。
嫁の涙ほど「句」姑の涙汁に同嫁の腹から孫が出る「句」憎憎(にく)の腹からいといとが出たに同じ。「詠語」

よんに(副)善きに。よく。 鳥追(精)「よんに」に洗ふ。 日「總國の方言」よんにく「名」あやにく。あいにく。「下よんにやう」名「たぐさん(澤山)を云ふ。(肥前國肥後の國の方言)」
よんの おどど 夜御殿「句」夜(よ)の御殿(ど)の音便。「古語」 龍盤よんのおどどとは、東枕なり」
よん 昨夜「名」よべ(昨夜)の音便。土佐「よんべ」のうなぬもがなや、錢はん」 俳諧古歌附録「二十六夜(よ)やよんべあれ見えらせし」

よめ

嫁は門から貰へ「句」次條に同じ。
 嫁は下から「句」嫁は、已よりも、地位
 財産の劣りし家より貰ふがよし。「諺
 語」

嫁は臺所から「句」前條に同じ。「諺
 語」

嫁は庭から貰へ「句」前條に同じ。
 「諺語」

嫁は敷から取れ「句」前條に同じ。
 「諺語」

よめ 夜目・夜眼「名」夜見ること。夜
 見る目。やがん。桑若御使の祿、夜目に
 もけぞやかに見ゆ。太馬川狩や夜目に
 もそれと長がたな。馬の脚の、毛色に
 白き部分あるもの。和名「夜眼、與米」

よめ 夜女「名」夜目の義にて、夜、既り
 てある間の意なりといふ。「古語」祝詞
 「夜女のいすき、いつしき事なこと」

よめ 善目・好目「名」容貌、美しきこと。
 藤原歌「少しよめなる女房の、びかしやか
 ぶるは、科」ならず」

よめ 四目「名」次條を見よ。
 四目十目「句」「夜目」遠目、傘の
 内」といふ語あるより言ひ出せるもの

よめ 結婚する男女の年齢が、一方が他方の
 四年目又は十年目に當る場合、即ち三
 歳又は九歳の差ある場合を、不嫁の基
 なりとして忌み避くる迷信。四悪の、
 十惡。

よめ あたり 嫁當「名」姑「名」などの、嫁
 に対する感情。東海道名所記嫁あたりのつ
 らき姑「名」あり

よめ あつかひ 嫁扱「名」姑「名」の、嫁に
 對する取扱。屋敷御嫁あつかひの程、い
 とをかしくなん見えさせたまひける」

よめあは

よめ あはせ 嫁合「名」よめぐらへ「嫁比」に
 同じ。御伽草紙「あはせ」とかく過ぎゆく
 程に、嫁合の日にもなりぬれば」

よめ い 餘命「名」残れるいのち。殘年。
 餘生。殘年。殘年。

よめ いり 嫁入「名」嫁となりて、夫の家
 に入ること、又その儀式。よめり。おむ
 かさり。むかさる。嫁娶。

よめ いりご 嫁入子「名」こひびと。情
 人。「常陸國の方言」諺筑波根の會に、
 嫁入子を得ぬ者は、兒女にあらず」

よめ いりごてん 嫁入御殿「名」嫁入の
 時に、その式場に充つる御殿。伊勢會館山
 「あの部屋を、嫁入御殿になぞらへ」

よめ いりざい 嫁入財「名」よめりの
 仕度料。筑波根の會に嫁入財を得ぬ
 ものは」

よめ いりざかり 嫁入盛「名」最も適せ
 る嫁入の時機。女の年頃。

よめ いりだう 嫁入道具「名」女子の、
 嫁入する時、持參する諸道具。

よめ いりどき 嫁入時「名」嫁入に適せ
 る年配。嫁期。

よめ いりながもち 嫁入長持「名」嫁入
 道具なる長持。若菜盆嫁入長持葛籠
 「名」

よめ いりぶる 嫁入風呂「名」嫁入する
 女子を入浴せしむる風呂。福丸堀川に、
 嫁入風呂と云ふがありしなり。嫁入する
 娘をとめて入らせたり」

よめ いりまへ 嫁入前「名」嫁入する前。
 よめいりまへ 嫁入娘「名」嫁入時に
 達しある娘。

よめ いる 嫁入る「動四自」嫁にゆく。嫁
 の模範とするに足る程の嫁。艶姿女舞女
 「こんな嫁が、尋ねたとて、最一人とあ
 るものぢやない。世間の人の嫁鏡」

よめ かがみ 嫁鏡嫁鑑「名」世上一般の
 嫁の模範とするに足る程の嫁。艶姿女舞女
 「こんな嫁が、尋ねたとて、最一人とあ
 るものぢやない。世間の人の嫁鏡」

よめ かがり 嫁掛「名」嫁を力にして、生
 命を支ふこと。續編御月の紅葉「亭主に
 放るる、子は養子なり、嫁がかり」

よめ がきみ 嫁君「名」「動」ねさみ「風」の

よめがき

異稱。よめのこ。「江戸時代に於いて、新
 年三箇日間の諺」芭蕉餅花やかざしに
 挿せる嫁が君」

よめ がさる 嫁皿「名」「動」すめがひ
 「雀」に同じ。目「植」さつげ「大黃湯」
 に同じ。目「植」さつる「合子草」に同じ。

よめ がはぎ 嫁萩「名」「植」よめな「嫁菜」
 に同じ。佛蘭士選道歌「中よかれ路」の
 姑「名」嫁が萩」

よめ がはし 嫁箸「名」「植」はこねさう「箱
 根草」を云ふ。「甲斐國の方言」

よめ がひ 嫁貝「名」「動」あさひひ「朝日
 貝」に同じ。

よめ ささき 嫁后「名」ささき「后」に同じ。
 持精天皇故事「まづ御嫁后を定めおき、そ
 の後、世嗣の太子、御沙汰あるべし」

よめ くらへ 嫁比「名」嫁と嫁との容貌、
 伎倆などの優劣を比ぶること。よめあは
 せ。御伽草子「あはせ」「公道」の嫁くら
 べをしたまひて御覽候へ」

よめ ぐり 夜廻「名」よめはり夜廻に同
 じ。雲馬馬に乗りて來つ、弓弦打「名」
 をしつ、夜めぐりするやうになんは
 べる」

よめ 嫁子「名」よめ「嫁」に同じ。一代女
 「近年は、人の嫁子もおとなしからずし
 て、遊女、かき者のなりさまを移し」

よめ 嫁御「名」よめ「嫁」の敬稱。
 嫁御十年「名」女の、結婚後、若く見ゆ
 るは、十年程の間にて、その後は、世帯や
 つれのため見おとりす。「諺語」

よめ 嫁御前「名」よめ「嫁御」に同
 じ。よめごれ 嫁御寮「名」前條に同じ。妹
 雲山婦女庭訓「一代一度の祝言に、賀殿の無
 紋の上下」首ばかりの嫁御寮に對面
 せうとは知らなんだ」

よめ さら 嫁皿貝「名」「動」よめささ
 ら「嫁皿」に同じ。

よめ ぞり 嫁排「名」姑「名」が、他人に
 向ひて、自家の嫁を、惡しざまに言ふこ
 と。諺談義の場の嫁排」

よめ そり 嫁排堤「名」「地」河
 内國志紀郡にある堤の俗稱。

よめた

よめ たたき 嫁叩「名」嫁の腰を叩くも
 のなるによりていふ「かゆつゝ（粥杖）に
 同じ。

よめ ちよ 嫁女「名」よめ「嫁」に同じ。
 日蓮上人法華經「嫁女、堪忍して下され」

よめ つき 嫁突「名」よめはよみの轉訛に
 て、數ふる義かといふ。或は又、數ふる詞
 の「四」めごに依りていふか「羽子を
 突く」に「（ご）ごに二つ、三つ、わた
 し四」めごなど數へつること。

よめ どり 嫁子「名」よめ「嫁」の音便。
 伊勢萬昌嫁子を貰て、親を結構に過す
 時分だあ」

よめ どり 嫁取「名」妻を迎へ取ること、
 又その儀式。よめむかへ。御城反城奪嫁
 取の嫁の手道具、御厨子「名」鏡臺うちみ
 だれ箱」

よめ どり 嫁取奉行「名」武家
 の職制の一。鎌倉將軍の婚儀を管掌せし
 も。

よめ な 嫁菜雞兒腸「名」「植」菊科に屬
 する多年生の草。莖を出して、一二尺ほ
 どに生長し、失れ
 る長楕圓形にて、
 少數の大鋸齒
 を具へたる葉
 を著け、秋、花
 を開く。花は頭狀花序
 をなし、周圍には青紫色
 の舌狀花、中部には黄色の筒狀花排列し、
 冠毛なし。多く田家に生ず。春、その嫩葉
 を取りて食ふ。おはき。うはき。

よめ のがひ 嫁合子「名」ざんぐり「圓
 栗」を云ふ。「上野國の方言」

よめ のこ 嫁子「名」「動」ねさみ「風」の
 異稱。定額集「嫁の子の連」の玉をくひ
 つるは罪失はんとや思ふらん」

よめ のごき 嫁御器「名」「植」ささ
 ら「合子草」に同じ。目「ひめうり（姫瓜）」に
 同じ。

よめ のさい 嫁菜「名」「植」わらび「藤」
 を云ふ。「伊勢國の方言」「鏡」に同じ。

よめ のさら 嫁皿「名」「植」いはがみ「岩



(な め よ)

よめ「たま」嫁玉「名」伊勢國より産する眞珠をいふ。「志摩國の方言」

よめ「わん」嫁枕「名」植こきつる(合子草)に同じ。

よめ「びど」嫁人「名」よめ(嫁)に同じ。

よめ「びろめ」嫁廣・嫁披露目「名」嫁を、知人たちに紹介すること。曾我五人兄弟「嫁びろめの習に、衣裳を飾る」。

よめ「ぶくろ」嫁袋「名」植あつむりさち(敦盛草)に同じ。

よめ「ふり」嫁振「名」植「やまならし」山なよめ「ぼし」嫁星「名」たなばたつめ(棚機津女)に同じ。(賀星に對して)「若嫁星の御顔を隠す模かな」。

よめ「むかへ」嫁迎「名」よめさり(嫁取)によめ「むすめ」嫁娘「名」嫁なる娘。川中島合戦「嫁娘途方にくれて泣き叫び」。

よめ「り」嫁入「名」よめいり(嫁入)の略。小町踊「たとへば夜叉がよめりに今日春」。

よめ「りごと」嫁入事「名」よめいり(嫁入)に同じ。嫁入の眞似をして遊ぶこと。傾城反魂香「嫁入(り)ごとせし戯も、今は誠と嬉しげに」。

よめ「りごろう」嫁入御寮「名」よめごろう(嫁御寮)に同じ。平家女護島「よめり御寮は首ばかり」。

よめ「りづき」嫁入月「名」一年中にて、嫁入に適する月。傾城反魂香「花の三月はや過ぎて、長持に桐の葉茂るよめり月」。

よめ「りふね」嫁入船「名」嫁入する時に乗る船。大織冠雪の春日(か)の神風や唐土(き)指して嫁入船」。

よめ「る」嫁入「動四自」よめいる(嫁入)の略。世間雜言「何不不足ないやうにしてよめらしたに」。

よめ「四方」名「四面」の略。東西南北。しはう。周圍の諸方面。めぐり。源氏「四方の梢、そこはかとなう烟りわたれる程」。

よめ「の海」名「しかい(四海)に同じ。月通よもの海波を一つにすむ月の影か。たぶかぬ君が御代かな」。

四方の草木「句」國內諸地方の民草。國民。續後撰歌「おくその言の葉をしるべにて四方の草木の心をぞ分く」。

四方の春「句」周圍に満ち渡れる春色。俳諧古遠集「四方の春ねらりくりにて道るぢや名」。

四方の恵「名」國內諸方面に行きわたる恩恵。新千載「漏さじなわが神垣のしめ繩延(へ)ても餘る四方の恵は」。

よめ「四方」名「江戸日本橋新和泉」町にありし酒屋。支店・分店は、その他の諸所もありたり。太田蜀山人、號を四方赤良(あか)と唱へて、この家の扇巴の紋をさへ用ひしより、この家の赤味、殊に名高くなれり。寛文見聞録「新和泉町に、玄屋店(り)といふ大裏あり。ここに、役者・芝居者、多く住す。即ち、四方といふ酒屋の本家の裏なり」。

よめ「副」どうしても、とても。まさか、よめ「下」に打消の推量の語句を伴なふ。源氏物語「は、よめ、さやうにはすゑたまはじを」。

よめ「艾」名「種」菊科に屬する多年生の草。莖は、高さ四五尺に至る。葉は互生し、長卵形にして、羽狀に分裂し、各裂片は尖り、表面は緑にして背面には、灰白色の毛茸寄生す。秋、黄色小形の頭狀花、多數相集まりて、圓錐花序をなす。

(き) (よ)

して開く。山野に自生し、成熟せる葉は艾(き)に製し、その裏面の毛茸は、印肉を作るべく、又、嫩葉は、餅に和し、草餅として食ふべし。よむぎ。もちぐさ。やいぐさ。えもぎ。萬葉「あやめ草よもぎかづらき酒(さ)みづき遊び和(れ)ぐれど」。

艾の跡「名」灸をすゑたる跡。「古語」。

陰信集「例ならぬ事ありて、やいとなどしけるほどに、また、この女も、艾(き)食ふ由を聞きて、言ひやりし。朝露のひるまはいつぞ秋風によもぎの跡も思ひ亂れぬ」。

艾の關「句」關を設くるを「關を据う」といふ、灸にも「灸をすう」といふによりていふ「きう(灸)」の異稱。夫木身につもる風の通路(みち)たつねずば艾の關をいかですゑまし」。

よめ「蓬」名「種」やまよぎ(山蓬)に同じ。葉(き)の色目の一。萌黄色にて、表は一層濃きもの。一説には、表は白、裏は青なりと。五月に用ふ。

蓬が門「句」蓬の門に同じ。源氏「いつのまに蓬が門と結ばれ雪ふる里と荒れし垣根ぞ」。

蓬が島「句」蓬の島に同じ。月清「四方の海久しくする春にあひて蓬が島の宿も思はじ」。

蓬が柳「句」蓬の生ひしげりたる所。月清「この暮におこすべかりし人は来て蓬が柳に秋風ぞ吹く」。

蓬が庭「句」蓬の生ひしげりて、荒れたる庭。新後撰「わればかりなほふるさとに残りて蓬が庭の月を見るかな」。

蓬が園「句」蓬の宿の園。夫木「露しげき蓬が園のひまとちて古き枕に秋風ぞ吹く」。

蓬が洞「句」蓬の生ひしげりたる所。月清「この暮におこすべかりし人は来て蓬が洞に秋風ぞ吹く」。

蓬が宿「句」蓬の宿に同じ。源氏「影消き蓬が洞の秋の月霜を照らさば捨てずもあらなん」。

蓬が宿「句」蓬の宿に同じ。源氏「とて横む蓬が宿に秋來てはきりぎりすこそ共に鳴きけれ」。

蓬に交る麻「句」麻の中の蓬を反對にいへる語。和名「今にはや蓬にまじるあさはかにもと生き心とも見ん」。

蓬の垣「句」蓬など生ひしげりて、荒れたる垣。夫木「茂かりし蓬の垣のへだてにもさはらぬものは冬にざりける」。

蓬の門「句」蓬など生ひしげりて、荒れたる門。和名「蓬門」。

夫木世にあらば行きかふ人もいかにかり蓬の門に市をなさまし」。

蓬の髪「句」蓬の髪(蓬髪)の直譯。新六「いかにせん蓬の髪(の)秋の霜身のいたづらに落(り)まらじつ」。

蓬の島「句」蓬の島に同じ。源氏「夫木、誠にや蓬の島に迫らん鶴に乗るてふ人に問はばや」。

蓬の住家「句」蓬の宿に同じ。源氏「深き蓬のすみかを見すべき人も無ければ」。

蓬の籠「句」蓬など生ひしげりて、荒れたるまがき。蓬の宿のまがき。

蓬の窓「句」蓬の宿の窓。山崎「音はして岩にたはしる霞こそ蓬の窓の友となりけれ」。

蓬の丸寝「句」蓬の宿のまる寝。源氏「斯かる蓬のまる寝に習ひたまはぬ心地に」。

蓬の矢「句」蓬の宿の矢。平家「御座平安、皇子御誕生……、桑の弓、蓬の矢を以て、天地四方を射させらる」。

蓬の宿「句」蓬など生ひしげりて荒れたる宿。蓬が宿。蓬のすみか。蓬生(り)の宿(り)の宿。源氏「蓬生(り)の宿に玉敷ける庭に移らふ菊の花もとの蓬の宿な忘れそ」。

蓬、麻中に生ずれば、扶けずして直し、不扶而直」とあり「麻の中の蓬」に同じ。「諺語」。

よめ「がみ」蓬髪「名」蓬の髪に同じ。佛蘭古遠集「磨針や涼しくも散るよもぎ髪」。

よめ「ぎきう」艾灸「名」艾の葉にて製したる灸。蓬汁「名」實(き)として、豆腐などの外、切り刻みたる蓬の葉を入れたる味噌汁。

よめ「ぎづつみ」蓬包「名」端午の節句に、蓬を包む時の紙の折様。

よめ「ぎふ」蓬生「名」荒れて、蓬などの生ひしげりたる所。源氏「年頃の蓬生のかれなんも、さすがに心細う」。

蓬生の宿「句」蓬の宿に同じ。夫木「鳥の音も花のかをりも春ながら眺めをるるりらよゆやもめんむまほへふひはのねぬなとてつちたせせすしきこけくきか、おえういあ



(き) (よ)

「郡代代幡」の大字。角筈の西に接し、甲州街道に當り、南は目黒の駒場に續く。官幣大社明治神宮及び陸軍練兵場あり、又、東京山手(六)線の停車場あり。よき四十四(一)「文」連歌俳諧にて、四十四句を一聯とするもの。續俳諧寄人談(和)「わが年も四十四の花の擧句」かな」

よはた代代幡「名」「地」武蔵國豊多摩(分)郡にある村。代代木(分)幡ヶ谷(分)の二村を合して新たに立てたるもの。

よむ「動四自」「感嘆詞のよに語尾の添ひたる語」老人の、齒抜け落ちて、物言ふ聲、確かならず。「古語」百歳に老舌(分)出てよむとわれはいとはじ戀は増すとも」よばよばとす。「古語」字彙倚、ヨム」

よら「夜ら」「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

よらく餘樂「名」有り餘るほどの快樂。大原則答書「上品」上生(分)に往生し、むしゆの餘樂を享くるなり」

よらく與樂「名」神佛などの、人に快樂を授け與ふこと。「拔苦(分)樂與」參照。太平記除災・與樂の御祈」

よらはる「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

よる「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

よる「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「助數」「よりよりを見よ」たび。度(下)同。「古語」伊勢大輔集「訪ふ人もさなき山里の村しぐれ」よりより三より驚かすかな」夫木暮れぬとて初鳥屋出(分)のはしだかを「よりより」か合はせざるべき」

より「副」「次條を、西洋語の副詞・形容詞の比較級なる場合の直譯語として用ひたるもの。國語の純粹を保たんとする者は、斥けて用ひず」更に、一層、比較的「より多くの場合」

より「助」「事物の、時間的・空間的に移りゆく起點を示す語。よ。ゆり。ゆ。から。「自・從」「東京より横濱まで」「五時より開會す」由來する所を示す語。に因りて、萬葉、遠つ人松浦佐用姫(分)つまどひに領巾(分)振りしより負へる山の名」人の進み行くにつきての手段の種類を示す語。を用ひて。にて。「從」萬葉人づまの馬より行くに己(分)づまが徒歩(分)より行けば」四移動の基準點を示す語。を。竹馬あり行くよりだにな歩(分)き」源氏前より行く水、初瀬川といふなりけり」比較する基準の事物を示す語。よりか。よりも。に比して「金は銀より貴し」區別する基準の事物を示す語。金銀もろ共にあはれと思へ山櫻花より外に知る人も無し」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

より「名」は接尾語「よ(夜)に同じ。「古語」萬葉ゆくらゆくらに思ひつつわが寢(る)夜らを」

よ

より

より

より

よりい

よりいど 綵絲撻絲撻絲「名」綵を施したる絲。片綵絲と諸綵絲とあり。各條を見よ。

よりう 餘流「名」本流より分れたるなされ。餘水のなされ。えだななれ。支流。よりうど 寄人「名」寄人「名」の音便。

よりうど 寄人「名」和歌の選定を掌りしもの。めしうど。よりひと。應信集和歌所の寄人「名」記録所の主典。古法に通ずる者、これに補し、執筆の職を執りたり。百練抄、始置三記録所、庄園券契所、寄人等。鎌倉室町兩幕府の職制の。政所、問注所、侍所に屬し、執事の下位に立ちて、評定の時、雜務、執筆を掌りしもの。東鑑、攝部允藤原行光加三政所寄人。

よりおや 寄親「名」身を寄する親方の義。奉公人の身元引受人、又は頭。寄子「名」に對して。甲陽軍鑑主又は寄親を、さやうに惡口申す。劇場にて、覺師の親方。いたもと。配下の覺師を板人「名」といふ。

よりか 助「名」より國に同じ。「僅語」よりか 倚懸「名」倚りかかること。室内にて、脇を懸けて倚りかかる具。中古のは、形、手箱の如くにて、蓋を設け、その上に鳥の羽を入れ、上に綵を張り、中には、手道具を入るやうにし、近古には、脇息の別稱となれり。黒髭抄「紫櫛のよりかかり」。目船の外櫛の櫛の上櫛の、高く上りて、椅子の如くなる部分。えりかかり。

よりか 倚懸臺「名」産婦の出産の時、倚りかかる臺。本棚「不孝」産屋の倚懸臺、大枕。

よりか 倚懸臺「名」産婦の出産の時、倚りかかる臺。本棚「不孝」産屋の倚懸臺、大枕。

よりか 倚懸臺「名」産婦の出産の時、倚りかかる臺。本棚「不孝」産屋の倚懸臺、大枕。

よりか 倚懸臺「名」産婦の出産の時、倚りかかる臺。本棚「不孝」産屋の倚懸臺、大枕。

よりか 倚懸臺「名」産婦の出産の時、倚りかかる臺。本棚「不孝」産屋の倚懸臺、大枕。

よりか 倚懸臺「名」産婦の出産の時、倚りかかる臺。本棚「不孝」産屋の倚懸臺、大枕。

よりか 倚懸臺「名」産婦の出産の時、倚りかかる臺。本棚「不孝」産屋の倚懸臺、大枕。

よりか 倚懸臺「名」産婦の出産の時、倚りかかる臺。本棚「不孝」産屋の倚懸臺、大枕。

よりか

他二 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりか 綵りてからめ合はす。綵る。古今「淺みどり」綵りかけて白露を玉にも貫ける春の柳か。綵ることを中途まで爲す。

よりき

住める町。續七部集、與力町より向ふ秋風。よりきま 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりき 與力窓「名」江戸時代に、武家屋敷の長屋の、道路に面せる方に設けたる窓。いはくまど。

よりし

同じ。「それよりして後は」よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりしま 寄綿「名」よろけしま「端綿」の類か。五人五帯は、唐綾。寄島の大輦、前に結び。

よりたふし 寄倒「名」相撲云々にて、四手云々に取り組みて、相手を土俵際まで追ひ込みたる上、押し倒すこと。
より「から」 選枯 擇枯「名」よりからし(選枯の音便)。

より「き」 寄附「名」寄附り附くこと。

「庭園中に設くる、簡單なる休息所」
「商」取引所の、その日の立會(立會)の最初の手合(手合)。
「商」次條の略。

より「き」さうは 寄附相場「名」(商)取引所にて、寄附に出来たる値段。前日の最後の大引(大引)値段を題に出して定む。よりつきねだん。よりつき。よりね。(接續相場大引に對して)「條に同じ」。

よりつきねだん 寄附値段「名」(商)前よりつき 寄附く「動四自」そばへ寄る。よりそふ。よつづく。日たよりて近づく。身を寄す。よりする。字音年頃ありける所をも、その事となくあぐがれて、寄り附く所もなかりけるままに、泣く泣く親音を怨み申して「日」(商)寄附相場が成り立つ。

より「つ」な 繕綱・撚綱・撚綱「名」繕りあはせたる綱。夫木浮橋に竹の繕綱うちへて小舟並ぶるふじの川浪」。

より「づる」 寄弦「名」巫女(女)が、口寄の時の梓の弦を鳴らして、神降(神降)をする。

より「て」 因りて・依りて・仍りて「接」それによりて。それがために。それゆゑに。よつて。よて。千載傳教大師は、わが立つ柳の言葉を残せり。よりて、世世の帝も、この道をば捨てたまはざるをや」。「じ」。

より「と」を 饑「名」(動)さより(饑)に同より「と」を 寄所「名」寄りつく所。縁(縁)りする處。たよる事物。よるべ。源氏「事とある時は、よりどころなく、心ほそげなり」。「も」とづく所。本據。根據。證據。「據」。

より「とも」 頼朝「名」(人)みなもとより(源頼朝の頭(句)「きよなり」(巨頭公)を見よ)圓く且つ大なる物の譬。

より「どり」 選取・擇取「名」えりどり(選取)に同じ。

選取・見取「句」好む物を、勝手に選びよりどり 選取る・擇取る「動四他」えりさる(選取る)に同じ。

より「なげ」 寄投「名」相撲云々にて、上手(上手)の下手(下手)を引きて寄り進み、相手の踏み堪へたるを機會に投ぐること。

より「にんきやう」 寄人形「名」寄人(寄人)に代へて用ふる人形。事終れば、川に流す。釋迦如來誕生、摩耶夫人(摩耶)調伏の寄人形」。

より「ぬき」 選抜・擇抜「名」えりぬき(選抜)よりぬく 選抜く・擇抜く「動四他」えりぬく(選抜)に同じ。

より「ね」 寄値「名」(商)よりつきねだん(寄附値段)の略。

より「のこし」 選殘・擇殘「名」より殘すこと、又、より殘したる物。よりからし。

より「のこす」 選殘す・擇殘す「動四他」選取りて、善からぬ物を殘す。

より「のこり」 選殘・擇殘「名」より殘すこと、又、より殘したるもの。

より「のこる」 選殘る・擇殘る「動四自」選取りたる後に、善からぬ物殘る。

より「のぶ」 頼信「名」(人)みなもとよりの(源頼信)を見よ。

より「は」 寄羽「名」雨などに濡れて、寄り合ひする羽。夫木歸るさの袖濡らすらし鶴の寄羽にかかるとの川波」。

より「は」 寄場・寄場「名」(人)の寄りあつまる場所。日まよ(寄場)に同じ。日こめい(米市)に同じ。江月時代の語。大阪繁昌詩「堂島(堂島)……、開米市于此焉……、所市稱寄場」。

より「びと」 寄人「名」よりうさ(寄人)に同じ。夫木、梨雲の昔の跡に立ち返りわかの浦にぞ浪のより人。日神靈の遷る人の義。よりき參照「古蹟者」が、死靈(死靈)又は生靈(生靈)を祈る時、その靈に代るものとして、その場に居らせ、祈りつけて、降參せしめし童子。よりこ。ものつき。よりまし。「遷人・遷子」。

より「ふす」 寄臥す・倚臥す「動四自」物に寄りかかりて臥す。そひふす。源氏「無禮(無禮)の罪はゆるされなやとて、よりふしたまへり」。「國の方言」。

より「ふり」 寄船「名」風波に漂ひて、海岸に寄り來れる船。東鑑「海路往反船、或漂倒或遭難風、自然被吹寄之處、所地頭等號寄船、無左右之抑取之由」。

より「ぼう」 寄棒「名」召し捕らんとする者の持てる刃物を拂ひ落し、又は、これを叩き伏せなどするに用ふる棒。寄道具(寄道具)の。百日(百日)突いたる寄棒押取つて、つづけ打に、時宗を、ちやうちやうと打ちたけける」。

より「まい」 選米「名」良質の米。大阪繁昌詩「堂島(堂島)……、米有稱建物(建物)者上……、有稱二撰米者上(指二良米)者上……、有稱三撰米者上(指三良米)者上」。

より「まさ」 頼政「名」(人)みなもとより(源頼政)を見よ。日諸曲の。一源三位頼政、高倉宮と共に、平家を討たんとせし謀あらはれて、遂に宇治橋の合戦に討死する事を作れるもの。古名、源三位。

より「まさき」 撚柱木「名」まさきふた(柱木雙子)を見よ。

より「まし」 憑子・神子・寄呪「名」神靈の憑(憑)り坐(坐)す者の義。よりびと(寄人)に同じ。著聞「験者(験者)よりましなどすゑて祈るに、物、多く附きたり」平家斯かる御惱(御惱)の折節に合はせて、こはき御物怪(御物怪)どもも取り入奉る。よりまし、明王(明王)の縛(縛)に掛けて、靈(靈)の顯れたり」。

より「みち」 寄路「名」口的地に到る間に、或所に立ち寄ること。みちより。

より「みつ」 頼光「名」(人)みなもとより(源頼光)を見よ。頼光の四天王(句)「人」源頼光の臣下にて、渡邊綱・坂田金時(金時)・十部(十部)・季武・碓井(碓井)貞光の四人。

より「みつ」 算木「名」算木(算木)に似たる形にひねりたる糝粉餅(糝粉餅)。

より「んばう」 名「竹の皮草履の一種。麻繩を、相撲取草(相撲取草)の穂にて巻きて、緒とせるもの」。

より「め」 繕目・撚目・撚目「名」繕りたる箇處。新勘撰「六つの緒の繕目ごとにぞ香」。

より「も」 寄藻「名」岸に流れ寄りたる藻。萬葉集「これは、磯邊によりも振く海士」。

より「も」 助「名」より國に同じ。日一つの動作に引き續きて、他の動作を爲す意。云云するや否や。八笑人「そりや身投だといふよりも、我も我もと消き寄せる」。

より「も」 寄戻「名」相撲云々にて、競り合ひて、四手(四手)に渡り、土俵際まで追ひ込まれて残り、同時に後へ切りて取るもの。

より「も」 寄戻「名」相撲云々にて、競り合ひて、手先にて競り合ひ、相手の腕に答をかひ、片手に牽手を抱へて、土俵際まで寄り詰め、相手の踏み堪へて寄り戻さんとするを機會に、相手の力を利用して、引き戻しながら捨てること。

より「も」 撚元結・撚元結・撚元結「名」繕りたる元結。華女五枚羽子板「小枕捨てて、丈長(丈長)も、捨(捨)元結に大響(大響)」。

より「や」 寄合「名」よりあひ(寄合)の訛。よりやふ 寄合ふ「動四自」よりあふ(寄合ふ)の訛。

より「よく」 餘力「名」餘りたるちから。よりよく 時時「副」より、助數詞よりに同じ。ときどき。をりをりを。たびたび。紀「時時、ヨリヨリ」。

より「より」 時時に「副」前條に同じ。「古語」古今「すぐれたる人も、吳竹の代代に開え、片絲のよりよりに絶えずぞありける」。

より「わく」 選分く・擇分く「動下二他」えりわく(選分)に同じ。

より「わけ」 選分・擇分「名」えりわけ(選分)に同じ。

より「ぬ」 寄居「名」(地)武藏國大里郡にある町。荒川の岸に位し、秩父の峽谷への

よりたふし

よりふす

よりんば

よる

門戸を爲す。
よりゝる 寄居る、倚居る【動上・自】物

に寄り添ひて坐る。増城山の端近く傾
きぬる日影かな……とて、寄りゐたるけ
しき、何となくなまめかしく。
よる 夜【名】(夜)に同じ。萬葉思ひつ
つ居れば苦しめば玉のよにしたらば我
こそ行かめ」

夜打つ礫【句】「闇」の礫に同じ。
夜語らず【句】『河海抄』に「孫真人云夜
夢不須説とあり」夜は、夢語を思ひ。

「謬語」源氏か夢は、思ひ合はせて
なん聞ゆべき。夜語らずとか、女ばら
の傳にいふことなり」
夜には耳あり【句】「晝には目あり、
夜には耳あり」を見よ。

夜の雨の窓を打つ聲【句】「白居易
の上陽人と題する詩に「蕭蕭雨打窓
聲」とあるに本づく」孤獨の寂しさを
形容するに用ふる語。太平記蕭蕭たる
暗雨(ふく)の窓を打つ聲、物ごと、皆、
御泪を添ふる(な)となれり」

夜の御殿【句】「清涼殿の内の、天皇
の御寢所。日の御座(み)の北に並びた
る二間(ふた)四方の一室をこれに充てら
れたり。よんのおとど。よるのおまし。
「日の御座」に對して「古語」源氏よ
るのおとどに入らせたまひても、まど
ろまされたまふこと難し」貴顯の御
寢所。太平記大塔宮二品親王……、竹
原八郎入道が息女を、夜のおとどへ召
されて御おぼえ、他に異なり」

夜の御座【句】「前條」に同じ。伊勢
「御子喜びたまひて、よるのおましの設
せさせたまふ」貴人の夜具。
夜の衣【句】「夜寝ぬる時に著る衣。ね
まき。寢衣。源氏かへさんといふにつけ
ても片敷のよるの衣を思ひこそ遣れ」
夜の衣を反す【句】寢衣を裏がへす。
(古)斯くする時は、戀しき人を、夢に見
ることを得といふ俗説ありたり。古今
「いとせめて戀しき時はうば玉のよる
の衣をかへしてぞ著る」

よる

夜の駒は八分目【句】「晝九、夜八、船
六」を見よ。【諺語】
夜の調【句】「音」せればあに同じ。
夜の道具【句】「やぐ夜具」に同じ。「代
女」御寢室近く、夜の道具の上下(ひざ)に
ばかりに召し抱へられたし」

夜の契【句】葛城(み)の神が、初、橋を
架くる人夫に雇はれたまひし時、形の
醜きを恥ぢて、夜中のみ出でて働きた
りといふ故事。かつらぎ葛城(み)參照。
諸曲定家「葛の葉の葛城の神姿、恥かし
や、よしなや、夜の契の夢の内に」と
夜の鶴【句】「焼野(や)の雄子(こ)」夜
の鶴を見よ。増城和歌の浦に八十ち
あまりの夜の鶴子を思ふ聲のなか聞
えぬ」

夜の殿【句】「動」きつね狐【句】を云ふ。
(夜間のいふ)。【關西の方言】
夜の錦【句】「錦を衣て夜行く」に同じ。
古今「見る人もななくて散りぬる奥山の紅
葉は夜の錦なりけり」
夜の人【句】「動」きつね狐【句】を云ふ。
「西國の方言」

夜の物【句】「夜の道具」に同じ。伊
勢「友たち、これを見て、いとあはれと
思ひて、よるの物まで贈りて」【動】
ねま(鼠)を云ふ。【越後國の方言】
夜の食國【句】「よみ黄泉」に同じ。【古
語】記「月讀命(つきよみ)に宜りたまはく、
汝(み)が命は、夜の食國を知らせと事依
さして」

夜はすがらに【句】「よもすがら(終夜)に
同じ。【古語】古今「戀ひ死ねとするわ
ざならしめば玉のよるはすがらに夢に
見えつつ」
夜光る玉【句】「夜光(よ)の玉」に同
じ。源氏「若君は、いとよいとも美しげ
に、夜光りけん玉の心地して」
夜を晝に【句】次條に同じ。増城二條
院を、いみじう造らせたまひて……、
夜を晝に急がせたまふ」
夜を晝になして【句】「夜」を晝に
してに同じ。竹原「男どもの中にまじ

よる

りて、夜を晝になして取らしめたまふ」
よる 寄る【動四自】「近づく。接近す。
【相】近づくて、一つになる。あつまる。
【多】集合す。【重】重なたたまふ。【敏】
が寄る。【四】多くなる。増す。加はる。
「年が寄る」【寄】進せらる。寄贈せらる。
宇治庄など寄りぬれば、別當出て来て」
【片】端に近づく。かたより。偏(ひと)す。
もたれかかる。よりかかる。【倚】凭る。
憑る【倚】道のついでに訪ひたづぬ。
立ち寄る。よぎる。【神】靈、物氣(き)。
など、乗りうつる。つくかかる。【憑】
【寄】弓張の梓にもよればとぎす」
【寄】寄る。依頼す。【依】頼る。
縁る」【縁】き従ふ。萬葉山川も依りて
仕ふる神の御代かも」【考】が及ぶ。思ひ
つく。思ひ寄る。紀「うらぐはの木よる
まじき河の隈限(か)よろぼひ行くかも」
寄ったか見たかに【句】「買手が近寄
りて、その品を、一目見るや否や、購ひ
去る意」商品の、店頭に並ぶるや否や、
買れゆく形容。取ったか見たかに。
寄って附く【句】「よりつき(寄附く)に同
じ。諸國物産の助は、寄てつく事
ならぬ程の美少人を」
寄らず觸らず【句】「離れてゐて、關係
せず。あたりさはりなく。局外。生寫
眞語」値くまで、意地持つねちけ者、寄
らずさはらず、駒澤が差圖に、お鍋が心
得て」
寄らば大木の下【句】「立寄らば大木
の下」に同じ。【諺語】
寄り四從兄弟、見れば三從兄弟【句】
世間何れの一族にも、從兄弟の關係に
ある者多し。【諺語】
寄ると、觸ると【句】「一緒に寄り集ま
ることに」
寄るも、觸るも【句】「前條に同じ。浮
世風」寄るも障るも、錢を遣ふ算段ば
かりて」
寄る所、觸る所にて【句】「到る所に
て。置土産よる所、さはる所にて取り
ひしがれ」

よる 據る【動四自】「よる(寄る)の轉義」
【も】とす。よりどころとす。根據とす。
【據】據す。依據す。【た】たてこもる。根據
地とす。【據】倉に據る」
よる 因る【動四自】「よる(寄る)の
轉義」【も】とく。原因す。歸す。ちなむ。
【人】事物又は状況の如何に關す。した
がふ。【時】場合とに由る。【人】によつて
差別を立つ」
よる 繕る【動四他】「寄るや
うにする義」ねちて交へ合はす。組み
絡み附かす。なふ。【紙】縫(ぬ)を繕る」
よる 繕る【動二自】「繕りた
るやうになる。ねぢれからまる。諸曲
木柳の繕のよれによれたる疲馬なれば」
よる 繕る【動四自】「ゆる(繕る)の轉。
【お】みの子の八節(は)のしま垣したとよみ
なるがより來(き)ば破(やぶ)れむし垣」
よる 繕る【動二自】「ゆる(繕る)の轉。
よるかゝのいけ【句】因香池【句】「地」古大和
國にありし池。法隆寺の境内にありしが
如しといふ。萬葉斑鳩(ま)の因香の池の
宜しくも君をし言へば思ひぞわがする」
よるてんかん【句】夜間癇病【句】「夜間癇病す
る癇病(せんびょう)に對して」
よるのくわんぱく【句】夜間白【句】「人」ふ
ちばあさまか藤原顯隆を見よ。
よるのねざめ【句】ものたり夜寢覺物語
【名】「書」ねざめのものたり(寢覺物語)に
同じ。

よる 夜【名】「よる」と、ひとと。晝
夜。夜日(よるひ)。
夜晝言はず【句】次條に同じ。萬葉
「ますはるのうつつしむわれは無し夜
晝言はず戀ひし渡れば」
夜晝無し【句】「夜」と晝との區別無し。
夜にても、晝にても、同様なり。五人女
五十日ばかりは、夜晝なしに、肩も替へ
ずに寝る筈に」
よる 夜晝【動】「夜も晝も絶間なく、
あけくれ。晝夜。つねに。不斷。
よるへ、寄方【名】「たよりと頼むかた。

よる

よる 據る【動四自】「よる(寄る)の轉義」
【も】とす。よりどころとす。根據とす。
【據】據す。依據す。【た】たてこもる。根據
地とす。【據】倉に據る」
よる 因る【動四自】「よる(寄る)の
轉義」【も】とく。原因す。歸す。ちなむ。
【人】事物又は状況の如何に關す。した
がふ。【時】場合とに由る。【人】によつて
差別を立つ」
よる 繕る【動四他】「寄るや
うにする義」ねちて交へ合はす。組み
絡み附かす。なふ。【紙】縫(ぬ)を繕る」
よる 繕る【動二自】「繕りた
るやうになる。ねぢれからまる。諸曲
木柳の繕のよれによれたる疲馬なれば」
よる 繕る【動四自】「ゆる(繕る)の轉。
【お】みの子の八節(は)のしま垣したとよみ
なるがより來(き)ば破(やぶ)れむし垣」
よる 繕る【動二自】「ゆる(繕る)の轉。
よるかゝのいけ【句】因香池【句】「地」古大和
國にありし池。法隆寺の境内にありしが
如しといふ。萬葉斑鳩(ま)の因香の池の
宜しくも君をし言へば思ひぞわがする」
よるてんかん【句】夜間癇病【句】「夜間癇病す
る癇病(せんびょう)に對して」
よるのくわんぱく【句】夜間白【句】「人」ふ
ちばあさまか藤原顯隆を見よ。
よるのねざめ【句】ものたり夜寢覺物語
【名】「書」ねざめのものたり(寢覺物語)に
同じ。

よる 夜【名】「よる」と、ひとと。晝
夜。夜日(よるひ)。
夜晝言はず【句】次條に同じ。萬葉
「ますはるのうつつしむわれは無し夜
晝言はず戀ひし渡れば」
夜晝無し【句】「夜」と晝との區別無し。
夜にても、晝にても、同様なり。五人女
五十日ばかりは、夜晝なしに、肩も替へ
ずに寝る筈に」
よる 夜晝【動】「夜も晝も絶間なく、
あけくれ。晝夜。つねに。不斷。
よるへ、寄方【名】「たよりと頼むかた。

よる 夜晝【動】「夜も晝も絶間なく、
あけくれ。晝夜。つねに。不斷。
よるへ、寄方【名】「たよりと頼むかた。

よろづに

よろづに 万度(副)幾たびも。あまたたび。萬葉よろづたび顧みしつゝ」よろづにせ 萬年・萬歳(名) 一萬年。まんねん。『はんせい(萬歳)に同じ。新千載「よろづとせ千とせを歌ふ聲なり神も久しく世を守るらし」

よろづに 萬に(副)様様に。種福に。花「殿のお前、よろづに思し願るに」よろづのふみほ 萬文反故(名)「書」さいかくふみほ(西鶴文反故)に同じ。よろづや 萬屋(名) 種種雑多の品を賣る店。『種種の學藝に通ずる人。よろづやまんべ 萬屋萬兵衛(名) 商家の屋號と主人の名とに擬していへる語 種種雑多の事に手を出す人を嘲りていふ語。

よろづよ 萬代・萬世(名) 限なく久しく續く代。八千代。萬世。萬代。萬葉玉くしげあしきの川をけふ見ればよろづ代までに忘れぬやも。『よろづとせ(萬歳)に同じ。萬世、よろづ代を呼ばふべき山を疊む。よろづよばし 萬世橋(名) まんせいばし(萬世橋)の舊稱。

よろひ 鎧・甲(名) 武家時代に、武士の、戰陣にて、兜と共に用ひて、身體を保護せし具。足利時代の末以後、火器の使用と共に、製作大いに異なるに至りたれど、それ以前の本式のものは、割小札(割)とて、革又は鐵の小片を、革又は絲にて縫ひ、胸の外に、袖・草摺の諸部及び籠手(籠)・脇立(脇)・腰當(腰)等の附屬品具はり、割小札の製なるが故に、伸縮自在なる上、脇立にて、右の脇を塞ぐやうにしたれば、身體の肥瘦・大小に拘らず用ひ得たれども、後世は一枚の札(を)を堅く縫ひつけて、屈伸不自



(ひ ろ よ)

よる

よるなるものとなれり。鎧の著初(句) 武家にて、十三四歳に達したる男子に、始めて、甲冑を著用せしめし儀式。撰(著)の禮。『禮部雜記「伊勢が子の鎧の著初に」鎧の役(句) 鎧を著する役。太功記「十次郎が鎧の役は、すぐに花嫁」鎧の六具(句) 鎧を著用する時の、六種の附屬品。煩當・鉢巻・連腰(腰)・佩盾(盾)・脇當・小手なりといふ。鎧・物具(句) 同義の語を重ねて、意味を強めたもの。よろひ(鎧)に同じ。盛衰記「鎧の具脱ぎおきて」

よろひ 具(名) そのふこと。そろひ。つる。『古語「落葉」この少將の君達、よろひに成りあがりたまひける」空鳥沈(沈)の桐廚子(沈)九よろひ」式部日記「御屏風一よろひを引きつぽね」

よろひあみ 鎧編(名) 編方(方)の一。表と裏とを交互に編み、出来上りたるさまは、鎧の小札(小)の如くに見ゆるもの。帽子・涎掛・手絡(手)の類に適用す。ゆきちがひあみ。『意(意)に同じ。よろひいじ 甲石(名) 幅狭き多くの板を、何れも、三四十度ほどの傾斜をなすやうに、平行せしめて、横に取り付け、日光の直射もしくは雨雪を遮るやうにし、又、各板の少しづつの間隔よりは、空氣の流通を自由ならしむるやうにせるもの。しころいた。がらりいた。はいた。よろひおや 鎧親(名) へんおや(具足親)に同じ。

よろひがた 鎧形・甲形(名) 古、近衛の官人の、五月五日の騎射に著用せし服。布絹などに、金銀の裝飾を施し、甲冑に象れるもの。よろひかた 鎧場(名) 湖の名。越後國西蒲原(原)郡の中央にある沼澤。周圍二里半弱。もとは菅原なりしに、文祿以前洪水ありし時、その水の溜滞して成りしものといふ。別稱、菱湖。よろひがた 鎧合羽(名) 桐油紙(紙)に

よる

にて、腹掛の如き形に造りたる合羽。よろひがた 鎧蟹(名) 一(動) あさひがに(朝日蟹)に同じ。よろひからびつ 鎧唐櫃(名) 鎧を入れおく唐櫃。よろひひつ。よろひき 鎧著・甲著(名) 鎧を著ること。『昔、主君の鎧を著て従ひゆき、主君、その鎧を必要とする時は、脱ぎて著せしめし役、又その役の人。東鑑「御駕(御)袋差・御旗差・御甲著等、在二御馬前」

よろひきさ 鎧疵(名) 敵より受けたる、鎧の上の疵。『に同じ。よろひきさめ 鎧著初(名) 鎧の著初。よろひきさ 鎧草・白芷(名) 〔植〕 繖形科に屬する草。高さ三四尺、下部の葉は、五小葉又は七小葉より成れる羽狀複葉にて、各小葉は橢圓形にして、鋸齒あり。葉柄の基部は鞘狀をなして、莖を包む。花は繖形花序をなして開く。原野に自生し、藥用に供す。かさもち。さばうど。さはら白芷。一名、白芷、加佐木知。『云、與呂比久散』 日たんだ牡丹(丹)を云ふ。『女(女)の語』

よろひくみ 鎧組(名) 鎧を著て組打をよろひけ 鎧毛(名) け(毛) 國を見よ(を)しげ(絨毛)に同じ。よろひくじ 鎧苦(名) 〔植〕 兜舌(舌)科に屬する地衣類。地表・樹根・岩石等に著生し、下面に、白色・壺狀の小凹所あり。上面は、少しく皺ありて、帶緑褐色を呈し、下面は帶黑色を呈す。裸子器は、鈍筒を具へたる縁部を有し、四細胞より成る無色の胞子を藏す。

よろひさき 鎧細工(名) 鎧を細工すること。又それを職とする人。よろひさく 七二職人歌合よろひさく、しかへしの物は、札頭(頭)が揃はて。よろひさう 鎧草(名) 〔植〕 よろひさ(鎧草)に同じ。よろひし 鎧師(名) 鎧づくりを職とする人。よろひつか 鎧塚(名) 〔地〕 下總國結城

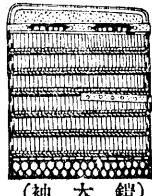
よる

〔名〕 郡水海道(道)にありて、古、田村彈正といへる者の、甲冑を収めたる所俗に彈正塚といふ。よろひつき 鎧突(名) 絶えず鎧を揺り上げて、割小札(小)などに隙の生ぜぬやうにすること。平道常に鎧づきをせよ、裏かかすなと宣へば」太刀記鎧突して立つたる體。よろひつくり 鎧作(名) 鎧を製作すること、又その人。よろひざい 具足師。よろひど 鎧戸(名) 鎧板を取り附けたる戸。しころど。がらりど。よろひどほ 鎧通(名) 昔、太刀・脇差の外に、別に佩び、敵を組み敷きたる時、刺すに用ひし短刀。刺刀(刀)の類。めてざし。『鐵の一種。太く鋭きもの。日(日)めき(小葉)に同じ。四桃の實の一種。大にして美味なり。

よろひねずみ 鎧鼠執殄(名) 〔動〕 啮齒類に屬する哺乳動物。全身角質なる多數の小板より成れる甲を被り、敵に襲はれたる時、護身の用をなす。南米・メキシコ等の産にて、穴を掘りて棲息し、夜間、出て、小蟲・果實・樹根などを食す。數種の別あり。あ

よろひのおほそて 鎧大袖(名) 鎧の左右に別に著く大袖。よろひのわた 鎧渡(名) 〔地〕 大條を見よ。江戸ゆき「南茅場町、... 鎧の渡あり」

よろひは 鎧橋(名) 〔地〕 往古、この邊入江にて、源賴義朝臣奥州攻の時、俄かに風浪起りしより、鎧を沈めて、龍神に祈りしより、のちと傳ふ「東京市日本橋區にある鐵橋。日本橋川に架り、南茅場町と小網町とを連絡す。昔は渡船にて兩岸を連絡し、鎧の渡と呼ばたり。よろひはめ 鎧初(名) 鎧の著初(初)に同じ。曾我五人兄弟「十一歳の初元結甲初の御祝儀」



(袖 大 鎧)



(れたたびひろよ)

よろひ びたたれ 鍔直垂 (名) 直垂の一

種。錦・練絹・生絹

(き)などにて

仕立て大將

の、鍔の下に

著るもの。袴

短く、袖と裾

との端を、括結(くわつ)

にて括る。戰袍。盛衰記「蜀江の錦の鍔

直垂」

よろひ びつ 鍔櫃 (名) ぐそくびつ (具足櫃

よろひ ぶきやう 鍔奉行 (名) 鎌倉・室町

兩時代の職制の一。甲冑に關する事を沙

汰せしもの。もと旅行の時の臨時の設置

に過ぎざりしが、後には、常設のものとな

れり。物具(ものぐ)奉行。具足奉行。

よろひ まど 鍔窓 (名) 鍔戸を取り附け

たる窓。

よろひ むじ 鍔蟲申蟲 (名) かちゅう(甲

蟲)に同じ。當流小判判官「矢竹心の鍔蟲」

よろひ むじや 鍔武者 (名) ぐそくむじや

(具足武者)に同じ。太平記「鍔武者を鍔の

上に掻き負ひて、橋の上を渡るに」

よろひ もち 鍔餅 (名) ぐそくもち (具足餅

に同じ。

よろふ 具ふ 鍔四自 足りととのふ。そ

なはる。揃ふ。「古語」萬葉「大和には村

山あれどとりよるふ天(てん)の香具山(かぐり)

のぼり立ち國見をすれば國原は畑立ち立

つ」

よろふ 鍔ふ 鍔四他 鍔を著る。保馬甲

よろひ 弱法師 (名) よろほ(弱法師) (弱法

師)の約。曲曲弱法師「よろめきありけは、

弱法師(じやく)と名附けたまふは理(こと)なり」

「曲曲」の曲曲。河内國高安の里に俊

徳丸といふ者あり、父に捨てられて、盲目

となり、所をさまよひあるきしに、攝津

國天王寺にて再會し、諸共に歸國する事

を作れるもの。

りたる柳。○人の、なよなよと力なき姿

勢の譬。傾城置春童子「よろぼひ柳、力無く」

よろほ 踊 踊ふ 踊跟ふ (動四自) (踊

るめ(踊る)に同じ。源氏「衣(き)の裾を

物にひきかけて、よろぼひ倒れて」

りくねりて、倒れかかると。源氏「中門の、

いといたる歪みよろぼひて」

よろほ 弱法師 (名) 瘦せ衰へて、

よろよとせるる法師。○瘦せ衰へて、よ

るよとせるる乞食坊主。猿蓑其角「弱法

師わが門」許せ餅の札

よろん 餘論 (名) 本論を敷衍して、その

後に附したる枝葉の論。餘説。

よろん 輿論 (名) 世間一般の人の唱ふ

論。天下の公論。

よろん 輿論化 (名) 社會の一部の

者の言議が、遂に輿論となること。

よろん 島 輿論島 (名) (地) 大隅國大

島群島の一。その最南に位し、琉球の沖

繩島を距ること僅かに十海里。周圍、五

里餘。島内、輿論の一村あり。

よろん 輿論 輿論政治 (名) 輿論にも

とづきて行ふ政治。

よろめ 踏 踏ふ 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

他) 踏踏かす 踏踏かす 踏踏かす (動四

よわき 弱氣 (名) (商) 相場の、下落の時

期近しと思ふこと、又その豫想を抱く人

人。弱氣に對して「取引所の語」

よわき 弱氣筋 (名) (商) 相場の下

落の時期近しと豫想して、頻に賣り込む

人。弱氣筋に對して「取引所の語」

よわき 弱氣筋 (名) 諸曲の吟聲の優し

く花やかなるもの。(強吟に對して)

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

よわき 弱氣 (名) (商) 相場の、下落の時

期近しと思ふこと、又その豫想を抱く人

人。弱氣に對して「取引所の語」

よわき 弱氣筋 (名) (商) 相場の下

落の時期近しと豫想して、頻に賣り込む

人。弱氣筋に對して「取引所の語」

よわき 弱氣筋 (名) 諸曲の吟聲の優し

く花やかなるもの。(強吟に對して)

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

の、細き部分。おびし。一代女わが

弱腰を、しとやかに扣(く)きて」

よわ 弱腰 (名) 人體の、腰の左右

よわ

同じ。(強弓に對して)

よわよわ 弱弱【貌】いかにも弱々なるさま。(強強に對して) 著る運盡き果て候うて、力弱弱と覺え候うて。

よわよわじ 弱弱し【形二】いかに弱よわよわじ 弱弱し【動四自】極度に衰へ弱る。極度に困る。困りぬく。

よわよわ 弱聲【名】衰へ弱る聲。新六「夏深き梢の蟬のよわり聲只山里のひぐらしぞ鳴く」。

よわよわ 弱拔く【動四自】よわよわきよわよわはつ 弱果つ【動下二自】よわよわき(弱切る)に同じ。

よわよわめ 弱目【名】丁度弱りたる時。弱りたる間際。よわめ。

弱目に祟目【句】泣面【ひび】に蜂が螫すに同じ。【諺語】

弱目の靈怪【句】前條に同じ。【諺語】

よわる 弱る【動四自】弱くなる。衰弱す。新古今「きりぎりす夜寒に秋のなるまに弱るか聲の遠きかりゆく」。

財政などおとろふ。掛け衰ふ。【厄介に思ふ。こまる。】

よお 夜居【名】夜間、詰めて寝ねざること。【古語】

【僧が、夜、加持・祈禱などのために、側に居ること。源氏「世にかしこきひじり……今は、夜居など、いと堪へがたう覺え侍れど」。

源氏「夜居の加持の僧」の略。撰記「自今夜請・教靜阿闍梨、爲「夜居」。

よお 餘威【名】後代まで残れる威勢。

よおん 餘韻・餘韻【名】後までも残るひびき。餘音【ひびき】。

よおん 餘韻【名】言外の趣。餘情。

よおん 節折【名】古、六月と十二月との大祓の時、命婦【みことめ】の竹の枝にて、天皇及び中宮・東宮の御體の長をはじめ、處處の寸法を取りて、宮主【みやぬし】に切りあてがはせ、御祓をなせしこと。

節折の藏人【句】次條に同じ。其【み】な月・しはすの晦【くさ】のよをりの藏人。

節折の命婦【句】節折の時に、その事に仕ふる命婦、なかとみめ。建武年中行事「よをりの命婦、竹を持ちて参りて」。



【發音】行第一の音。子音rが母音aに結び附き、rの音が、固有の國語に於ては、現すところと記すとの兩法あり。本書は、前者に依れり。【一語の中に、ちの直下にう又はふの續く時は、通例相合して、下の長音に發す。例へば、からうじて(辛うじて)らうじん(老人)さうふ(掃ふ)らうそく(蠟燭)をカロオジテカロオジン。トロオロオックと發音する類。但し、そのふが四段活用動詞の語尾なる場合には、口語にては、ふをうと發音し、その直前の音と音節を分ちて發音す。例へば、さうふ(浚ふ)らうふ(貰ふ)をサラウ・モラウと發音する類。【字源】平假名らは漢字「良」(吳音ラウ)の草體、變體平假名をも同字の草體、發は「羅」(漢・吳音共にラ)の草體、萬葉假名としては、前記「良・羅」の外、字音に據れるものに「邏」「囉」「囉」「浪」「郎」「朗」「樂」「蘭」等、訓を取りたるものに「等」あり。

ら 羅【名】薄く綴りたる絹布。うすもろ。うすはた。うすぎぬ。源氏御經よりははじめ、玉の軸らの表紙。【鳥を捕ふる網。とりあみ。かすみ。ひるてん。】

ら 羅【名】(動)驢馬と馬とを交尾せしめて得る獸。通常、牝馬に驢馬の牡を配して得。體は馬に似て、勞働に耐ふ。驢馬の牝に牡馬を配して得るものは、體格、驢馬に近し。らば。

ら 螺【名】(動)赤螺【せう】長螺【ちやう】法螺【ほう】蓋の一枚ある貝の總稱。まきがひ。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

ら 螺【名】(動)「螺」(動)「螺」の漢名。

らあけん

いふ語。ども。など。等【し】。【等】「少女」ら「汝らたち」。

らあけん(荷「Laden」)【名】昔舶來せし、一種の羅紗。らんけん。

ら い 羅衣【名】うすものにて仕立てたる衣服。うすもの。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。

ら い 羅衣【名】「羅」(動)「羅」の漢名。